타4R92

んそんびろ らそるく

美奮
談闘

329-5

松島剛監修
學窓餘談社譯

奮闘
美談

ろびんそんくるそう

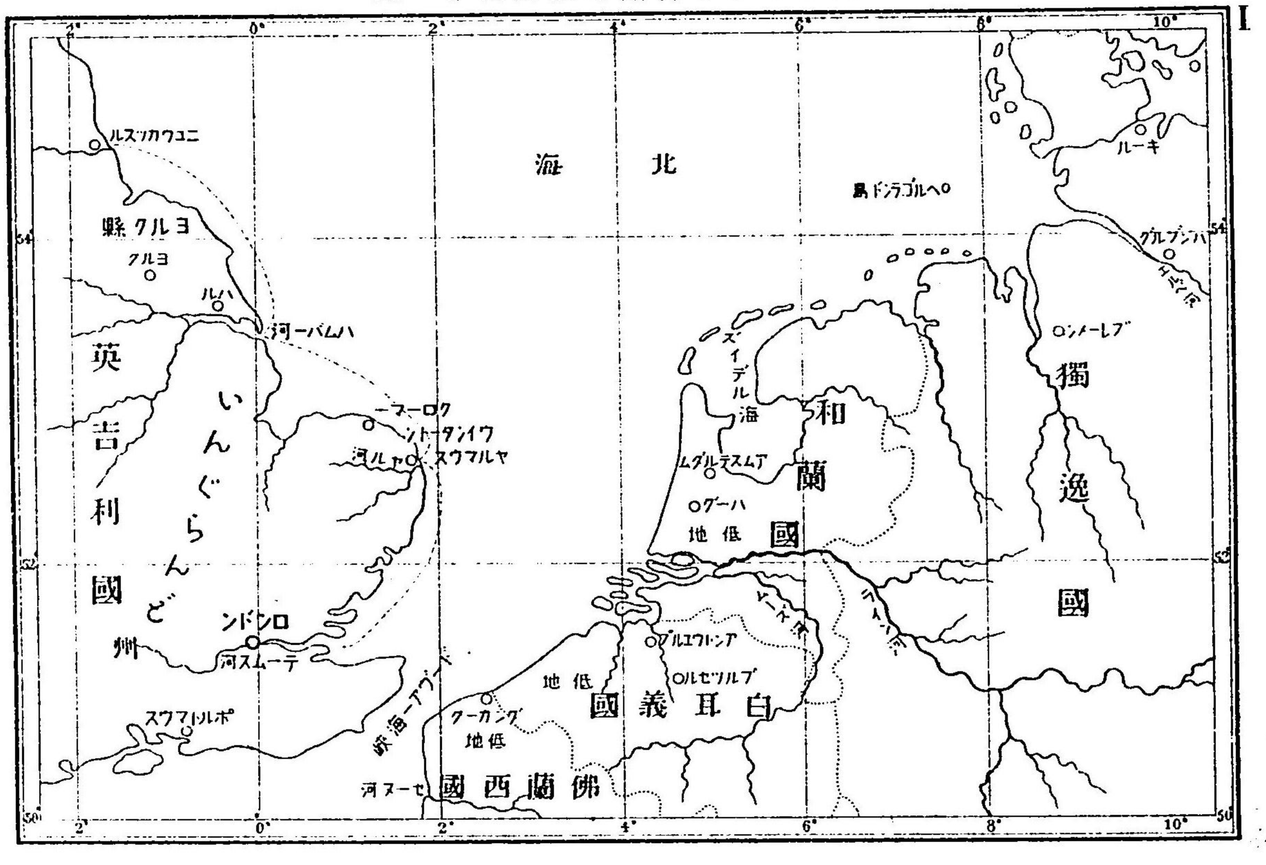
明治
44. 1. 12
内交

春陽堂發行

鐵田江商事

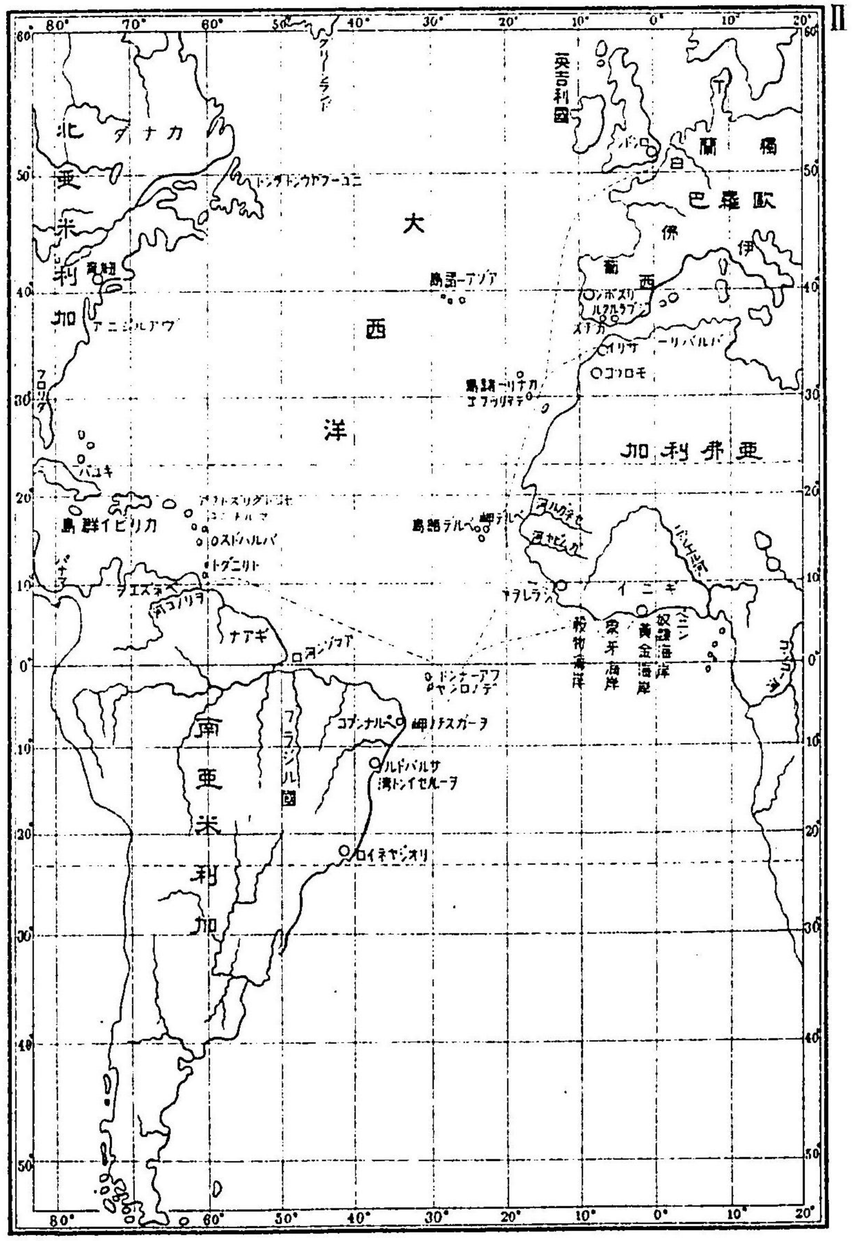
著者ダニエル、デフォー肖像

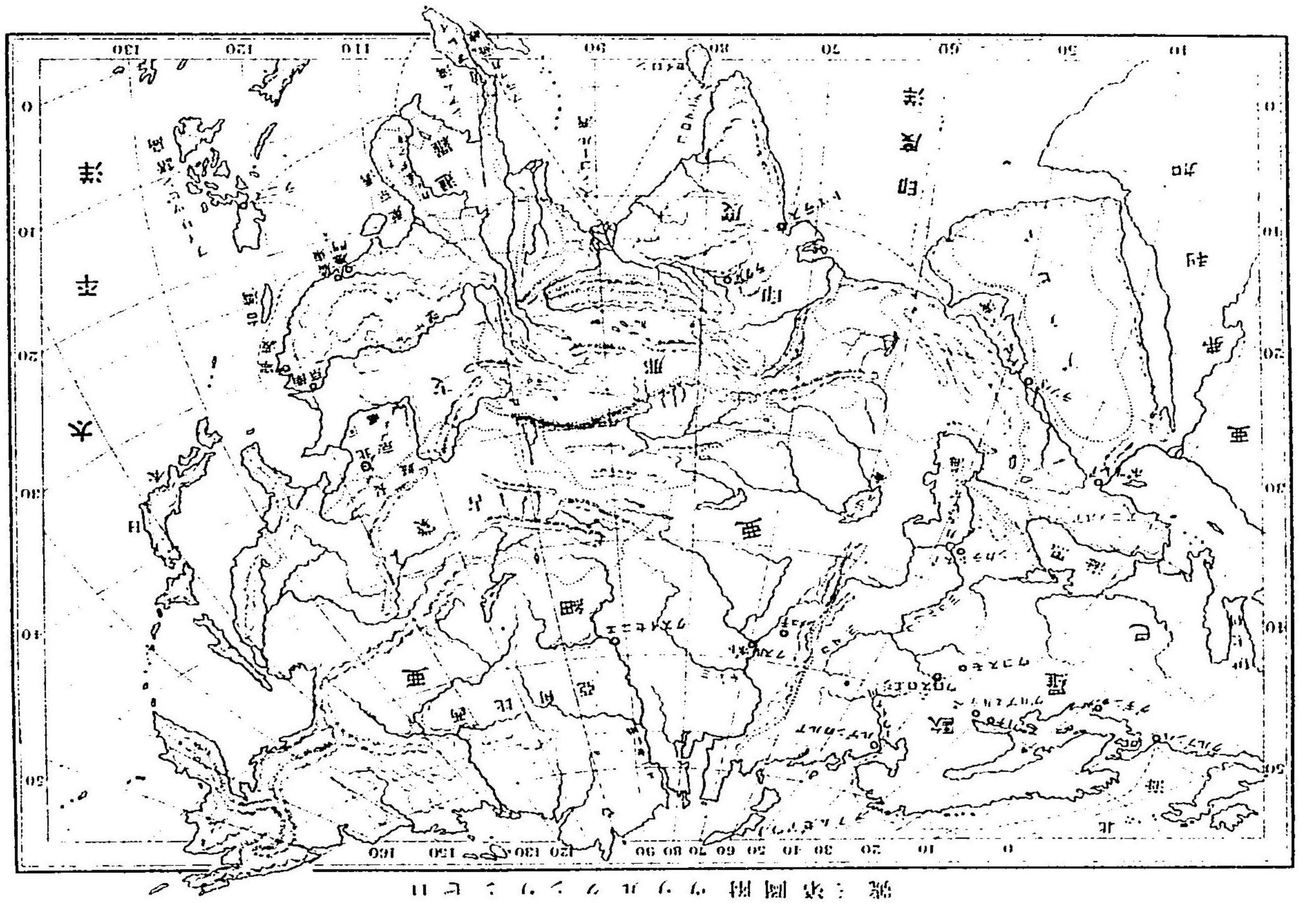
ロビンソン冒險奇談附圖第一號



I

ロビンソン冒險奇談附圖第二號




太平洋
印度洋
亜細亜
亜細亜
亜細亜

合卷序

本書は、始め三卷に分割して出版せんと欲し、第一卷は既に昨年四月これを發行したり、然るに是れより先き第一卷の印刷將に終らんとするに臨み、その印刷所國光社が、不幸にして火災に罹りしため、其印本の一部分と、木版と紙型の全部亦烏有に歸したり、故に爾後第一卷の需要あるも、之を再版に附するを容易ならずして、心ならずも愛讀家諸彦の希望に背きけるが、その間亦成るべく全部を合卷として、一時に之を發行せんことを希望する者少からずと聞きしのみならず、發行書肆亦此の如くして、成るべく價を廉にし、以て愛讀家の眷顧に報いんとするの意あり、幷て譯者に謀る所ありしかば、今茲に全部

の稿成るに至り、之を合卷として發行せしむることゝはなせり。

次に本書は、昨年分冊として初卷を發行せし時は、「奮闘の生涯」と題せしが、他に類似の名稱を冠する書ありて、彼此混同し易きを恐れ、今は單に「ろびんそんくるそう」と改稱したり、讀者請ふ此意を諒せられよ。

明治四十三年十二月

譯者識

序

英國の碩儒ジョンソン博士嘗て言へることあり、「ロビンソン、クルソウ(Robinson Crusoe)」「ドン、キゾーテ(Donquixote)」「ピルグリムス、プログレス(Pilgrims Progress)」の三書を外にして、讀者の愛讀に更に永く價するものは人間の著作物の中に皆無なりしかと。而してセルバンテス及バンヤンの此の二著も亦二三百年を距つる今日に至るまで、廣く世に行はれ、外國語に翻譯せられたるもの少からざるべけれども、デフォーの本著「ロビンソン、クルソウ」の如く、弘く愛讀者を有するもの、蓋しこれあるなからん、宜なるかな我國に舶載せる刻版を算ふるも、尚ほ十指に餘るの類あり、而して其然る所以は抑も何ぞや、思ふに世人は動もすれば本書を目して、單に奇聞珍談を以て滿されたるものと憶斷するが如し、いかにも一方まゝ之を看れば、本書は一種の奇談と稱するも可ならん、奇想妙案の天外より飛び來り、地下より躍り出づる、千態萬狀殆んと端睨すべからざるものあり、然れども熟々本書を翫味するに、その間に深遠雄大なる精神の橫溢せるものあり、決して尋常なる小說、稗史の類にあらず、蓋し著者デフォーは第十七世紀の中頃

に生れ、七十年の生涯は、多くはこれ轗軻不遇にして、奮戰格鬪殆んと寧日なく、或は商業に失敗して、十數萬圓の債務を荷ひ、或は宗教論に禍を買ひて、頭手架の刑罰に處せられ、或は讒謗律に觸れて、巨額なる過料を課せられ、或は牢獄に投ぜられ、或は政論に四面敵を受くる等、その一代の境遇は、實に慘憺たる悲劇に外ならず、而して此る艱難の間に處して、毫も富貴に諛らず、權勢を恐れず、孜々として自家の主義を唱道し、常に健筆を雜誌に揮ひ、深思を著書に凝らし、その述作する所、實に二百餘種に及べり、而して本書は其の第百六十七回の著作にして、氏が六十歳の時に世に出て、著者の名聲をして、不朽ならしめたるは、實に此書なるを以て、その思想の圓熟し、叙述の人情世故に契合せると、素より論なきなり、故に本書は、かの冒險航海者アレキサンダー、セルカークの實歴譚等を基礎として、異域、絶島に於ける行險奮鬪の生活を、圓轉豁達の筆を以て巧妙に、緻密に叙述するの間、事に託して千古不磨の教訓を挾み、諄々として說き去り說き來る所、吾人をして覺えず感憤啓發せしむるものあり、されば本書は之を讀む者をして、海事の思想を發揚し、勇敢の氣象を涵養し、堅忍の精神を振起し、又は勤勞の氣風を養成せしむる効あるのみならず、近世滔々として社會を風靡する、かの淫邪の濁流を清め、不平不滿の惰氣を排し、若くは煩惱の迷夢を啓らき、其他陰に陽に仁慈、義俠、忠信、寛容、自省、克己、自重、注意等の諸德を鼓吹し、以て世道、人心を裨補すること誠に少小にあらず、是れ即ち吾人が此書を以て、奇聞珍談の外に、一種侵すべからざる精神を包藏せりといふ所以にして、これ亦本書が卓然として長へに群籍の中に一頭地を拔く所以ならん歟、本邦既に二三の譯書あるも、概して一部の抄譯にして、或は充分に此精神を發揮するに足らざるの恨なしとせず、社中竊に之を遺憾とし、淺劣を顧みず、今茲にその全豹を譯述して、之を我國の青年男女に寄與す、冀くは此書によりて、幾分かその志氣を鼓舞することを得ば幸なり。

明治四十二年二月

學窓餘談社

著者ダニエル、デフォーの小傳

「ロビンソン、クルソウ」の著者ダニエル、デフォーは西暦一千六百六十一年英國のロンドン市に生れたり。父はセトムス、フォーと稱し、屠牛を家業とし、ロンドン市の一公民なりき。氏は教育をストロック、ニュインダトンの中學に受けしが、後年氏の自ら說く所に據れば、その受けし所の教育は充分にして、且つ教師の訓導宜しきを得たりといふ。その文章著作に由りて之を觀察するに、氏の大體に關する知識は、當時秩序ある教育を受けたる多數の人士に比して、遙に該博なりしが如し。然れどもその修むる所を見るに、特に專門の學科に關し深遠なるものはあらず。氏は夙に眞大小商人となり、一千六百八十八年の頃は、盛に莫大小問屋の業を營み、葡萄牙、西班牙等の諸邦に往來しけるが、一千六百九十二年大に事業に失敗し、十七萬圓の負債を荷ひけるも、氏は業務上忠直なりしを以て、債權者の處置寬大なりければ、後に至り此債務をば果したりといふ。されども此時より事業を以て生計を營みたり。是れより先きウイリアム第三世皇帝の、和蘭國より身を投じて英國の帝位に就くや、國民は帝を外國人として嫌惡しければ、氏は帝の

爲めに種々の小冊又は雜誌を發行して、大に帝を辯護しけるが、同帝の崩ずるに及び、氏はその後援を失ひ、四方に敵を受け、辨難攻擊これ日も足らず、常に困難の位置に立てり、殊にかの著名なる Shortest way with the Dissenters といふ小冊を出版して、英國の政敎に就て論ずるや、女帝アーンの怒を招き、氏は己れの危きを察知して潛伏しけるが、時の政府は、一千七百三年一月十日の「ロンドンガゼット」新聞紙上に、左の如き趣味ある廣告を掲げて、氏を逮捕せんとしたり。

「ダニエル、デフォー一名デフーとも稱する者の義、Shortest way with the Dissenters と題する一冊子を發刊して、濫りに侮辱煽動を事とする段その罪輕からず。本人は身の丈中等にて痩せたる方、年齡凡そ四十歲、面色幾黑く、毛髮暗寫色、但假髮を着せり、鼻端屈曲し、顎尖り、眼色灰色にして、口邊に一個の大黑子あり、出生地はロンドン市にして、數年間コルンヒルにて莫大小商を業とし、現今はニスセックスに煉瓦及瓦工場を有せり。何人にても、右ダニエル、デフォーなる者を發見して、その趣きを官廳に密告に及び、本人逮捕せらるゝに於ては、五十磅(凡我五百圓)の賞與をあて行はるべし、此賞與は女皇陛下の命により直に下渡さるべし」

此廣告の掲載せらるゝや、氏は不幸にして發見せられ、吟味の末頭手架の刑に處せられ、罰金を課せられ、獄舍に投ぜられたり。斯くて同年七月三十一日の「ガゼット」新聞紙は報じて曰く

「本月二十九日ダニエル、デフォー、一名デフーは、コルンヒルの「ローヤルエキスチェンヂ」(官衙)の前に於て頭手架に掛けられたり、(中略)昨日法廷の宣告に由れば、その罪名は一冊子を發行して、讒謗及び煽動の記事を掲げたる(略)にありて罰金三百「マーク」を課せられ、七年間監視に附せられ、その保證人を立てしむることゝし、その手續の結了するまで、入獄を命ぜられたり」

(註)頭手架の刑とは一枚の木板に穴を穿ち、頭と兩手首とを出るやうにし、路傍に面して立たしむるものにて、一種の曝刑なり。

此くの如く政府がデフー氏を罰すること、餘りに苛酷なりければ、この處刑の目的は全く効を奏せず、却て氏の爲めに公衆の同情を喚起したり。殊に斯る處刑は、英國にては極めて稀に行はれしを以て、公衆は半ば好奇心に驅られけん、數千の男女は氏が毎日ニューゲイト監獄より頭手架の所まで、送りやらるゝとき、之に隨伴して氏を保護し、決して侮辱を加へしめざりしのみならず、氏が監獄に

遂り遷ざるゝ時は、常に萬歳を唱へて氏に對し敬意を表したり。又時方に盛夏の候なりければ、群衆は其邊に咲き亂れたる種々の草花を採り來りて頭手架を裝飾し、或は氏の爲に茶菓を供するなど、大に氏を慰撫せりと云ふ、實に奇怪なる悲曲といふべし。かくて刑期滿ちて放免の後は、ロンドン市より凡七十哩を距つるカスイ、セントエドモンドと稱する閑雅なる町に引退し、絶えず筆を揮ひて英蘭二州一致の爲めに努力したり。然るに一千七百十三年には、政事雜誌の爲に、再び獄に投ぜらるゝに至りしが、ヲタズフォード卿の斡旋によりて幸に放免されたり。一千七百十五年には、「ファミリー、インストラクター」(家庭教師)と稱する宗教雜誌を出版し、頗る功果を收め、それより一千七百十九年に至り、此の最大著作なる「ロビンソン、クルソウ」の物語を公にせり、本書の第一編は同年四月廿五日に發行せられ、數月ならずして第四版を重ね、次で八月に至りて、第二編現はれ、其後十二年間を經て、第三編出でしが、此第三編は、主として著者の沈思錄とも稱すべき書にて、再刊を見るに至らざりき、されば現今廣く愛讀せらるゝ本書中には、此第三編を包含せず、氏が著作家として、芳名を千載に垂れたるは、實に此著作にあり、其詳細敍述に就ては、種々の批評ありと雖も、要するに此書は冒險航海者アレキサンダー、セルカークがジュアン、フエルナンデズの孤島に四年四ケ月間獨棲せる實歷談などを基礎として、著者が群籍を渉獵して得たる該博の事實的知識に加ふるに、當時既に發達せる天文、地理、博物、物理、化學、等の學理を適宜に應用し、併せて之に雜ゆるに自己が慘憺たる經歷中に鍛錬せる、圓熟の思想を以てせるに外ならず。されば此書には、かの八犬傳、水滸傳の如き、荒唐無稽なる事柄は、毫も之れを載せず、今日より之を觀察するも、その記事は能く事理に合し、人情に適し、殊に世の風敎を裨補すること鮮少にあらず、且つ男女を問はず、老幼を論せず、之を讀む者は、趣味の津々として盡きざるを感ぜん。氏は此他の小說、其外政治、社會、宗敎、敎育、風俗、實業等に就き著述せる書籍、雜誌頗る多く、一々枚擧に遑あらず、その卷數或は二百十卷に及べりと稱するものあり、或は二百五十四卷なりといふ書あり、兎に角その思想の豐富にして筆力の雄健なる、他に多く匹儔を見ざるなり。又は氏が獄中に在る時始めて發刊せる雜誌「評論」には、道路、保險、養育院、中學校、女子高等女學校、兵學校、等種々なる企業に就き論議せる、其中に貯蓄銀行の創立を促したる一文あり、始めて貯蓄銀行の創立を見たるは、十八世紀の末葉なれど、氏は十七世紀の末に於て、既に此創意を發表したり。

デフォー氏の外貌と事業とは、大要以上に述ぶるが如しと雖も、氏の内心如何も、これ亦讀者の知らんと欲する所なるべければ、今左に氏自身の言を引用して其一斑を示さん。氏曰く、予は事の成行如何には毫も頓着せず、唯正義と眞理との指導により、これ我の義務なりと思考するものは、世論と非難とを少しも顧みず、斷然之を行ひ、且言はんとするなりされば予は世人の評説には全く關係せざれば、何人にもあれ、此の如く濫りに予を非難せんとて、喋々喃々する輩は、予の如き少しも世の毀譽褒貶に頓着せざる者に向て、徒らに言語を費やさんよりは、寧ろその方面を轉じて、感情を泄らすこそよけれ。予は能く世事を知悉せり、これに善事を望めども、惡事には關するを欲せず。我は不思議の生涯を送り、種々樣々なる境遇を經たり。予は嘗て予が生涯の境遇を概括して、左の如く歌ひたり。

浮沈窮達雖若我
貧富往來十三回
No man has tasted differing Fortunes more;
And thirteen time I have been rich and poor.

艱難の學校は、予に哲理を敎へたること、中學校に勝れり、予に神學を授けたること、說敎壇よりも多大なり。予は獄舍に在りて、進退自在なる戸外に、自由の存立せざることを知りたり。予は此世の順境と共にその逆境をも看たり、而して僅に一歲を出てざる間に、帝王の金殿とニューゲートの監獄との相違を味ひたり。抑も予の甚しく困苦を嘗めたるは、實に主義を執りて屈せざりしが故なりと。

これ嘗て人の頭腦より發露したる最も喜ぶべき一小說「ロビンソンクルソウ」の著者が經驗せし所なり。嗚呼デフォーの如きは誠に一代の志士と謂ふべし。

第十三章　英國の輿論と物情……一〇八
第十四章　アレキサンドロウの役……一一五
第十五章　一戰後のアレキサンドロウ……一二一
第十六章　露軍に於ける曼軍及埃軍……一二五
第十七章　露兵の夜襲……一二八
第十八章　曼の第一軍の退却……一三八
第十九章　白耳義國都の激昂……一四〇
第二十章　四國艦隊大に北海に會す……一五〇
第二十一章　佛國巡洋艦の退回……一五六
第二十二章　英の旅艦の上に於て……一六四
第二十三章　小亞細亞に於ける露土の對陣……一六八
第二十四章　露兵の敗退……一七四
第二十五章　スキエルニースの大戰……一七九
第二十六章　伊太利の出師準備……一八六

第二十七章　戰略會議……二〇一
第二十八章　伊太利が進兵の道筋……二〇四
第二十九章　コステベルの役……二〇八
第三十章　五月九日の夜の英國上院……二一三
第三十一章　第一軍團の出師準備……二二二
第三十二章　英國に對する露國の開戰布告……二二六
第三十三章　英國の開戰布告……二三一
第三十四章　現時の局勢……二四一
第三十五章　英國地中海艦隊の準備……二四五
第三十六章　サルヂニヤ沖の會戰……二五五
第三十七章　佛艦の退走……二六二
第三十八章　佛曼の對陣……二六七
第三十九章　ヴアウクスシヤンベンの役……二七九
第四十章　マシヨウルの役……二九二

第四十一章　極東の役……二〇五
第四十二章　東歐の事變……二一五
第四十三章　英國の陸兵マルモラ海に着す……二一九
第四十四章　濠洲に於ける人民の感情……二二四
第四十五章　海軍本部よりの訓令……二二四
第四十六章　曼佛の對陣曼軍の前進……二二六
第四十七章　第二及び第三軍長驅巴理に向ふ……二二九
第四十八章　佛國首都に向ふ……二三二
第四十九章　ブルガリヤに於ける英軍の野戰……二三五
第五十章　ヴァーナの砲擊……二六〇
第五十一章　露軍の敗績……二六九
第五十二章　コスルヂの役……二七二
第五十三章　カイロに於ける人情の狂熱……二七七
第五十四章　埃及に於ける佛人の陰謀……二八八

第五十五章　ワーヂイ、ハルファ附近の激戰……二九四
第五十六章　巴理の圍解く……四〇四
第五十七章　ド、ガリフェー將官の進擊……四一〇
第五十八章　快活なる騎兵戰鬪……四一四
第五十九章　佛軍の大勝……四一八
第六十章　全局の形勢……四一八
第六十一章　佛軍シーラ、レオンノ占領……四二五
第六十二章　ヘラットの亞國……四二七
第六十三章　加拿太太平洋鐵道に依り兵を印度に送る……四四〇
第六十四章　休戰……四四四
第六十五章　英國と露國……四四八
第六十六章　英國の聲力……四五二
第六十七章　大四國……四五六

終

第五段　地震に遇ふて百日の功を空うし病にかゝりて救濟の眞義を悟る　一〇九

第六段　心機一轉して永住の覺悟を定め三年の春を迎へて季節の變化を知る　一三八

第七段　器具の製作に歳月の過ぐるを忘れ身を孤舟に托して萬死に一生を得たり　一六九

第八段　生存の爲めに努力して人生の眞義を悟り人の足跡と骸骨を見て蠻人の來襲を恐る　二〇四

第九段　蠻人の防禦に苦心して殺戮の非を悟り復びその襲擊を決して蠻人容易に來らず　二三七

第十段　孤島脱出のために一僕を得んと欲し希望空からず遂にフライデイを得たり　二八四

第十一段　忠僕の談話を聽きて渡海の意を決し更に二人の從者を得て益脱出を計る　三二二

第十二段　脱出の策を講じて萬一の僥倖を頼み機緣漸く熟し故郷に向て纜を解く　三五七

第十三段　三十五年を經て始めて故郷に歸り舊友を訪問して歸路奇難に遭ふ　四〇四

第十四段　山中猛軍に襲はれて萬死に一生を拾ひ再び故郷に歸りて家庭に居ること七年　四二三

第十五段　再擧の雄志遂に禁じ難く途上逆風に遭ふて難船を助く　四四五

第十六段　航海の途上難船を助けに着す　四七二

第一段

父母の慈愛深き教訓に背き海洋に航して蠻人に捕へらる

我は紀元一千六百三十二年に、英國のイングランド州、ヨルク市の一良家に生れたり。我父はもと獨逸國ブレーメン市の出身にて、此國に來り給ひたる當初は、ヨルク市より程遠からぬ、一海港ハル町に住ひ、商業を營みて、幾多の資產を得給ひ、後に廢業して、母の故鄉なるヨルク市に其居を移しけるが、母の親族をロビンソンと稱し、其地方の名族なりければ、我もその緣故にて、ロビンソン、クロイツナエルと呼ばれたり。然れど、英國に珍しからぬ言語の訛傳より、今は我一族は、人にクルソウと呼ばるゝのみならず、自らも此く稱へ、或は此く書め、又我朋輩も、常に我を呼んで、クルソウとは云へり。（註、第一號地圖參照）

我に二人の兄あり、其一人は、嘗て彼の著名なる、ロックハアト大佐の指揮に屬せる、フランダア州（今の白耳義國領）駐屯英國歩兵聯隊の中佐なりしが、西班牙人との戰役中、ダンカア港（今の佛國領）の近傍にて戰死せられたり。第二の兄は其行方定かならず、父母が我の踪跡を知り給はざりしと同じく、此兄は如何になりはて給ひしか、我は嘗て聞きしことなし。

我は第三子にて、何の職業も習覺えざりしかば、夙く少年の頃より、四方を歴遊せんとの志望を起しぬ。昔氣質なりける我父は、家庭教育は更らなり、當時行はれたる田舍の小學教育を與へて、我に相應の學問をなさしめ、覓には法律家に仕立ん御心なりけれど、我は海洋に行く外は、何事にも、滿足すべくもあらず、只管此志を達せんと思ひ、父の希望はおろか、その嚴命にさへ隨はず、又母の懇請も、朋友の忠告も、毫じも顧みず、後年我身の遭遇ふべき、無憖なる境涯を目指して進まんとせる、我性癖の頑固なりしぞ、是非なかりける。

我父は賢明且老實に坐しければ、我が意圖を疾く察し、常々眞實に諭し給ひけるが、一朝痛風の爲めに、一室に垂れ籠めて坐しけるとき、我を側近く招き、最熱心に訓誡給ひけるやう、汝は父母の許に居り、故郷に住ば、人々の懇なる引立により、事業を營み、家産を興し、安樂に一生を送ることを得べきに、さは爲さずして、遠く他郷に行かんとするは、單に四方を遍歴せんとのみにはあらざるべし、その事の理由は如何にぞや。凡そ世には危險を冒して、外國に征き、常道を離れて、大事を企て、自ら名聲を揚んとする者なきにあらねども、其は困窮落魄せる徒にあらざれば、更に資産を增殖んと欲する輩の所爲のみ、此は何づれにしても、汝には似合しからず、汝が力の遠く及ばぬ所か、又は汝よりも遙に劣れる者の爲すべき仕業なり。汝は幸に中等社會に生れ、世の謂はゆる下等社會の上に位せるものなり。父は多年の經驗に由りて熟く知れり、中等社會は人世の最も良き境遇にて、幸福最も多く、しかも勞働者の如き、不幸艱難に遭ふことなく、又上等社會の如く、驕奢、嫉妬の妄念に惱まされ、或は非望野心の爲めに、苦しめらるゝことなし。中等社會の此くも多幸なることは、他人の皆羨むを以ても察知せらるべし。夫の一國の帝王等が、己れが生ながら人君と仰がれ、權勢の强大なることを、却て薄運なりとて歎き悲しみ、寧ろ貴賤上下の中間に立んことを望まれける、その例も尠からず。又古の賢哲も、貧しからず、富まざることこそ、願はしけれと宣へり。されば之を以て眞實なる福祉の標準なりと認めらるゝこと、亦明確ならずやと。

父は又語を繼ぎて宣ひけるやう、凡そ世の艱難辛苦に會ふ者は、上位と下位とに居る者なり、其中間に位する者は、災害を受くること甚稀にて、貴賤兩端の如く、屢浮沈する恐もなく、又奢肆、放逸を事として、不德の世路を渡るが爲めに、或は衣食に缺乏きて、過度に勞動するが爲に、自然に疾苦を招く徒輩と異ひ、心身ともに病魔、憂懼に罹ること少し。されば世の人は、中等の

生活を送る者をもて、諸の福德、諸の快樂を享け得る人類と認むるなり。諺にも平和と滿足とは中等の資產ある人に奉事く、婢女なりと云へり、常住、坐臥、中庸に適ひ、心身平穩、健全にして、交友の歡樂を享くるが如き、凡べて人として、皆冀はぬはなき快樂は、中等の生活に伴なふ幸福なり、能く此道を踏み迷はぬ人は、無事平穩に此世を渡り、常に愉快を覺え、手足若くは頭腦の勞働に因りて、決して煩悶することもなく、衣食の爲めに奴隸の境涯に賣らるゝの恐もなく、其他種々煩雜なる事情に經はれ、爲めに靈魂の平和と、身體の慰安とを奪はれ、又は嫉妬の情炎に燃やされ、或は徒らに大事を企てゝ、煩悶するなどのことなく、安泰、平和に此世の波風を涉り、辛酸を知らずして、靜に人生の甘味を嘗めつゝ、是れ眞の幸福なりと、心に覩じ、日々の經驗を積みて、益〻其の然る所以を悟らんことこそ、父が今切に望む所なれと、諄々として說き示されたり。

父は此く言ひ了りて、尙ほ確と我を擁きしめ、最慈愛深き態度にて、汝血氣に速りて、造化の恩寵により、自身の享け居る幸運に背き、自ら好んで辛苦、艱難に陷らぬやう、篤と心を用ゐよ。今幸に衣食を求むるの煩累なきも、父もまた汝の爲めに計り、父が今勸告むる、中等社會の生活を營まるゝやう、更に力を添へて得さすべし、然れど此くするも、若し不幸にして、安樂の生涯を送ること能はずば、そは運命拙なきが爲めか、又は自身の失策に因るものにて、また如何とも爲術なし。扨も父は今汝の障害となるべき事柄に就き、既に訓誡めたれば、父たるの義務は盡したり、父の責任は最早竭きたれども、尙ほ之を約めて言はん、父の指敎に從ひて家に留らば、父は汝の爲めに懇切に取行ひ得さすべけれど、若し父の敎訓にもとりて、たとひ艱難不幸に陷ることありとも、そは父の與り知らざる所なるぞと、繰かへし繰返し語り給ひ、さて最後に言辭を改め、今一例を擧げて示さん、父は嘗て汝の兄に對しても、汝に說示せし如く、常に熱心に利害を語きかせ、彼の低地職役(白耳義、和蘭邊の低地職役)に赴かぬやう、心を盡して止めけれども、青年の鋭氣禁じ難くやありけん、走りて軍隊に加はり、遂に戰死したり、嗟呼、父は朝夕汝の爲めに、幸福、安寧を祈らては、息まざるべけれども、若し無謀にも、兄の轍を踐むこともあらば、神は決して惠み給ふまじ。此くて、困窮落魄し、誰れ一人憐れみ援助るものなからん、其時に至りなば、父が今の敎訓を思ひ起して、必らず後悔することあらん、今父は特に此事を言ひさけ置くぞかしと、力をこめてのたまへり。

父の此最後の言葉は、神ならぬ我父が、自ら此くと知り給ひしにはあらざるべきも、後に至りて、これぞ誠の預言と思合はされき。實にも、父が此一言をのべ給へる時、殊に戰死せる我が兄の事を語られたる時は、熱き涙の潛々と父の眼よりはふり落つるを看たり。又父が我の後悔して誰一人我を援助るものなきを悲歎する時あらんと、語られたる時には、痛く感動して、暫噤り

給ひ、今は胸塞がりて、最早一言も述べ難しと、曰へり。

父の此訓誡に由て、痛く心を動かされたる我は、いかでか之に背くことを得べき、茲に斷然心を決め、最早海外漫遊の念を絶ち、家に留りて父が心を安めんと思定たり。然るに思ひきや、僅に數日を經る間に、此決心は忽ち失せ去りて、再び父の煩き懇諭を聽かんことを厭ひ、種々と思案の末數週日の後には、おぞくも逃亡せんとは決心してけり。されど此度は、最初思立ちける時の如く、いらだてる擧動をば爲さず、母の機嫌の常よりもよき折を見て、靜に母に語りて言へるやう、兒は一旦世界遍遊を思ひ立てより、其志望最切にして、他に一つとして、兒が終生營まんと思ふ職業なし。されば父は兒を強ひて、無職業の儘に置き給はんより、寧ろ兒が願をゆるさせ給ふに若かじ、又一には兒は既に十八歳となりたれば、今より徒弟となりて、職業に志すにも、又は書生として、法律を修むるにも、時期既に晩れたり、假令一時志を曲げて、之を爲さんとすとも、兒は首尾よく年期を勤め了らざる内に、主家より逃亡して、海洋に行かんと必定なり。唯母御よ、願はくば父に談ひて、兒をして一回航海せしめらるるやう、計らひ給へ、此くて再び家に歸り來て、復その心起らずば、誓つてその時限り、周遊の念を斷ち、人一倍出精せば、さきに失ひし時間を償ふと、何の難きとかあるべきやと、言葉を盡してぞ請ひ求めける。

此く言ひたるに、母は甚く立腹して、の給ふやう、此る事を何程父上に願ひたればとて、何が聽入れ給ふべき、汝が身に取りて、斯程に害ある事をゆるすは、汝の爲ならぬことは、父上の疾く知り給ふところならずや、父上が朝夕言ひ聽かせ給へる、慈愛溢るゝ計りの教訓に就ては、更にも言はねど、過ぐる日、父が如件懇切に、事の利害を說き聽かせ給ひてより、未だ幾日も經ざるに、汝は如何なれば、尙此る事を思ひ居るか、不思議と云ふも餘りあり。畢竟するに、若し困窮、零落し、誰あつて救助くるものなき境涯に臨まん日、あはれ父母の聽許給はざりせば、此る事もなかりしものをと、後悔することなからずやは。我身は母として、いかでか我が手を添へて、汝の滅亡を助くべきぞ、又苟めにも、父の許し給はぬに、母が之を聽きたりとは、決して言はすまじと、斷乎として我が願を斥け給ひぬ。

父への取成をば、母は此くまで拒み給ひたれども、事の顚末は父に告げ給ひしかば、父は一方ならず心を痛め、嗟歎して母に向ひ「彼は家に居らんには最幸福なるに、若し異境に赴かば、嘗て例なき、悲慘の者となるべきは必然なり、彼の願は如何にすとも許されじ」と云ひ給ひけるよし、後に至りて聞き得たり。

さても其後一年が程は職業に就けよと、種々に勸められたれど、我は頑として耳を傾けざりしかば、父母は我が意の頻りに速やるを察知し給ひ、飽くまでも拒絶まんとせられしより、父母と彼是言ひ爭ひたることも、數々なりしが、茲に不圖したる事より、遂に故郷を離れて、界境に流

浪するの機會ぞ到來しける。我は一日偶ハル町に趣きしに、當時は勿論我に逃走の企圖なかりしかど、折柄一人の朋輩が、其父の船に乗りて、ロンドン市に往かんとせる際にて、我にも同行を勸めたり、殊に航海者の常なるか、船賃を出すの要なしとて、我を誘ひければ、我は父母にも談はず、又其事を、父母に一言も云ひ送らず、父母の自然と其事を聞き給ふ時あらんと推測り、又神の恩寵も、父の祝禱も願ひもせず、我が現在の事情、並に其成り行きにも、絶えて頓着なく、一千六百五十一年九月一日、神ならぬ我は、これを凶日と知る由もなく、卒然としてロンドン行の一船にのりくみたり。思ふに、青年冒險者のいかなるものなればとて、其災厄の我如く忽焉として直ちに始まり、しかも永く續きし例は稀なるべし。さても、我等の船が、ハムバア河（註、ハル港其河岸にあり）を出づるや、忽ちに風吹き起り、波漸く立ち、最凄じき光景とは爲りにけり。我れは曾て海上に出てたることなかりければ、身體は船暈に苦しみ、精神は恐怖に打れ、何とも言はんやうなく、茲に至りて、既往の行爲を省み、勿體なくも父の慈訓にもとり、我家を去りて、子たるの義務を懈りたる、不孝の罪を天の照覽ましまして、正しく罰したまふにやと、思へばいとど空恐ろしく、父母が涙を流して、或は詰難め、或は訓諭し給ひし、慈愛の言葉、一々我胸裡に湧き出來れる當時の我が良心は、其後次第に鈍りたるに似ず、尚未だ頑陋ならざりしかば、幾々と我身を攻め、曾て父の敎誨を蔑視み、且は神明と父母とに對し、我が義務を怠りたる、その罪輕からずと思へば、最甚絶えも入るべく覺えたり。（註、第一號地圖參照）

折しも風勢益〻加はりて、波濤の起つことい〻よ〻高かりしかども、後日我が幾度も看たりし大波濤に比ぶれば、物の數ならず、又數日後に遭ひたる暴風に較ぶれば、毫しも恐るゝに足らざりしが、當時若年にして、海上の事を曾て知らざりし我には、此程の事も痛く心に感動し、波浪の打來る毎に、今にも呑まれやせんと恐れ、船の波間に落下する度に、もはや復び揚らざらんかと慄き、その苦惱譬ふるものなく、心中に誓約を立てゝ願ふやう、神若し憐みて、此航海に我生命を救け、再び陸地に我足を着くることを得しめ給はゞ、直ちに父の許へ歸り、決して再び此る危難に陷らぬやうすべしと、茲に無明の夢さめて、父が曾て中等の身分に就て語り給ひし節々の、一々合理なることを會得し、父が今まで無事安泰に此世を過し、曾て海上の暴風に曝され給はず、又陸上の厄難に罹り給はざりしことの、偶然ならざる事など思ひ合はせて、彼の衷心より誠に悔悟せる、放蕩息子の如く、父の膝下に復らんとぞ決心したりける。

暴風吹き息みて、尚ほ暫時が程は、此く着實に考へ續けゝるが、翌日風收まり、海穩かになりければ、少しく慣れて、心落着きたり。されど猶ほ少しく船暈の氣味ありて、其日は始終ふさぎ居けるが、夕刻より天晴れ、風全くなぎ、暮色うら〻かに、太陽輝々として西に沒し、翌朝も亦旭日眩ばゆく、風穏しもなく、河面鏡の如く、日光これを射る、その風趣のおもしろさ、未だ曾

て目に視ざりし絶景なりけり。

我は前夜熟睡せしかば、今は最早船暈を覺えず、甚心地よく海面を打眺め、前日までは、荒れに暴れて最恐ろしかりしに、暫時の間に、此くまでに穏に、且快く爲るものかと、不思議に感じ居たりけり。折しも初め我に勸誘て乘船せしめし我朋輩は、側近く來りて、宛がち我が悔悟の決心の變らざらんことを恐るゝが如く、我が肩を打ちたゝきつゝ、

『ヤア君、あれから如何だつたい、昨夜は必と怖かつたらう、風が少ばかり吹いたんて』

と言ひたり。我は之を聽き

『何だと、君はあれを少しばかりだなんて言ふが、大變な暴風だつたぜ』

と答へたりしに、彼は

『暴風だ、馬鹿を言給へ君、あれが暴風だつたと、エッ、あんなのは何でもないんだぜ、良船てそれで航路が安全なら、僕等はあれしきの風は、何とも思はないんだが、君はまだ新參の船乘だから、仕方がない、サア來給へ、一杯やらう、さうすりや、つまらん事は、皆な忘れつちまふよ、見給へ、何んて美麗天氣だらう』

と言ひて、呵々と笑ひたり。

悲慘の談話は之を省き、さても我等は共々水夫等の室に到りて、一杯の酒を傾け、我も半ば醉

ひ倒れけるか、此一夜の我惡行により、さきに過ぎ去りし己が行爲を省みて、悔改めんと心念も、又將來を慮りて、故郷に歸らんとせる決心も、茲に全く跡形もなく溺れ去りたり。云へば、暴風忽ち去りて、海面鏡の如く平穩に復せしが如くに、己が胸裡の急風も收り、海中の藻屑と化せんかとの恐怖も、今は總て打忘れ、宿昔心に畫き居たる希望の潮流、心に再び起來り、さきに苦痛の時、結びたる、心の祈誓も、全然これを忘れたり。勿論此際なればとて、時々彼此れ思慮らし、着實の考再び我心に起らんとせしことなきにあらねど、勉めて之を排除て、自ら心を慰めしこと、恰ら事にかこつけて、病苦を脱れんと欲するものゝ如く、只管飲酒と談話とを事として、我の所謂病患の發作を壓到つけ、此くて五六日を經る中に、我は全く良心をうち從へたり、其樣を形容せば、良心の苛責を免れんとて、強ひて自ら慰むる、彼の青年遊冶郎の願ふ所にさも似たりけり。然れど我良心の苦悶は、此れにていかでか止むべき、凡そ此る場合の常として、神は一切容赦なく、我をば見捨給ひたれば、若し此期に救ひを求めざれば、次の危難は如何ばかりぞ、世の極惡非道の輩と雖も、聲を放ちて救助を求むべき程、いと無慘なるべきは、言はでも知るべきことどもなり。

解纜の後六日目に船はヤルマウス碇泊地に來りたり（註、ヤルマウスは、ヤル河口にある般賑なる市街にて、ロンドン市及ハル町などと交通頻繁なり）。暴風息みて後は、天氣穩なりしかど、風向順ならざりしかば、船の速力遲くして、行程は短かりしが、詮術なくて、茲に錨を投ぜしに、南西の逆風尚ほ吹續きければ、七八日間此所にぞ滯留しける、その間にニューカッスル港（註、タイン河畔の要港）より來れる船舶幾多此碇泊地に入り來りたり。

（註）此ヤルマウス碇舶地といふは、船舶の皆順風を待合せん爲め、繫留する共同碇舶地なり。碇舶地とは、港の如く廣からぬ狹き所を言ふなり、第一號地圖參照。

入港の後、風力強く、四五日を經て一層烈しくなりしかば、かくは此處に、長々滯留しけるも、此碇泊地は、投錨に都合好く、港底の把捉も甚強く、恰も一の港の如くなりければ、船員等は何の心配もなく、少しも危險を感ぜず、例によりて遊戯に時日を送り居たり。然るに八日目の朝に至り、風勢頓に加はりければ、船員總掛りにて、上檣の帆を畳み、其他船具を結束して、成るべく繫船に便利ならしめたり。此くて午前頃となり、波浪甚高く、船首動搖して、前樓海水を浴び、甲板の波濤を被ること數回に及び、錨れ一兩度は「ズリ」たる樣に思はれければ、二個の錨にて繫らんと、船長は豫備錨の投入を命じ、又錨綱をも伸ばさしめたり。

此くて暴風は、如何にもはげしく、恐ろしきこと、言はん方なく、船員すらも、今は恐怖狼狽の色を表はし、船長も頻りに防禦に力を盡し居たれども、屢其室を出入りせる際、低聲にて「神よ我等を憐れみ給へ、我等は皆失はるべし、我等は皆滅ぼさるべし」などゝ、數回獨語ちつゝ、

我が傍を過りたり。此難船の初めの程は、我は下等船室に閉籠り居り、その心中の感想今言葉に盡し難けれども、さきに一度あれ程まで斷然胸中より追退けたる悔悟の念は、再び起り來らざりしのみか、往日の暴風の時、我れは一度死せるが如く感じてるに、猶ほ危難を免れ得たれば、今度も亦何程の事かあらんと、心竊に蔑り居たりしが、前に述べたる如く、船長が我の側をすぎつゝ、「我等は皆失はるべし」と云へる一言を聞きたる時は、我は痛く打驚き、岸破と起ちて室を出て、外面を見るに、其慘憺たる光景何にたとへんやうもなく、山の如き怒濤は、三四分時毎に甲板に崩懸り、眼に入るもの、一として悽慘ならぬはなく、我船の近くに繫居たる二艘の船は、積荷重くして、船脚深く水に入り、桅檣は甲板の側より切斷せられ居たり。水夫の呼號を聞くに、我船より一哩許の處に繫居たる一艘の船は、既に沈沒したり、他の二艘は錨を取られ、所有危難を犯して、碇泊所の外に出て、檣の立てるもの一本もなし、又燈船は困難最少なきも、その中二三艘は、只桁帆を以て風を支へつゝ逃れて、我船の近くに來りたり。

日の暮る頃に至り、運轉手と水夫長は、船長に向つて、前檣を切斷せんと請ひけるに、船長は之を好まざりしかど、若し切斷されば、船は沈沒を免れずと、水夫長の主張に止むを得ず、遂に之に同意したり、されど前檣を切斷しけるに、中檣も大に弛みて、甚く船を動搖せしめければ、止むを得ず、中檣をも切斷し、今は甲板に一本の檣もあらずなりにけり。

若年の水夫として、數日前にも此る危難に遭ひたる我が、當時如何なる心情なりしかは、讀人かならず推察せん。然れど、兎に角に幾多の年代を經たる今日より、此際の事態を顧みるに、當時我心中の恐怖は、人の將に死なんとする、臨終の時の恐怖よりも、なほ幾倍なりしなるべし、その故如何にとなれば、我は前日の危難に遭ひて、一旦は大に前非を悔いたれど、幾程もなく全く之を忘れ、自己が非行を遂んとて、再び元の決心に立戻りたる時なれば、良心に苛責らるゝこと亦甚しく、その心情の狀態は、今之を言語に盡し難かり。されど困難は猶ほこれに止まらず、風勢益加はりて、其光景凄じく、水夫等すらも、此くまで強き暴風を知らずと、言合へる程にて、我等の船は堅牢なれども、積荷重く、船脚深く水に入りたれば、最早沈沒ん〳〵と、水夫等が口々に呼ばりしこと、幾回なるかを知らず、船長、水夫長、其他數人の者共が、一入熱心に神に祈禱し、其狀態より察するに、船は今にも海底に沈まんかと思はれたり。此くて夜半頃に至り、一人の船員、巡視の爲めに船底に下り來りしが、やがて漏水の個所ありと號び出し、他の一人も、亦船艙の水最早四呎に達せりと呼ひたれば、立地に喞筒總掛の命令あり、之を聞きたる我は、心神恰も死せるが如く、坐し居たる寢床の上より、後に撞と轉落ちたり。人々は我を起こし立てゝ、君は新參者にて何の役にも立たざれど、喞筒掛は人並に爲し得らるべしと言ひければ、我は跳起きて、喞筒の所に馳せ行き、心を盡して働らきた

り。此る中に數艘の石炭船は、暴風を凌ぐこと適はず、止むを得ず逃れて、冲の方へ走せ去らんとし、我が船に近づき來りければ、船長は之を見て、難船の號砲一發を打たしめたり。此號砲が何の爲めに發せられたるかを、當時知らざりし我は、その響を聞き、船が破壞せしか、將何か恐ろしき事起れるにかと思ひ、驚愕一方ならず、忽ち卒倒氣絶したり。人々は各己が生命のことのみ心配せる折柄なれば、何人ありて、我を顧みるものなかりしが、一人の者喇筒の所に歩み來り、我を既に死せりと思ひ、足にて我が體を片寄せたり。かくて我の蘇生したるは、それよりやゝ暫時の後なりしとなん。

さる程に我等は、精力の及ぶ限り働きしも、艙内の水は次第に增し、船の沈没は到底免るべき樣なかりけり。暴風の勢は漸く減じたれども、此船が何處か港に達するまで、能く航海に堪ふべきこと、思ひも寄らざれば、船長は頻りに發砲して、救を求めしかば、我が船の前に在りたる一艘の燈船は、我等を救はんと、一艘の端艇を下ろし、非常なる危險を犯して、我船近く漕ぎ寄せたれど、浪荒らくして、之れに乘移ることも、又は端艇を我船側に近づくることも、共に力に及ばざりしが、彼等は尙ほ熱心に櫓をおし、生命を賭けて、我等を救はんとしたり。是に於て我が水夫等は浮標を附着たる一條の繩を、端艇に投下ろしけるに、端艇の人々は、危險を犯し、辛うじて之を捕捉へたれば、我等はそれを我船尾の下に引寄せて、皆々端艇にぞ乘移りける。幸に端艇には移ることを得たれども、彼等の本船に達すること、到底叶ふまじとは、彼我共に同感なりしかば、皆々力を合せ、成るべく海岸に向て進まんと勉めたり。時に我船長は、端艇の水夫等に向ひ、若し此端艇を海邊にのり上げくれなば、端艇の代償をば、彼等の船長へ拂はむといひければ、彼等は半ば櫓に由り、半ば風に由り、力にまかせて、北方に進行し、殆んどウインタルトンといへる濱まで漕ぎ行きたり。(註、第一號地圖參照)

我等が船を逃れ出てゝより、未だ二十五分時を過ぎざるに、船は竟に沈没したり、船の沈没するを看たること、我は此時を以て始めとす。水夫等が指さして、船が沈没しつゝありと語りし時には、我は殆んど仰ぎ視ると能はざりし、其心中今より思へば、いと憐れなり。實に當時の我は、自ら端艇にのり移れるよりも、寧ろ端艇の水夫等に抱きのせられたる、其刹那より、我は半は狼狽の爲め、半は前途如何あらんかとの畏懼のため、殆んど生きたる心地はなかりけり。

此りける中、人々は尙も力を盡して櫓を操つり、端艇を海邊近く押しやらんと、山の如き波濤をのり越え〳〵進むとき、彼方の岸には我等の近寄り來ん時に助けんとてか、多くの人々彼方此方に馳せちがへる樣、波間に隱顯したり、されど進行遲くして、端艇容易に海岸に達せず、ウインタルトンの燈臺を過ぎ、海岸の稍西方クロウマアの方に灣入し、その陸地の爲めに少しく風勢の遮ぎらるゝまでは、岸邊に近づくこと叶はざりき。此所に入りてよりも、幾多の困難なきにあ

らざりしも、漸くにして皆々安全に海岸に上りたり。此くて我等はそれより歩みて、ヤルマウス港まで赴きしが、此港の役員等は、豪商及船主等と共に、我等に適良宿舎を配當ひ、且つ我等の希望に從ひ、或はロンドン市に赴き、或はハル町に還らるべきやう、それ〳〵旅費を給するなど、大に欵待せられたり。

我がのりて逃亡したるその船が、ヤルマウスの碇泊地にて難破せしとの新聞、我父の耳に達しにより、我が溺死を免れしことを、兎角して父の確かに知り給ひしまでには、其間定めて幾多の日子を經たるとならんと思ふにつけても、當時我れが意を決して、故郷に歸りたりしならば、唯り我の幸福なりしのみならず、慈愛深き我父も大に悅び、肥えたる小羊を割きて、我を祝し給ひしならん。

然るに我身に着き纏ひし惡運は、頑として何物にも屈せず、飽くまで我を脅迫したり。當時我は一つには道理に責められ、又一つには自家利害を考へて、我故郷に歸らばやと、大聲あげて號泣せしと、數度なりしかども、遂に是を決行するの力足らざりしは、寔に臆甲斐なき事どもなりき、凡そ人たるものは、或る秘密の命令に支配せられ、我れと我身を破壞すべき機械を構造り眼前知りつゝ自から此器械に觸るゝものなりとは、我は敢て主張せざれども、正しく何等か斯る命令ありて、避くるに由なき不幸の運命、常に我身に伴ひて、我を慫慂したるに非らずば、いかてか虛心平氣なる道理の苛責に反抗するとを得べきや、又いかてか我熟考せる未來の利益に反抗することを得べき、殊に況んや、我が最初の冒險中、現に出會たる二度の難儀あるに於てをや、思へば我ながら、寔に奇怪のことにこそ。

船長の子息は、さきには我を勵まして、後悔の念を翻がへさしめたりけるに、今度は反つて我よりも勇氣稍挫けたり。我一行の者共は、ヤルマウス町に到着せし時、數ヶ所の宿舎に分れ居ければ、兩三日を經るまでは、互に面會の機會なかりしが、初めて彼に合ひし折、彼れの詞調は前日とは變り、其面色も鬱々として我に向ひ、先づ別後の安否を問ね、さて側に居りたる彼の父に我が姓名を紹介し、且つ我が乘船したりしは、全く一時試驗の爲めにて、我の重ねて海外に渡らんとの志望ある由など語りければ、彼の父は我に對ひ、いと嚴格に、且つ心配氣の語調を以て、

『青年、君は此後海には決して行かんがいい、此度の不幸は君が海員となれない、看易い前徵だ、決して不料簡を出さぬがいい』

といひければ、我は

『エーそれては君は最早海には行きませんか』

と言葉を返へせしに、彼れは

『それは別問題だ、そりや私の職業だから、即ち我の義務だ、然し君は試の爲に、此度の航海

をしたので、此上尙君がたつて航海をすると、將來如何なるといふ味は、天が既に君に示したてはないか、太古の談話にヨナと云ふ人が、ターシシュ行の船に乘つたのと同じて、恐らく此度の災害が、我々一同の頭に降懸つたのは、君が乘船した爲めだらう」

といひ、彼れは猶ほ語を接ぎ

「君は何ものぞや、何故海に行つたんだ」

と問ひたれば、我は簡單に履歷を語りけるに、彼は不思議にも突然憤怒の色を作し、

「余は如何したのかしら、此んな不幸な白痴者が、余の船にのり込んだとは、些も知らなかつた、とんだ事をした、もう假令一千磅(一萬圓)出すといつても、二度と君とは、同船しないよ」

と言ひたり。是れ恐らく今回の損失の爲めに、猶ほ激昂し居たりし彼れの精神が、突然發露せるにて、誠に法外の過言とこそいふべけれ。されど彼は暫らくして言辭を改め、いと老實に我に對ひ、我は宜しく父の膝下に歸るべし、神の攝理を蔑視にし、終に零落の淵に沈まざるやう注意すべし、只今悔悟せざれば、天は手を下して我を罰することもやあらんと、我を誡しめ、又語を接ぎ

「オイ青年、君は天命に依賴するがいい、君が若し家に還らなければ、何所に行つても、必悲慘と失望とに出會ひ、竟には君の父の言辭の如く、無慘の境遇に陷るだらう」

と、最懇切に誡め呉れたり。

我は之に對し、兎角の返辭をもなさて、程なく互に立別れけるが、其後は何地へ行きけん、此船長には出會ひしことなかりき。

さても我衣囊には、若干の金子ありければ、我は陸を經て、ロンドン市に赴むかんと決心し、道すがら彼是と心を惱め、彼所に着きし後も、如何に生活の道を求めんか、さては故郷に歸らんか、或は再び海に行んかと、種々に我れと我心を苦しめたり。

郷里に行んと思ひしかど、我ながら恥辱といふ心起り、今歸らば近隣の人々に笑はれやせん、父母のみならず、何人に會ふも、面目なからんと、折角胸に浮びし好き思案は、直ちに打ち消されたり。爾來今日まで、我が屢觀察せる所に據るに、凡そ人間の性情、殊に青年の性情程、斯る場合に、當然指導と賴むべき道理に對して、非理無證なるものはあらじ、彼等は自己の罪障をば恥とせず、却て悔悟を辱と爲し、愚蒙なる所行をば恥と思はずして、却て賢者と看らるべき、改悛の行爲を辱と思ふなり、寔に淺薄なる事どもなりかし。

當時我は、何事を爲すべきか、如何なる生業に就くべきかと、暫時思案に暮れけるが、歸郷を嫌ふの念は、頑として姑らくも息む時なく、此くて停留る中に、我れの往日遭遇たる艱難の記憶の、次第に衰へ行くと共に、一時我胸に湧き出てし歸郷の心も、亦漸次に消え去り、遂には其思

想は全く顧みず、只管航海の機會をのみぞ求めける。

さても、當初我を父の家より奪ひ去り、我を急促て暴富を得んとの安念を起さしめ、遂に親切なる忠告をも、皆馬耳東風と聽き流し、父の懇談はおろか、その嚴命にも全く耳を傾けしめざりける、同じ惡魔が、此時又々我を迷はし、我生涯の中に、最も不幸なりける、冒險事業を我れの眼前に現はしける、これぞ即ち、亞弗利加の海岸行にして、我は遂に一船に乗組むこととはなりぬ、船乗等が俗にギニイ航海と言ふは即ち是れなり。

（註）ギニイとは、亞弗利加洲の西海岸に、陸地の殆んど正しく東西に延長せる地方にして、今は之を分ちて、六個國となせり船乗は之を稱して、シーレチネ、殺物海岸、象牙海岸、奴隷海岸、ベニンとは云ふなり、第二號地圖を參照せよ

前後冒險を企てける中、常に水夫として乗船せざりしとは、我れに取りて大なる不幸なりき。我若し水夫となりしならば、或は少しは強く勞働しならんも、これと同時に又其職務を習覺え、たとひ船長となり得ぬまでも、副長となるの資格をば、作り得たることならん。然るに、最も不利益なる事を撰ぶは、豫て定まれる我が運命にや、此時も亦此く爲しけるこそ恐かなれ。當時懷中には、若干の金子あり、身體には美服をまとひ、恰も一個の紳士たる容態をもて、常に甲板を逍遙しければ、何の職務もなく、又何事をも習覺えたることなし。

抑も當時、我が亞弗利加行の船に乗組むに至りたる、事の起原如何と尋ぬるに、我のロンドン市に滯在しける中、風としたる事より、好き交際をなすに至りしと、これぞその發端なりけるが、是は此頃の我の如く、賴邊なき氣儘の若者には、甚稀なる例なりけり。凡そ此る若者は、夙くより惡魔に魅れ、そが圈套にかゝると常なるに、我れはさるとなかりしは、誠にこよなき幸なりけり、爰に嘗てギニイの海岸に赴きて、大に成功したるより、再び同地に行んと考へ居たる、一船長ありけるが、我は圖らずも、此船長と知己とはなれり。此くて船長は我が談話を惡からず思ひしにや、我れと會談するを一つの樂みとなし居けるが、或時、世界を觀たき心ありと、我が語るを聽き、彼は莞爾として我に向ひ、若し彼れと共に航海するならば、我は其費用を少しも出すに及ばじ、彼れの朋友とし、又伴食者として、好遇すべき事、又我が若し何物を船に積んとすとも、成るべく諸般の便利を與ふべき事など語り、且此くせば、恐らくは後にて行きし甲斐ありきと感ずるとあらんなどゝ語りたり。

我は之を聽き、兩手を擧げて、此提言を歡迎しけるに、此船長は其性正直にして、眞率なりければ、程なく親密の間柄となり、終に共に乗船し、若干の商品を積みゆくこととなりけるが、船長の義俠なる取計にて、尚ほ特に其數量を增加し、船長の指示するが儘に、凡そ四百圓許の瓶具、其他現來の貨物を携帶することとなりたり。さて此四百圓の金子は、如何にして蒐集め得しかといふに、こは我が二三の親戚に通信して、其幇助を求め、その人々より我父か、或は少くも

我が母に說きて、（我は信ず）我が最初の投機商賈の爲めに、此金額をば出さしめたるなり。

我が企てし、前後數回の冒險の中、先づ成功したりといひ得べきは、唯此度の航海のみ、此は全く我友なる船長が、淸廉にして正直なりしに依るなり。加之ならず、我は此船長の恩顧により、航海中に數學と航海術とを學び、船舶の行程を測るの術、さては天候の觀測法をも知るとを得たり。約めて言へば、船乘として理解し居るべき、幾多の事柄を學得たり。思ふに、こは彼れが我に敎ふるを以て、樂みとなしたるが如く、我も亦學ぶを以て此上なきたのしみとしたればならん、尙ほ一言に陳ぶれば、此航海に由りて、我は水夫兼商人と爲り、携帶し貨物の代はりに、五磅九弓の砂金を持歸り、之をロンドン市にて、殆んど三千圓に替へ得たり。此くて此意外なる收益ありたる爲め、我が胸中は一獲千金の安念を以て滿たさるるに至り、覺にはこれが導火線となりて、我を斯程まで零落の淵に沈ましむるとはなれり。

此くの如く、我に利益ありたる此航海中にも、亦種々の不幸に遭遇したり、其中特に記すべきは、我等の主に貿易したる地方は、北緯十五度より赤道線に至るまでの海岸なりしかば、季候酷熱なりし爲め、激烈の妄譫病に罹り、絕えず不快に過ごしたり。

さても是に至りて、我は最早ギニイ貿易商となりしが、不幸なるかな、我友なる船長は、歸着後久しからずして死去しければ、我は獨り心を決し、再び同地方に航海せんものと、前回に運轉手たりし者と共に、同船に乘り組み、今は自から船長とはなれり。されど今度の航海は、其結果最も悲慘にて、此る例は未だ曾てあらざるべし。我は前回に獲たる三千金の中、二千金をば甚正直なりし寡婦（我が友人船長の）に預け置き、凡そ一千金貳を携帶しけるが、航海中恐るべき幾多の不幸に出會ひたり、其中第一の不幸ともいふべきは、大要此くの如くなり、即ち我船が、カナリイ諸島と亞弗利加海岸との間を進航中、或る日の朝未明に、サリイ港に據れるムウル人の海賊に襲擊せられたり。此時海賊は、出來得る限り帆を張りて、我船を追驅來りければ、我等は虎口を逃れんと、十分に帆を張りて、走りたれども、覺に賊船の速力に敵はず、二三時間の中には、必定我船に追付くべしと思ひたれば、我々は、十二門の砲と、壯丁十八人を配置して、戰鬪準備をぞなしにける。

此くて午後三時頃に至り、海賊船は果して我船に追附きしが、我船尾を横切らず、誤りて後半舷側を横過りければ、其の舷側に砲八門を運び、該船の正面を射擊しけるに、賊船は我に向て砲火を酬いんと、其乘組員殆んど二百人をして、小銃を發射せしめし後、再び其船を開轉したり、我船員は皆船內に籠り居たれば、幸に負傷せし者一人もなかりしも、賊は再び我等を襲はんとせしかば、我等は之を防んとせしに、今度は賊は他面の後半舷側より攻め掛り、我船の甲板に六十人入り込み、直ちに帆布及綱具を切斷せんとせしかば、我等は小銃、短鎗、火藥函、其他のもの

を以て、彼等を防ぎ、之を追拂ひしと二回に及びたり。然れど此悲慘の話は之を略し、結局我船は痛く毀損せられ、殆んど用を爲さゞるに至り、船員の三人は殺害せられ、八人は負傷したれば、我等は止むを得ず降服し、此くて皆捕虜として、サリイ港にぞ連れ行かれける。

（註）サリイ港は亞米利加洲モロッコ國の一海港なり。

第二段　辛うじて奴隷の境遇を脱し一船長に救はれて農夫と爲る

我が此地に於て受けたる待遇は、幸に豫想の如くには慘酷ならず、殊に他の者の如く、內地の王宮に連行かれもせずして、夫の海賊般長の奴隷とは爲されたり。思ふに我は年も若く、敏捷して彼の用に立つべしと認め、我のみをば、當然の戰利品として、奴隷とは爲したるならんか。昨日の商人は今日の奴隷と爲り、此く遽に我が境遇の一變しければ、我は茫々として樂しまず、嘗て父が、我の不幸の身となりて、救助くる者一人もなきに至らんと云ひ給ひし豫言の、果して事實となりて現出し、之に增したる惡運あるべくもあらず、是天が手づから我を捕へて、此無告の苦境に投じ給ひしなりと、坐ろに思ひ廻らしたり。然れど此物語の後段に說くが如く、此れ唯我の經歷たる艱難不幸の一段階に過ぎず。

さても、我が新主人は我を家に連れ行きたれば、主人が再び海に行く時は、我をも伴ふとあらん、此くて何時か西班牙、若くは葡萄牙の軍艦の爲めに、彼の捕へらるゝこともあらんには、その時こそ我れは自由の身となる便もあらめと、心竊にその機會を望み居たり、然るに、我此希望は、空だのみとはなれり、彼が海に行く時は、我をば海濱に留めて、その小庭園を守らしめ、其他通例奴隷の執べき、家外の雜務を爲さしめ、彼がその巡航を終へて蹄り來る時は、我に命じて其船を守らしめけり。

我れ此所に居りし間は、常に逃走ことのみ思案し、如何にして遁れんかと、種々に心を惱ましゝかども、我奴隷仲間に、我より外に英國人とては一人もなかりければ、我が企圖の程を告げ知らせ、共に逃亡を計るべきものなかりし故、實地に行はるべしと思はるる方法、一つもなく、又その豫想を有理と思はしむべき事、毫しも出來らざりき、此くて二年が程は、獨り想像を畫きて自ら悅びしこと、數回なりしかど、之を事實に演出するの機會は、絕えてなかりけり。

此くて凡そ二年の後、はしなくも奇異なる事の出來りしため、豫て自由の身とならんとの希望は、再び我が心に起りたり。さても我が主人は、一時金錢の缺乏かりし爲めとかにて、常よりも久しく航海に出てざりければ、一週間に一兩度、若くはそれよりも數回、天氣だに快晴なれば、船の端艇を下ろさしめ、釣魚に出掛くるを常としけるが、彼は常も我と短艇の漕人なる他の一人

の若者とを伴ひ行きけり、されば我等兩人は、勉めて主人を慰め喜ばしめしのみが、我は魚を捕ふると巧なりければ、時々は、我と主人の親族なるムウル人、並にモレスコと呼ばるゝ例の若者とを海に遣りて、食膳に上すべき魚類を捕らしむることもありけり。

或る靜穩なる朝、主人と共に漁獵に出掛けるが、濃霧忽ち立ちこめて、海岸を距ること、僅に二十町許の冲なるに、陸地は全く見えずなれり。此くて何處に在るか、何れの方位なるかも知らて、終日終夜漕ぎ續けけるが、翌朝に至り、我等は海岸の方には向はで、冲の方を指し、海岸よりは少くも三里程距り居ることを知りたり。此朝は風もやゝ強く吹き始めければ、危險尠からざりしも、大に力を盡し、辛うして海岸に漕ぎ戻りたり。

此の危險ありし後、我が主人は、將來を注意せんと思ひ、嘗て我等より奪ひ取りたる、英國船の長艇を取り下ろさせ、以後は羅針盤と食料とを用意せざれば、漁獵に出掛くまじとや思ひけん、英人の奴隷なる船大工に命じ、かの長艇の中央に、立派なる一室を造らしめたり、其形恰も遊山艇の如く、其後には、舵を操り、大帆の網具を扱ふべき場所等を設け、其前には一二人の立ちて、帆を扱ふべき場所を備へたり。此長艇は俗に羊肩帆と稱する、三角形の帆を以て駛航る裝置にて、低き船室の上に帆杠を張出し、其内に主人と、奴隷二三人の居るべき場所あり、又飲料數瓶と、特に麵包、米、珈琲を入るべき、小さき抽斗數多ある食卓をも備へたり。

我等は此長艇にのりて、屢漁獵に出掛けるが、我は魚を捕るに最巧なりければ、主人は我を伴はて出行きしことなし。かくて或る時主人は此地の重なる、二三のムウル人を伴ひて、遊獵の爲め、此艇にのりて出掛けんと、盛に諸般の準備を調へ、其前夜これ等を艇に運ばしめ、又魚獵と共に鳥獵をも催ほさんとて、我に命じて、船に藏ひおける小銃並に彈藥を、艇内に搬び込ましめたり。

我は諸事主人の命の如く準備し、艇を洗ひ清め、大旗小旗を揚げ、其他賓客の餐應の爲めに、萬事を調へ、翌朝を待ち居けるに、やがて主人は獨り艇に來り、客人は差懸る要用ありて、艇遊に往ぬこととなれりと語り、且つ我には常の如くかの男と少年とを伴ひ、長艇に乘りて海に出て、何にか魚類を漁り來り、家にて催ほさんとせる、友人の饗應に供へよと命令し、又、魚を獲ば、直に家に持ち來れと、吩咐ければ、我は此命令の如く、其用意をぞなしたりける。

是に於て、我は意のまゝに、一艘の小船を指揮するを得ることとなりたれば、此地を逃出んとの宿望は、勃然として胸中に躍り、やがて主人の去りたるを見て、我は漁獵の爲めにはあらで、航海の爲めに、竊に準備をぞ調へける。されど其時は何處に航行べきかも知らず、又それ等を考ふる暇もなかりしかば、唯何地ともなく、只管ら此地を去んとのみ願居たりけり。

我は、船中にて性命を維くべき飲食物を、更に多量く獲んが爲め、先づかのムウル人を欺かん

とて、彼に向ひ、我等は主人の麵麭を食ひては、惡しかりなんと語たれば、其は理なりとて、彼は粗製の「ビスケット」を容れたる大籠一個と、淡水を盛りたる瓶三個とを、船に搬入れたり。主人が或る英國船より奪取りける、酒瓶函の所在は、我能く之を知りたれば、ムウル人が海濱にありたる間に、之を艇内に持込み、以前より主人用として、積込み置きける如に粧ひたり。我は又多量の蜂蜜五十封度許と、一束の糸、手斧、鋸、鎚とを船に運び入れたり。此等の品は何れも後に大に用を爲すべかりしが、殊に蜂蜜は、蠟燭を造らん爲めに準備したり。さて我は再び彼を欺騙きしが、彼は亦何心なく之にも乘りたり、彼の名はイスマエルと云ひしが、人々彼をムレイと呼びければ、我も彼に對して、

『オイムレイ君、主人の銃は、皆此艇内にあるが、君少し許り火藥と彈丸を持て來ることは出來ぬかへ、主人は彼の船に彈藥を貯へて居るから、それがあれば、水禽（「アルカミー」といふ「シギ」に似たる水鳥）を殺して食べられるぜ』

と語りたれば、彼は

『それては、僕が幾許か持つて來やう』

と答へ、やがて彼は火藥凡そ一封度半入の大革嚢と彈丸五六封度入の大革嚢とを提へ來り、皆之れを艇内に積入れたり。又同時に、我は主人の火藥の若干が、船室に在るを見出したれば、彼の

函に入たる殆んど空虛の大瓶を取出し、その殘れる酒は他の瓶に注入れ、火藥を此大瓶に滿たし、此くて必要なる諸品を準備したれば、乃ち我等は漁獵の爲めと唱へて出港したり。港の中央に位する番所にては、かねて我等を熟知しける故、別に注意せざりしが、港を距ること一哩ならずして、帆を捲き釣をなさんと着坐したり。此時風は、北東より吹きたれば、我が希望には反したれど、若し南風吹きたらんには、我は必定西班牙の海岸に到り、少くもカヂス灣に達したるならん、當時我は思ふやう、假令風が何れの方向に吹けばとて、我が居る現在の恐ろしき場所より逃れなば、其上は身を天運に任すの外なしと。

我等は暫時釣を垂れ居けるが、我は心中に思ふ仔細あれば、魚が釣に懸りても、ムレイの目に留らぬやう、故それを引き上げず、獲物一疋もあらぬ如くにもてなし、さて我は彼に向ひ

『これては駄目だ、主人に供るものがとれない、モット先きへ出なければならんネー』

と言ひければ、少しも惡氣なき彼は、直に同意し、己れ艇首に居りければ、彼は帆を張り揚げ、我は舵を操りて、更に殆んど一哩餘りも沖の方へ走りいて、ここにて艇をめぐらして、釣をたれんとする如くにてもなし、舵をば少年に執らせ、ムレイの居る邊に進みより、彼の背後の物を取らんとて屈みしが如くに粧ひ、我兩腕を伸ばして、咄嗟に彼の腰を抱き、エイヤと許り海中に投入れたり。彼は水泳の達人なれば、恰も栓木の如く、直ちに起き直り、我を呼びかけ、己も共にどこまでも行くべければ、何とぞ艇に引き上げ給へと懇願し、艇に追ひすがらんと、泳ぎ來る、その勢甚鋭し、折柄微風だもなかりしかば、忽ち艇に達せんず樣なれば、我は船室に赴きて、一挺の鳥撃銃を持來り、彼に狙を着けつゝ、大音揚げて、

『君は海岸まで十分泳ひて行かれるよ、海は平穩だから、さうするがいい、僕は少しも君を害しはせんが、併し若し君が艇に近寄るなら、この銃で君の腦天を撃貫ぞ、僕は自由の身となるらうと決心して居るから』

と、言聽かせければ、彼は身體を廻し、海岸指して泳ぎ去れり、彼は勝れし水泳者なりしかば、容易に海岸に達せしならん、こは今も尙ほ疑はざるところなり。

當時我は、此ムウル人を伴れ行き、かの少年を水に溺らせし方、都合よからんとは思ひしかども、未た此くまで彼を信ずるには至らざりき。さても彼のムウル人は泳去りたれば、ズリイと呼ばるる彼の少年を顧て、

『ズリイ、汝が我に對して忠實に奉事るなら、汝を豪人にしてやるが、然し若し汝が顏を拭ひて我に忠實にすると誓はないなら（是れ敎祖マホメットと其父の鬚に掛けて誓ふ言葉）我は汝も海中に投入れるがいいか』

と言ければ、少年は我顏を守りて莞爾と笑ひつゝ、無邪氣に語り、我に對して忠實に奉仕へ、共

にどこまでも隨ひゆくべしと誓ひ、其態絶えて疑ふべくもあらざりけり。

我は該ムウル人の泳ぎ行くを看ながら、故らに風に逆ふて艇を進め、北方ジブラルタル海峽の方に行く如く思はしめんとて、一直線に冲に乘出したり。其實我は南に向て航行んと思ひ居たれど、南方の海岸には、黑人國あり、我等の到るを見なば、蠻人共丸木舟を以て、我等を取圍みて殺戮するか、或は野獸の爲めに喰殺さるゝこと必定なれば、誰とて、我等を南に逃れたりと、思ふものあらざるべし。

然れば、其日も暮れて暗黑となるや否や、我は針路を變へて正南に向ひ、海岸と隔離ぬ爲めに、航路を少し東方に向けるに、凉風颯々として面を拂ひ、海上平穩にして鏡の如くなりければ、艇の走すると矢を射るが如く、翌日の午後三時頃、始めて陸地を望みたる時には、サリイ港の南方凡そ一百五十哩餘りの處に在り、其邊に人を見ざれば、モロッコ帝國、又は其あたりの王國の領域以外と思はれたり。

我はムウル人を恐るゝよ甚だしく、若し誤ちて彼等の手に落ちなんには、如何なる憂目に合はんかと思ひし故、此邊には船を停めず、海岸にも上らず、又は碇泊をもなさず、順風の吹き續くにまかせ、五日の間帆走りしに、風は南に變りたり、よしや我を追ひかくる船ありとても、最早思ひ止まるならんと推測りければ、始めて海岸に近寄り、一小川の口に投錨せしに、此處は如何なる地か、緯度は何度なるか、何國なるか、將た何川なるか、知る由更になかりき。我は陸上に人影も見えず、又見るとをも欲せざりしが、飲料水の盡きしにはほと〳〵困しみたり。我等は日の暮れんとするや否や、海濱にて游泳を試み、且は陸地の模樣を見んと該川に到りけるが、やゝありて全く暗無となるや、如何なる種類の野獸か、その咆吼怒號聲甚怖ろしく、少年は恐怖の餘り、殆んど死せるが如く、夜の明るまでは、海岸に上る勿れと、頻りに諫て息まざりけり、

『さうか、ズリイ、そんなら行くまい、然し實間になると、獅のやうに、人を害する人間に出合かも知れないぞ』

と云ひければ、

『其時には其人間に鐵砲丸を呉て追拂へばいゝです』

と、ズリイは奴隷の中に行はるゝ野鄙の言葉を語れども、我はその性の快活なるを喜び、主人の瓶函より酒一杯を取出し、これを與へて彼を慰めたり。結句、ズリイの忠告が尤なれば、我は之に從ひ、小さき錨を卸ろし、終夜靜になし居たり、我が今「靜」といひしは、少しも睡眠らざりし故なり、やがて二三時間を經る中に、その名も知らぬ巨大なる動物、幾種類となく、海濱に下り來り、水中に馳入り、或は全身を洗ひ、或は轉輾まはり、恰も身體を冷すを悦ぶ態なり、其哮嘯く聲の凄と甚しく、我は嘗てこれに似よりの聲すら聞きた

ることなし。

ズリイは痛く恐怖れ、我も勿論同感に打たれたり、されど一疋の大なる野獣の、我艇の方に泳ぎ來る物音を聽きたる時は、もろ共に一層恐怖を抱けり、眼には見えざりしかど、その叫聲を聽きて巨大なる猛獣なることを知り得たり。ズリイは必定獅ならんと言へり、我の知る所より考へるも、然ありしならんが、ズリイは聲を震はせ、喃錨を上げて彼方へ漕ぎ行き給へと泣き叫びたり。されど我は

『否やズリイさうしないても、錨綱に浮標を着けて、解たら冲に出ることが出來るだらう、野獣はそんなに遠くまで人を追つかける氣遣はあるまい』

と言ひ了はるや否や、何獣なりしか、僅に二三間を距てゝ、その形態を認めたれば、我は大に喫驚き、立地に艇室に走寄りゝ銃を執りて野獣を狙ひ、火蓋を切りたるに、彼れは直に身を翻して、海岸の方へ泳ぎ去りたり。

然れど、これらの野獣が嘗て聽きしことなからんと思はるゝ銃聲の、森然として響き渡るや、山間となく海岸となく一時に揚れる咆哮、絶叫の聲、囂々と暗夜に鳴り響きて、凄く恐ろしかりしと、今は言語に述べ難し。是等より察するに此邊の海岸には、夜中上陸せし者、絶えてなかりしことも知らるべく、又登間と雖も、強ひて海濱に上るは、是れ亦一考すべきとなり、思ふに蠻人等の手裡に落るは、猶ほ獅虎の爪に罹ると同樣なればなり。

然るに艇には最早二三合の水もなければ、何づれかの海岸に上りて、水を求めずばならねども、何時何處にて得らるべきかと、思案に暮れ居たり。やがてズリイは我に向ひ、甕一個を提へて上陸せしめなば、何處にか水を求めて持歸るべしと言ひければ、我は彼が行んと云ふは何故ぞや、又我は行ずして、艇に留るべしと云ふは、何故ぞやと問たりしに、少年の答辭は殊勝なりければ、其後は一層彼を愛したり。彼の言へるには、

『若しも蠻人が出來て私を食ひましたら、君は速くお逃げなさい』

と。我は之を聽き、深く心に感じ

『そんならズリイ二人て行から、若し蠻人が出て來たら、我々が彼等を殺すか、彼等が我々を食ふか何ちかだ』

と言ひつゝ、前にも記したる主人の瓶函より、一杯の酒を取出し、一片の麵麭と共に之を彼に與へゝ、此て程よき海岸に艇を漕寄せ、武器と二個の水甕の外には、何物をも携へずして、共々に水を渉りたり。

丸木舟が蠻人等を乘せて、川を下り來らんかと、恐ろしければ、我は艇の見えぬ處までは行かざりしも、少年は一哩許りの彼處に、凹き低地のあるを見て、そこまで辿り行きけるが、やがて

彼は此方を指して走せ歸れり。我は之を見て、さては蠻人等に追驅けられしか、或は野獸に會うて驚きしかと思ひ、彼を助けんと慕然に走出し、彼れに近づきて熟視れば、彼の肩には何物をか掛たり、これぞ彼れの射止めたる獸にて、其形は兎に似たれど、色は稍異なり、且足も稍長かりし、我等はもろ共に痛く打喜び、後に至りてその肉を賞味したり、されどそれにも增して、良水を見出しゝのみか、蠻人の影をだに見ざりしと、ズリイが我に告げたる、其の歡喜は、譬ふるに物なかりき。然れども我等が艇の繫りし川の、少し上流に沂り、その以上餘り潮の滿干せざる邊に到れば、干潮の時には、淸水あることを、後に至りて知りたれば、此くまで水の爲めに苦心するに及ばざりしものをと打喜び、我等は水甕に一々水を滿たし、且つかの兎の肉を味ひ、尙ほ其邊に人なきを見て、今一歩進んものと、その用意をぞ爲したりける。

我は嘗て一度此海岸に來りしことあれば、カナリイ諸島並にベルド岬諸島が、此海岸より程遠からざることは、能く知居たれど、我等の居る緯度を知らん爲め、觀測を爲さんとせしも、そが器械一つもなかりしと、且は其等の諸島のある緯度を、精密く知りもせず、又記臆もせざりければ、その所在を求めんとするも、又はその方角を指して、沖に乘出さんとするも、詮術絕えてなかりしが、若しさなくんば、此諸島の何れかは、當時容易く發見したりしならん。さはあれど、英國人が貿易の爲めに、常に往來せる地方に到るまで、こゝらの沿岸を周廻りなば、竟にはそが商路に際會し、幸に商船を見出して、遂に救はるゝこともやあらんと、心竊に一縷の望を繼ぎ居たり。

さても、當時我が滯留せし地方は、モロッコ帝國の領域と、黑人國との中間に位し、野獸の外には住むものもなき、荒蕪たる地方に相違なしと、我ながらその眼識の誤まらざりしを、獨り竊に悅びけるが、抑も此地方は如何なれば此くは荒蕪たるかと尋ぬるに、始め黑人共こゝに居りけるが、ムウル人を恐るゝの餘り、之を委棄て、遂に南方に去り、ムウル人も荒蕪地なるが故、住地と爲すの價なしとし、且つ此地方には、虎、獅、豹、其他の猛獸夥しく徘徊するゆゑ、危害の恐しければ、之を棄て顧みざりしが爲にして、今はムウル人は之を獵場と爲し、一時に二三千人の隊伍を組み、遠征するとありとなん。去ればにや、此海岸二百哩許りの間は、蓋は荒涼として人影を看ず、夜は野獸の咆吼怒號聲の外、耳に入るものとてはなかりけり。

我は蓋間一兩度、カナリイ諸島のテネリッフエ山の頂點ピイコ峯を望見したる如くに感じたれば、如何にしてか彼處に達せんと、大に心を決して、艇を乘り出しけるに、兩度共逆風に妨げられ、波浪赤高くして、我が小艇の力に及ばず、空しく失敗しければ、竟に最初の計畫通り、此沿岸を航行んと、思定めたり。

（註）カナリイ諸島の中、テネリッフエ島は、諸島中の最大島にて、大カナリイ島とゴメラ島の間にあり、地形不規則にして長

サ六十哩、巾三十哩あり。一の山嶺、島の延長に沿うて、連綿として之を横斷し、殿峯殿も大なる地方の中央に、著名の山峯雲に聳へたり、之をヒイコ峯といふ、二個の峯頂あり、高きは一万二千二百呎にして、略我が富士山と均しく、低きは九千八百八十呎あり、二者共に火山口にして、常雪絶に途せざれども、茲に天然の洞窟あり、此所は海拔一万一千五十呎にして、四時雪を絶たず。

我等は此地を去りたる後も、飲水を求めんとて、止むを得ず、數度上陸しけるが、茲に特に語るべきとあり、一日朝早く一つの斷岸の、少し高く突出せる邊に、我が艇を停めて錨を投しけるに、折節潮上げ始めければ、更に陸地に乘入らんと、暫時抑へ居たり。我も四方に眼を配り居りしが、ズリイの眼や一層鋭かりけん、彼は靜に我を呼び、今少し沖岸を離るゝこそ宜けれといひ、且言ふやう、

『御覽なさい彼處の丘の側に、恐ろしい一疋の怪物が睡て居ますぜ』

と、我は彼の指す方を看しに、果して恐ろしき一疋の怪物あり、倘熟視るに、丘の少しく突出して、我慢れる其陰の水際に、怖るべき一疋の太獅の横臥り居るなりけり。

『ズリイ、汝は岸に上て、あれを殺せ』

と云ひければ、ズリイは震慄きて

『私に彼を殺せと命るのですか、彼は一口に私を食ます』

と言ひたり。我は、それ限り何をも言はて、只靜にしろと命じ、先づ最も大なる銃を執り、二個の彈丸と火藥を十分に込め、之を側に置き、他の銃に二個の彈丸を込め、更に第三の銃に五個の小彈丸を込め終り、さて最初の銃を執り、獅の頭腦を擊挫んと、善く狙を定めたれども、獅は丈の脚を少しく鼻の上に置きければ、彈丸はその脚の膝の邊を擊ちて、骨を挫きたり。獅は始め吽気つゝ、岸破と起ち上りしが、其脚挫け居ければ、復た倒れたりしも、今度は三脚にて起上りて怒號たる、其聲最も凄かりき。我はその頭腦を擊ざりし爲め、少しく喫驚たれど、直に第二の銃をオッ執り、獅の動き始めんとする所を、再び發射て、其頭腦を擊ち、獅のそのまゝ倒るゝを見て、胸撫おろしたり、此くて獅は殆んど聲をも立て得ず、もがき居けるが、ズリイも怪つと息つきて、氣を取直し、我に向て海岸に上らじめよと請ひければ、我は

『宜し行け』

と云ひ了らぬに、はやざんぶと水に飛込み、片手に小銃を握り、片手で海岸に泳ぎ着き、獸に近寄りて、其耳に銃口を當てがひ、猝と一發射てければ、それにて獅は全く息絶えたり。

是は一つの獲物なりしも、食物とならざれば、此無用の動物の爲めに、三發の彈藥を失ひしを口惜しくぞ思ひける。されど、ズリイは何物か取り得んと思ひ、艇に來りて、我に銃を渡し呉れよと請ひたれば、

『何にするのか』

と問ひしに、

『私は獅の頭を切るのです』

と答へて走せ行きしが、彼は頭をば截ると叶はで、僅に脚一本を切取りて、携へ來りしを見しに、非常に大なるものなりき。

我は其毛皮は恐らく何かの用に立つべし、成るべくその皮を剝取らんと思ひければ、ズリイと共に、皮剝きに取掛りけるが、ズリイは我よりも遙に巧者なりき。我等は此事業に一日を費せしが、終に獅の皮を剝取り、これを艇室の上に延ろげ、二日の間日に乾かしけるに、後には敷皮の用を爲したり。

さても我等は圖らずも、此處に數日停留しけるが、最早食物の貯蓄も著るしく消耗じたれば、飲食物を大に節約し、又飲料水の爲め、止むを得ざる外は、決して上陸をも爲さで、凡そ十日か十二日程も、斷えず南の方へと船を進航たり。是れ畢竟するに、ガムビア河、又はセネガル河の邊或はベルド岬のあたりへなりとも到りなば、歐羅巴の商船に出會ふともあらんかと、思ひしが故にして、若し此く爲さゞれば、ベルド諸島を捜るか、又は死するの外には、他に詮術なかりしなり。彼のギニイの海岸又はブラジル、若くは東印度に航する爲め、歐羅巴より來る諸船は、何れもベルド岬、又はそれ等の諸島に立寄るとを、我は豫てより知り居たるをもて、幸に或る商船に出會ふか、否らずば死するの外はあらじと、我が運命を此一擧に決せんとしたり。

此決心を、尙ほ凡そ十日許りが程、續けけるに、陸には漸く人影も認めらるゝに至り、或る二三の處にては、海岸に立ちて、我等を眺め居たる者もあり、また色真黑にして、全く裸體なる態も、明々と看られたり。一度は、上陸して、彼等を見んとせしかども、ズリイは賢しくも「行き給ふな、行き給ふな」と云ひて、我を押し止めたり。されど、せめては彼等と談話するとを得る樣に、稍海岸に近く艇を進めければ、彼等も船の進むに伴れて、暫らく走り來れるその態を看るに、何れも手に一つの武器をも持たず、その中唯一人が細長き杖を携ふるのみ、ズリイは、こは彼等の鎗にして、之を遠くより投つけ、多くは其狙を失たずと言ひける故、遠く距れて近寄ざりしかども、種々樣々の手眞似を爲して、彼等と談話せんと試み、特に食物を求むる樣を示せしに、彼等は我に對し、手號を以て艇を留めよ、さらば食物を持來るべし、との意を通じたり。是に於て、我は少しく帆をおろして留りたれば、彼等の中二人は、丘の方に馳行き、半時も經ぬ間に馳返り、肉の乾きたるもの二片と、穀物若干とを携來れり、これ定めて此當の産物ならんが、その何物なるかは之を知らざりき。我等は此贈物を受けたくは思ひしかども、如何にせば可からんかと、兩人共に心迷ひぬ、陸に上りて彼等に會見せんにも、萬一の危險を氣遣ひて、我等も躊躇ひ、

彼等も亦我等を怖るゝこと甚しく、暫時は双方白睨合の姿なりしが、彼等は終に双方の爲めに、安全の方法とや思ひけん、その品々を水際に持來りて、其處に差置きたるまゝ、遠く退き、我等がその品々を紐まで持ち歸るまでは、遙に望見し居たりしが、やがて再び我等に近づき來りたり。

報酬として贈るべき物、我に一つもなかりしかば、彼等に對し、手號を以て感謝の意を表しけるに、折しも一珍事起來て、忽ち彼等をして、大に我が恩義に感ぜしむることとはなりたり。珍事といふは、我等が此く海濱に在りける中、二疋の大野獸甚猛烈なる勢を以て、山より海の方へと馳せ來れり、その態、甲が乙を追ふ如くに見えたれど、雄獸が雌獸を追ふにや、或は互に戲むるゝにや、將た怒り狂へるにや、そを知る由なかりしと共に、又此る事は常例のことなりや、又は稀有のことなりや、知る由更になかりしが、第一には此る猛獸は夜間のみ稀に出づることあると、第二には、此場に居たる黑人等、殊に婦人が震慴きたるより察するに、これ恐らくは稀有の事ならんとは信ぜられたり。此くて投鎗を持ちたる一人の外は、皆逃げ去りけるが、彼の二疋の獸は、黑人には目もくれず、直に海中に飛び入り、恰も嬉戲をなさんとて來りしが如く、彼處此處と泳ぎ廻り、終にその一疋は意外にも我艇の邊り近く來りたり、我は豫て此る事もやあらんと思ひ、既に敏捷く銃に火藥を込め、且つ〻リイに命じて、他の二挺の銃にも裝藥せしめ置きたれば、彼の一獸が射頃の内に來るや否や、轟然一發其頭を射貫しければ、彼は直ちに水中に沈みしかど、暫く暇に再姿を現はし、浮きつ沈みつ、悶え苦しむと暫時にして、忽ち海岸を指して遁げ行きしが、致命の傷所に堪へ兼ね、且つは水の爲めに窒息やしたりけん、未だ海岸に達せずして終に死したりけり。

我が銃の音響と發火の爲めに、此等の憫むべき黑人共の狼狽しその狀態は、いかでこれを筆紙に表はすことを得べき、彼等の中には、恐怖の餘り殆んど死せるが如きものあり、又震駭けるため、倒れて氣絕せるもありたり。去れども、眼前該獸の死して、水中に沈めるを見、且は海濱に來れと、我が手招きせるを見て、彼等はやがて心を取直し、海岸に出來り、かの獸の死體を探しぬ。鮮血のために、水の染れるを便として、我はその死骸を見出し、その周圍に繩を掛けて、黑人等に引かしめければ、彼等は之を岸上に曳行きけるが、此野獸は奇態なる豹にて、その斑文の美麗なること、驚歎する計りなりしと、且つ斯る獸をば、如何なる武器を以て、殺しげるにやと、土人等は怪しみ訝りしも、又兩手を擧げて我が功を稱したり。

他の一疋の野獸は、銃聲と火光にや驚きけん、海岸に泳ぎ着き、元來し山の方に逃げ行き、距離已に遠ざかりければ、何の獸なりしか、これを知るに由なかりき。さても、黑人等は、此獸肉を味はんと欲する氣色見えければ、我は贈物として、之を彼等に與へばやと思ひ、手眞似を以て

其意を示しけるに、その歡喜一方ならず、直ちに調理に取掛りけるが、庖刀なければ、尖れる木片を以て、容易く其皮を剝取りたる手際の巧なると、遙に我等が庖刀を以てするに勝れり。彼等は其肉の若干を我が前に供へたれど、我は彼等に與へんと欲する意を示して、之をば謝絶みて受けず、只皮を得たしと手眞似を以て示しけるに、彼等は少しも拒む氣色なく皮を我に與へ、且つ更に多量の食物を持來りぬ、我はその何物なるかを知らざりしも、之をば受け收めたり。さて又我は手號にて水を得たしとの意を示し、甕一個を取出し、其底を轉倒して、空虛なるを示し、之に水を滿さんとを請ひければ、彼等は直ちに二三の友を呼びしに、二人の婦人、乾土製の大なる器一個を携來り、之を前の如く我の前に置きたれば、我はズリイに命じ、甕を携帶して上陸せしめ、總て三個の甕に水を滿さしめたり。婦人も其色の眞黑なると男子に異ならざりき。

さる程に我は既に根類穀類、並に水の供給を得たれば、この友誼ある黑人等に別れを告げ、更に十二日許りが程、海岸に近寄らずして艇を進めけるに、竟に凡五、六里の前面に當り、遙に海中に突出せる陸地を望見たり。折しも海上平穩なりければ、此岬の端を大に迂回せばやと思ひ、陸を距ること凡そ三里程の沖を乘りて周りけるに、果して明々地一方に陸地を認めたり、我は此れベルド岬に相違なし、又海中に散點する諸島は、ベルド諸島と稱するものなりと推斷したれども、此諸島は距離甚遠くして、假令疾風に送らるゝとも、何れにも達すると適ふまじければ、何とせん樣もなかりけり。

此くばかり我は進退谷りて、深く憂に沈み、船室に入て身を横へ居けるに、舵を執り居たる少年ズリイは突然叫びて、

「旦那、旦那一艘の帆前船が見えます」

と言ひたり、最早追手の掛るべき恐なき處まて逃げ延びたるに、少年は之を知らずして、これ必定我等を追はんために派遣せる主人の船なりと推測り、周章狼狽きたるこそ怨なれ。我は船室より飛出し、屹と看やりたるに、これぞ葡萄牙の船にて、奴隷商賣の爲めに、ギニーの海岸に向ふものと鑑定せられけり。然れども尙ほ熟その船の針路を觀るに、他の方向を執り、此海岸に近寄るべき模樣なきこと忽ちに察せられければ、我は成るべく彼等と談話せんと思ひ、出來得るだけ沖の方へ乘出したり。

出來得る限り、帆布を張りて駛せたりとて、此方の合圖を爲すまてには、彼の船は行過ぐべければ、到底其航路に出會ふと叶ふまじと思ひたれど、尙ほ十分帆を張りて走せければ、希望の綱のまだ絶えざる中、彼方は望遠鏡にて、此方を看たりと覺しきのみならず、我艇をおて、或る難破船に屬せる、歐洲形の端艇なりとや想像したりけん、稍帆を弛めて我艇の到るをぞ待ちうけける、我は之に勵まされ、艇に在りたる主人の旗を打振り〳〵、また銃をも發火し、難船の合圖を

爲しけるに、彼の船よりは、此合圖を兩つながら見たりとぞ、そは銃聲は聞かざりしも、その煙をば見たりと、後ちに彼等の物語にて知られたり。さても、此合圖に依り、彼の船は親切にも船を此方に向け直し、我が爲めに停止りければ、凡そ三時間程にして、我は彼の船に行着きたり。

彼船の人々は、己は何ものなるかと、先づ備荷牙語を以て、次に西班牙語を以て、次に佛蘭西語を以て問ひたれども、我は何れをも解せざりしが、終に此船中に乘り居たるスコットランド（英國の一部）生れの一人の水夫、英語を以て我に話しかけたれば、我は之に答へ、英國人なるとサリイ港のムウル人に奴隷とせられ居たるを、逃れ來れることなど語りければ、彼等は我に乘船を許るし、貨物を悉く船に移し載せ、甚親切に待遇しけり。

此くて我は、これまでの如き、不幸にして殆んど絶望なる境遇より、救ひ出されたれば、何人もさこそと思はん如く、我が歡喜は何なる言語にも述べんやうなく、此救護に對する報謝として我の所有物をば、皆悉く直に船長の前に呈しけるに、船長はいと寛大に我に向ひ、彼は何物をも受くるを好まず、やがてブラジル國に到着せん時、夫等は悉く我に渡すべしと語り、さて言ふやう、

『余輩が今君の生命を助けたのは、別に何も他に意味があるのではない、只若しも自分が人に救はれたときには、嘸嬉しからふといふ、同情から出たのに過ぎない、余輩も亦早晩君と同

じ樣な境遇に立とがないとも圖り難いからねえ』

と云ひ、又言葉を繼ぎ

『そればかりではない、余輩が君を君の鄕國からは甚遠いブラジル國に連れて行くのに、余輩が若し君の所有物を取つたならば、君は彼地へ行つて飢死するだらう、さすれば一旦君に與へた生命を、余輩が再び奪と同樣ではないか』

と說聽かせ、更に語を改め

『いや、いや、英人君、余輩は君を無代て彼地へ連て行かう、さうすれば此等の物は彼地て君が生活の必要品を買つたり、又故鄕へ歸る時の助けにもなるだらう』

と甚懇ろに述べにけり。

船長が慈愛の籠れる此言葉は、只口のみにはあらて、實際少しも違ふ所なく、總て我が物品には、何人たりとも決して手を觸るべからずと、船員一同に申渡し、さて我が一切の物品を一先づ船長の所有とし、一々その目錄を作り、彼の三個の土甕をも記して、之を我に渡し、かくして後に殘りなく我に得させんとは計らひてけり。

我が端艇は甚良好かりければ、船長は之を我より買取りて、己が船に備へんものと、我にその價を問ひければ、我は之に對し、萬事に就き此くまて寛大に扱はるゝに、いかてか端艇の代價な

ど申さるべき、偏に貴意に儘すのみと言ひければ、船長は然らばブラジルに着きたる上、其代價として西貨(西班牙の貨幣にて我凡貳圓に當る)八十個を我に與ふべしとて、手形を認めて我に渡し、加之ならず彼地に着し後、更らに高價に買取るものあらば、船長はその價額丈を拂ふべしと語りたり。やがて船長は、又少年ズリイの身代として、西貨六十個を渡されたれど、我はこれを取るとを拒めり、そは彼を船長に渡たすを嫌ひしが爲めにはあらず、我を助けて我目的を達せしめんとて、此く忠實に盡力せる、此可憐なる少年の自由を賣るとは、我は甚好まざりければなり、されば此理由を語りけるに、船長は之を正當なりとし、然らんには彼の少年若し基督教徒とならば、十年を期して彼に自由を與へんとを約すべしと言ひ出て、ズリイも悅んで船長に使はるべしと申しければ、我は遂に其意にまかせて、彼を船長に與へたり。

さても海上頗る平穩にて、凡二十二日を經て、我等はトドス、ロス、サントス灣一名ヲールセイント灣(萬聖灣の義)に到着したり。是に於て我は最も悲慘なる境遇より、再び救出されたれば、次きには如何に我身の振方をつくべきかと、茲に思案を運らさゞるを得ぬとはなれり。

當時我の、船長より受けたる、寛大の待遇は、今一々これを記憶せざれども、その二三を揭ぐれば、船長は我に船賃を少しも拂はしめず、豹の皮の代價として二十金、獅の皮の代價として四十金を與へ、我が所有せる物をば、直ちに我に渡さしめたり、而して我賣らんと欲したる物、即ち瓶函、銃二挺、それに甞て蠟燭を造りたる蜂蜜の一塊の如きは、これを我より買取り呉れたり、之れを一言に言へば、我は所有物を悉皆賣りて、西貨凡そ二百二十金を得、此資本金を握りて、ブラジル國に上陸したり。

さても此處に來りてより間もなく、彼の船長に似たる、善良にて正直なる一人の家に紹介せられ、暫く此人と同居しけるが、此人は砂糖畑と砂糖製造所とを所有しける、その緣故より、我も砂糖の栽培と、その製造法とを學び知るとをえてけるが、此等の栽培者が富裕に生活し、又暫時の間に富を作れる樣を見て、我は心に思ひけるやう、我も其所に住居するとを許さるゝならば、彼等の中に立交はりて、栽培人となるに若かず、それに就ても、先にロンドン市に遣し置きたる、かの金子を何とかして、此方に廻送しめばやと考へ、此くて、是れが爲めに、歸化狀の如き者を得たれば、先づ所持金を以て得らるべき程の原野を購ひ、又英國より受取るべき、金額に相當せる栽培法と住居とに就き、それ〳〵方案をゞ立たりける。

我が隣人は葡萄牙人にて、リズボン市(註、葡萄牙國の首府)の生れなるが、その兩親は英國人にして、姓をウエルスと云ひ、その生活の狀態よく我に似よりたり。彼を隣人といふは、その砂糖畑我の砂糖畑と境を接へ、互の交情甚親密かりしゆゑなり。我の資本は彼の資本と同じく、僅小なりければ、凡そ二年の間は、只己れの食物を得る爲めに栽培けるが、それより兩人の產額次

第に增加はり、地面も漸次夥頗しければ、三年目には、兩人とも若干の煙草を植ゑ、且つ翌年の砂糖栽培の爲めに、各廣き地面を準備したれども、我等は共に助手の缺乏さに苦しみ、我は彼の少年ズリイを手離しゝとの失策なりしを、前よりも一層強く感じたり。

然れども、嗚呼悲さかな、凡そ前に正當の道を踐まざりし者は、後に心にもなき事を行ふは、これ誠に自然の結果にして、我に取りては、少しも怪しむに足らず。されば當時此境遇に立ちて、此のまゝ事業を進むるの外、他に爲術はなかりしかども、熟〻惟みるに、我が現從事せる業務は、全く我の天賦に何の緣故もなく、又我が好める生活にも、全く相反するのみならず、嘗て父の敎訓に背き、其家を去りたりしも、今はその甲斐少しもなく、襄さに父が說勸め給し、所謂中等の位置、即ち下等社會の上位に、我は是れより入らんとは爲しつゝあるなり。嗚呼若し此る事ならば、當時父の命に從ひ、故郷に留りたらんには、徒に異郷を遍ひて、身を苦しめ、心を勞するともなかりしものをと、屢先非を悔ひ、

『嗚呼英國に居て、親戚故舊の中に交つて、此樣にしたなら、五千哩を隔つて居る、此荒野に來て、野蠻人を相手にし、又自分の知人とは全く音信不通にて、如斯事を爲るには及ばなかつたのに』

と折々は獨語つゝ、嘆息したりけり。

實に我は此時の狀態を顧みて、常に大に悲み、嗚呼此隣人と時折談話する外には、誰一人談話を交ふべき人もなし。又自己の手を動かさざれば、何事をも爲すと能はず、是れ恰も自己の外に一人も居らざる無人島に棄てられし人に似たりと、獨り自から囁きたるとも屈なりき。然れど凡そ何人にもあれ、自己の現狀を以て、之を一層劣れる狀態に比べて歎息するならば、天は乃ち其狀態を交換せしめ、其人をして以前の狀態の、寧ろ幸福なりしことを實驗せしむることなきにあらず、これ寔に至當の事なり。されば我若し當時の狀態に安んじて、之を繼續けしならば、十中八九は、非常に富み榮えたらんものを、動もすれば之を以て孤島、若くは荒地に於ける眞誠の獨棲孤居と同視して、數嗟嘆したるが故、後に至りて竟に孤島の生活を爲すに至れるは、畢竟我の天運にやあらん、誠に是非なき次第なり。

さる程に、我を航海中に救ひ呉れたる、我親友の船長は貨物の積入れ、並に航海の準備等にて、幾んど三月の間船を此港に碇泊せしめ居けるが、其間に我が砂糖栽培事業も幾分かその緒に着きたるを視て、共に慶ぶと斜ならず、且つその出發に臨み、我は嘗てロンドン市に遺し置きたる、些少の資金の事を語りければ、船長はいと親切に我に忠告して曰けるやう、

『英人君君が今此所て、拙者宛に書面と委任狀を認め、君の金を預つて居る、ロンドン市の人に對し、拙者の名指人宛て、リズボン市まて君の資金を送付せと命令するなら、拙者は之を

以て此國に適する物品を購求ひ、幸に再び此地に來るとき、それを持參しやう、然しながら凡そ人間社會の事は、千變萬化極まりがないし、又往々意外の災厄も圖り難いから、君はその半額一千圓丈の送付を命令して、先づそれで試みるとにする方がよからう、而して若しそれが安全に到着したら、更に殘金を送付する樣に命令するがよからう、若し又間違つたら、その半額は、豫備として保存するがよいではないか』

と言ひたり。

我は此忠告を聽き、その用意の周到きたると、友誼の深厚とに感激し、且つは此外に善き方法なしと思はれければ、船長の言ひし如く、彼の金子を預け置きたる、淑女宛の書面を認め、又その望にまかせ、船長に對する一通の委任狀をゞ作りける。

英國船長の寡婦に宛たる書狀には、我が冒險に關する事、奴隷となされし事、逃亡したる事、海中にて葡萄牙の船長に出會ひし事、同船長の我に對する仁惠の事、我の目下の狀態に關する事等委細の事情、並に我が要ある物品の供給に關する必要の命令を認めたり、此くて此正直なる船長は間もなく出發して、葡萄牙國なるリズボン市に歸航りげるが、幸其地に居たる、或る英國商人に依賴し、我の命令のみならず、我に關する委細の事情をもロンドン市の一商人に傳達し、此商人より、それを懇ろに彼女に物語りければ、彼女は我が預金を渡せしのみならず、船長が我に對せる仁慈の行爲に報いんとて、自己の懷中を開らきて、船長にいと厚謝物をゞ贈りける。

ロンドン市の此一商人は、一千圓の金を以て、船長が豫て注文したる物品を購求め、それを直にリズボン市なる船長に送附しければ、船長はそれを悉皆ブラジル國に持參して、我に屆け呉れたり、此物品の中には、我が當時未栽培事業に通ざりし爲め、心附かで注文せざりし、種々の器具、鐵器、其他栽培の爲めに必要なる諸具をも、船長の注意に依りて加へられたれば、それ等は我が爲めに大に用立ちたり。

此等の貨物の到着しける時、我は之を見て、我が身代は既に出來たりと思ひ、飛立つ計りに打悅びたり、加之船長は、恰も我が爲めに執事の役目を勤め呉れたり、我友なる寡婦より彼に贈りたる、五十圓の金子をもて、一人の僕を購ひ、六年の年期を約し、これを遙々伴ひ來れり、其好意寔に謝するに餘りあり、されど我が贈らんとせし謝禮は、少量の煙草を、我が自身の製造なればとて、強ひて受領を求めたる外は、何一つとして之を受領ざりき。

此れのみならず、我が得たる貨物は、羅紗、毛糸、粗毛布、其他此國に於て、特に人の所望する重寶の品々にて、何れも英國製なりければ、我は或る便を得て、之を賣代なし、甚大なる利潤を得たり、之を貨物の原價に比ぶれば、四倍以上に上りければ、愛さに船長がリズボンより連れ來れる僕の外に、先づ一人の黑奴を購ひ、且つ一人の歐洲生の僕をも雇ひ入れたり、是に至りて、

我が栽培事業に費せる金額は、之を貧乏なる隣人に比ぶれば、雲泥の相違とはなりてけり。

されど、凡そ不慮の繁榮は、往々大なる災厄を招く媒介となるとかや。我も亦此理を免るゝと能はざりしこそ是非なけれ。さても其翌年は、栽培事業大に成功し、豫て我が近隣の人々の需用額として見込みたる以外に、煙草五十束を、自己の地面より收獲しが、此五十束は其重量各百二十封度以上あり、善く乾燥て、リズボン市より商船の回航するまで、貯藏置きけり。今は事業も財産も、次第に增加しければ、我は高慢の心や增長じけん、我が力に及ばざる、種々の計畫企業に心を惱しける、これぞ即ち卓越たる事業家をも屢〻失敗せしむる端緒なりける。我若し當時の狀態にて續きしならんには、嘗て我が父が然く熱心に勸め給ひたる、平穩無事の生涯を送り、所謂中等社會に於て最も多く享得らるべき諸の幸福にも尙ほ益〻浴すると

を得しならんに、我は猶ほ飽き足らで、自ら進んで災危を招くの媒介者とはなれり、殊に此失策を加へ、又その惡結果を增さしめたるは、彼の海外遊歷の妄想にして、之を實行せんとの意志頑として我を離れず、かの造化と神明とが俱に心を合せて、我身に賦與給ひたる、諸の希望と手段とを追進めなば、我身の幸福を招くべきと明白なるに、竟に之に背きて、無謀の望を遂んとはしたり。嗚呼憂きには、父母の恩愛を振棄て、故郷を逃れ出てけるが、當時に於ても尙ほ自から滿足すると能はで、只管ら天の許るさぬ暴富を得んと思ひ起し、一時は此栽培事業に依りて、身を立て、產を興さんとしける、目出度き志望をも拋ち、遂に再び不幸の深淵に、此身を投げ入れ、死にも得せず、又指したる病にも罹らで、長の歲月寂しき生活を送ることとぞなりにける。

いざや、是より後に洙りて、事の玆に至れる次第を語らん。さても、我はブラジル國に來りてより、最早幾んど四年の星霜を送り、栽培事業も次第に進步繁昌し、また既に國語を習覺えたるのみならず、同業者の中にも、又此地の港なるセント、サルバドル市の商人中にも、知己を得、交際を結びければ、彼等と會談する際には、我が嘗てギニイの海岸に、二度まで航海したる事、その地にて黑奴と貿易したる事、さては飾球、氈具、小刀、鋏、鉞、瓦羅斯の小片、其他類似の廉價物を携へ行き、之を以て砂金、ギニイ穀物、象牙等のみならず、多數の黑奴をも購ひて、

ブラジルの用に供するも、甚容易なる事など、語り聽かせたること度々なりけり。

此等の事項に關する我談話に對し、彼等は常に意を留めて聽居けるが、殊に黑奴の購買に關する一點には、最も注意しけり、此黑奴の買買は、此頃は未廣くは行はれず、僅に西班牙葡萄牙王の允許を得て行はれ、之を公有資産の中に包含せければ、黑奴の此國に連來られたるもの、甚少數にして、其價亦非常に高かりけり。

此くて或る日、我が知れる商人並に栽培者の甲乙と會合し、我は例の如く此等の事柄に就き、熱心に談話けるに、其翌日の朝其中の三人我家に來り、我が昨夜談話せし事柄に就き、甚興味を覺えたる由を語りける後、彼等の言ふやう、今朝來りたるは、一つの密事を談さんとてなり、吳々も秘密を保り給へ、實は我々共は同樣に耕地は所有すれども、耕夫乏しきが爲め、事業の手を伸ばすこと能はず、さればとて奴隷の買買は、此國にては公然許るされざれば、如何とも爲し難し、故にギニイの海岸に行ん爲め、一艘の船を仕立てゝ、一度彼地に航海し、奴隷を購ひて、私に此海岸に連來り、之を我々の耕地に分配せばやと思ふなり、畢竟するに我は監督者として、此船に乘り行き、ギニイの海岸に於て、此買買の事を取扱ひ吳れまじきや、若し之を承諾するならば、我は資本を出さずして、平等に奴隷の分配を受け得らるべしと、彼等は交々申出たり。多額の資金を注入れて、將來益望多き耕地を持たざる者に對して、斯る申出を爲す者あらば、誰れか之を拒むもののあるべきや。然れども此頃の我として之を考ふるに、既に一身を此事業に入れ、その基礎漸く立ちたれば、尙ほ三四年の間は、初志の如く進行し、殘餘の一千圓をも、英國より取寄せ、益我が事業を擴張るの外なきのみならず、當時若し此少數の金を事業に加へなば、その耕地の價格を三四萬圓までに增加せしめ、尙ほ一層增加せしむること、決して難からざりしなり、されば我にして、若し此の如き申出を諾けなば、そは實に狂氣の沙汰にて、實に又一種の罪惡を犯すの誹を免るべからず。

然るに、我は自己の破壞者として、生れ來りたる悲しさには、嘗て世界遊歷の初念を禁ずること能はざりしと同じく、父の敎訓の旣に我が心より消失せたる時とて、いかでか此申出を拒絕でとを得べき、我は之に答て、我が留守中に善く我が耕地を守り、我若し誤たば我の指命通に、それを處理せんとならば、我は喜んで彼地に趣くべきよしを答へたり。此くて此人々は異口同音に我の言ふ如くに爲さんと誓ひ、書面を作りて契約を結びければ、我も亦形の如く遺言狀を作り、我が死せし場合には、嘗て我が一命を救助け吳れたる、かの船長を以て我が相續人と定め、我が耕地並に財産を處分せしむることゝし、但し遺言狀に指示せる如く、生産物の半は、之を船長の所得とし、其半は之を英國へ送附せしむることゝ爲したり。

餘談は之を省き、さて我は我が財産を保護し、且つ我耕地を維持せん爲めに、十分意を用ゐた

り。嗚呼、我此時今少しく意を用ゐて、自己の利益を顧み、又事の利害を考へ、自ら爲すべきことをば、他人に爲さしめざりしならば、前途益繁榮んとせる、此有望の光景を後に見て、斯る狂妄なる計畫の爲めに、必らず此地を去らざりしならん。又特に不幸に際會ともやあらんと、獨り心に期待せる理由あるも、こは姑らく措き、若し少しく前後を顧みたりしならんには、常に危險の伴へる航海に、必らず出行くことはあらざりしならん。然るに、我は人人より促がさるゝまゝ、事の道理には據らで、寧ろ我が妄想にまかせ、前後の利害を打忘れ、やがて船の準備も調ひ、貨物も皆積まれ、其他豫ての約束の如く、諸事調ひければ、一千六百五十九年九月一日といふ凶日に、船にぞ乘り込みける、此日は、八年前に父母の嚴命に反き、我が利益を顧みず、ハルの町より逃亡したる、その日と恰も同日なりしこそ、實に不思議なりけれ。

第三段　船舶を艤して遙に亞弗利加に志し　途中颶風に逢うて孤島に漂着す。

船は積載量凡そ一百二十噸にして、砲六門を備へ、乘組人は船長、給仕と、我の外に十四名、積荷は黑人と貿易すべき瓲具類、即ち飾玉、瓦羅斯の細片、貝殼、其他小鏡、小刀、鋏、鉞の如きものの外には、大貨物はなかりき。

我が乘組し日に、船は纜を解きたり、初めは海岸に沿うて北方に向ひ、北緯十度若くは十二度の邊にて轉じて、亞弗利加の海岸に向て進まんとの見込なりき。これ當時普通の航路なりしと見ゆ。セント、ヲウガスチノ岬の高崖に至るまでは、常に海岸に沿うて進みしが、只氣候の非常に炎熱かりしのみ、天氣は甚良好なりき、それより次第に沖に出て、遂に陸地も見えずなりしが、フアルナンド、デ、ノロンヤ諸島に向ふが如く、北北東の針路を保ち、同島嶼を西に見て進航し、航程凡そ十二日にして赤道線を通過ぎ、最後の觀測に據れば、北緯七度二十二分の地點にありし時、突然激烈き颶風起り、絶て知らざる地方に吹流されたり。此颶風は南東より始り、轉じて北西と爲り、終に北東に回りて、その風勢凄じく、十二日の間は、只風のなに〳〵馳する外、更に詮術なかりけり、實に此間は、毎日海底の藻屑とならんを待つのみにて、船中の者誰一人生命を救はるべしとは思はざりけり。

（註）フアルナンド、デ、ノロンヤ諸島は、南大西洋の一群島にして、南亞米利加のセント、ヲウガスチノ岬より、東北凡そ百九十四哩を距て、南緯三度五十分、西經三十二度二十五分にあり。島の最大なるは、周圍凡そ二十哩にして、地表に岩丘多く高峯は一千尺に達するものあり。全島樹木を以て蔽はる。アラジル國の罪囚を流竄する所なりとぞ。第二段地圖參照

此災難の中、暴風の爲めに心膽を寒からしめたるのみならず、乘組人の一人は、妄譫病を發して死亡し、他の一人と一少年とは、怒濤の爲めに海中にさらひ落されたり。さても凡そ十二日目

に至り、天候少しく回復しければ、船長は力を盡して觀測せしに、船の位置は、北緯凡そ十二度西經はセント、ヨウガスチノ岬より、西方二十二度に在るを以て推測れば、ブラジルの北方ギアナの海岸より北に當り、アマゾン河口を越え、通常大河と稱するオリノコ河口に面する邊なること判明したりしが、船長は此時より何なる方針を取るべきかと、初めて我に協議し、さて船も漏水の個所あり、航海に堪へざるべければ、直にブラジルの海岸に引返すに若かずと思ふ由を語りたり。

我は斷然之に反對し、彼と共に亞米利加の沿岸海圖を一覽し、カリビイ諸島（西印度諸島中の一群島にて其東南部に位するもの）の圈内に到るまでは、無人の境界にて、物資を得るの方便なければ、バルバドス島（カリビイ諸島中最東の島）に到るべしと協議一決し、さてメキシコ灣の内向流を避んため、沖の方を進行かば、凡そ十五日にして、容易に該島に達すべしと思ひたり、此くバルバドス島に到らんとせしは、船並に乘船者につき、此際他の援助を仰がざれば、到底亞弗利加の海岸に航行べからざる事情ありたればなり。

此方針を以て、我が援助を得んとせる、英領諸島の或ものに達せんと針路を一變して、西北西の方に進行みけるに、豈圖らんや、十二度十八分の緯度に在りし際、第二の暴風に襲はれ、急に西方に流され、人類の通路以外に運び去られければ、たとひ生命は颶風より救はるゝとも、

蠻人の爲めに食はれ、結局本國に歸るの希望は絶えはてたり。

此く再度の難船に苦み、風勢尙ほ烈しかりしとき、一日の早旦、乘員の一名が、

『陸地が見える』

と叫びたれば、我等は爭うて船室より馳け出し、海面を看て、船の位置を知らんとせし刹那に、船は沙洲に乘上げて、そのまゝ進行は停り、怒濤甲板を洗ひ、其狀態いと凄じく、我等は皆立地に滅亡せんかと思はれしが、波浪の飛沫を避んと、皆期せずして船内にぞ追ひすくめられける。

自ら之に類似せる境遇に居りし者ならでは、斯る場合に、人の周章狼狽く、狀態を記述し、若くは思料すること容易にはあらず。我等は今何處にあるか、我等の打上られたるは何地なるか、島か大陸か、住民ありや、住民なきや、少しも知るによしなかりき、初めよりは稍和ぎたれど、風威尙烈かりければ、若し不思議の力によりて、風向俄に轉變るにあらずば、數分時の間たりとも、紛碎せられずして、船を保つの望は全く盡きはて、互に顏を見合せて、只刻々に死を待ちつゝ、冥土に赴くの用意を爲すのみ、他に何んと爲ん樣もなけれど、此期に及びて、せめてもの慰安となりしは、船の意外にも未だ破壞せられざりしと、船長が風は和ぎ始めたりと云ひしと、この二つなりけり。

さても、風力は少しく減じたれど、船は砂上に坐して、固く淵着し、浮上るべき望なければ、

實に恐怖ろしきこと限りなく、只我等の生命を救はんと考ふる外には、別に爲術なかりけるが、あはれや、此暴風の起る前に、舳の方にありし端艇は、舵に打れて、先づ底を貫穿かれ、次で破壞せられ、或は海中に沈みたるか、或は波濤にさらはれたるか、既に見えずなりにけり。他の一艘の端艇は、現に甲板の上にあれども、如何にして之を海に下ろさんか、甚だ覺束なかりけるに、船は今にも微塵に碎かれんかと思はれ、或は既に破られたりと云ふものもありたれば、彼是論議すべき餘裕なかりし中に、水夫長は端艇に手をかけ、他の船員の援助によりて、これを船側に釣下ろし、辛うして人々を乘せたれば、我々同勢十一人は運命を神の恩寵と荒海とに打任せたり。かくて風勢は著るしく減退せしも、波浪尙高く、海岸に激し、その光景の恐ろしさ、何といふやうもなかりけり。

さても我等の境涯は、實に慘憺として物凄く、今にも端艇覆りて、我等の溺死せんこと疑なければ、皆々覺悟をぞ極めける。帆を揚んとするも、一張もなし、假令これありとも、いかでか用ゆることを得べき、故に唯櫓を頼りとして、陸地に向て突進するも、心中苦悶に堪へやらず、恰も刑臺に近よらんとする罪人は、かくこそあらめと思はれける、何となれば、端艇海岸に接近れば、波濤の爲めに粉碎せらるべきこと明なればなり。さればとて此期に臨みては、また他に如何とも爲すべき樣なく、皆心を合せて、我が靈を神に任せ、風に送られつゝ、海岸に向ひ櫓を押しに押して、自己の破滅をぞ急ぎける。

海岸の模樣は如何にかあらん、岩礁なるか、沙濱なるか、嶮峻なるか、平夷なるか、我等はこれを知らず、若し幸に澪江、若くは河口ありて、そこに端艇を入るゝことを得るか、又は陸地の陰に隱れ、若くは平穩なる水に入ることを得るならば、僅に萬一を僥倖することを得べし、これ我々が期待したる唯一の希望なりけり。然るに此の如き景象は全くなく、海濱に近づけば近づく程、陸地の恐るべきこと、海よりも一層甚しかりき。

凡そ二里程も漕ぎたり、否、漕ぎたるよりも寧ろ浪に逐はれたりしに、山の如き怒濤後ろより逆卷き來りて、忽ち端艇を覆へしければ、艇も人も散り〳〵に分れ、「嗟呼神よ」と云ふ間もあらせず、我等は皆波間に沒し了はりたり。

波間に沈沒たる、その刹那の感想は、迷ひ亂れて、譬んにものなし、我は力のかぎり、水を潛りて泳ぎしも、呼吸することも叶はず、只水中に悶躁しが、波浪は我を逐ひ、いな我を運びて、遙に海岸の方へ送りしまゝ、さつと引返し、我をば殆んど乾ける沙上に遺棄したり。水を飲みたるため、我は半ば死せし如くなりしが、心氣は猶ほ確にて、ほつと呼吸つき、意外に陸地に近きを見、また〳〵波浪の來ぬ間にと、直ちに起ちて、陸地の方へ走らんとしけるが、彼時早く此の時遲く、忽ち山の如き波浪我を逐ひ來り、その猛烈なること敵兵の如きを見て、我はこれと戰は

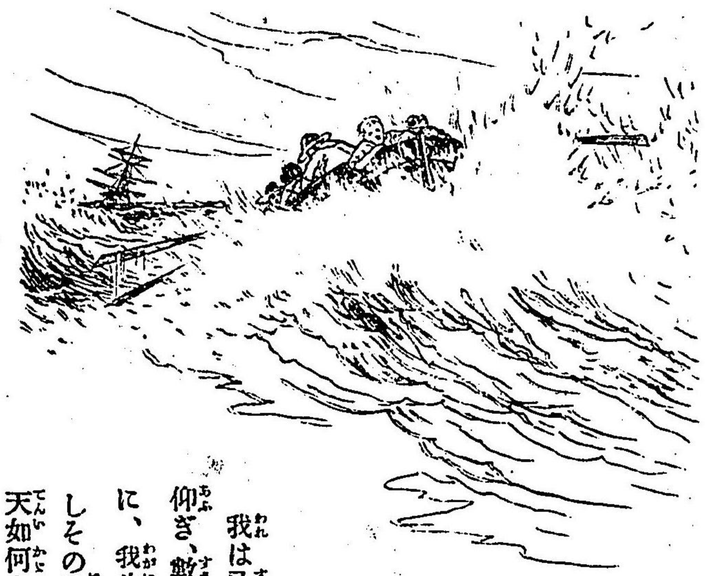
んも力なく、只管呼吸を保ち、身體を水上に浮せんとは勉めたり。此くて我は泳ぎては呼吸をつき、成るべく海岸に近かんとしけるが、此時我が心に掛りたるは、波浪の打來るときに、海岸の方に遠く運ばるゝも、その引退るときに、再び冲の方に運れゆかれんことなりき。

再び來れる波浪は、忽ち我を二三十呎の深さに埋沒め、此くて勢猛けく我を遙かに海岸の方へ運び行ぬと感じけるが、我は呼吸を殺し、力を極めて前方へと泳ぎたり。溜めたる息を將に吐んとし、自ら浮上れりと感ぜし刹那に、幸なるかな、頭と手とがつと水面に顯はれ、その儘に在りしは、僅に二秒時間に過ぎざりしも、これ我れには大なる援助にて、爲めに呼吸をつき、勇氣を恢復したり。又々暫らく波浪に掩はれしが、程なく水面に出しに、水勢盡きて、引退くを見、之に反抗して奮進しければ、足は再び地に着きたり。そのまゝ霎時呼吸をつき、水の去るを待ちて、踵を地に着け、速足く海岸さして馳りたり。然れども、波濤は未だ我を赦さず、再び我を追蹤來りて、足をすくひ捕ければ、我は海濱の平坦なるにまかせて、前の如く陸地の方にぞ追はれける。

此最後の折は、我に取りては殆んど必死の場合にて、波浪は前の如く我を促がして陸地に追ひあげしが、したゝかに岩角に擊ちつけられ、殆んど絶息せん計りとなり、何んとせん力もなく、脇腹と胸板との痛み堪へ難く、呼吸はづみて一歩も動き得ざりき、此時波浪再び直に打寄せ來らば、必定窒息したるならんか、幸にその少しく前に恢復したれば、意を決して確と岩角に執着き、

暫らく息を殺して、波浪の引退くをぞ待居ける。此度は稍陸地に近きため、波浪は初めの如く高からざりしかば、その引退くまで、岩に掛けたる手を放たず、霎時支へて波浪の退くを待ち、一目散に馳け出し、一段海岸に近づきたれば、次に寄せたる高波は、我が頭上を越えたれど、我はそれに運ばれもせて、再び走りければ、辛く陸地に達し、斷崖に攀りて、草の上に揾と坐し、爰に全く危難を免れたれば、喜悅極りなかりき。

我は已に陸上に在り、何の危險もなき故に、やをら天を仰ぎ、數分時の前には、一縷の望だになかりし此危急の場合に、我生命の救はれたるを、神に對つて感謝したり。人若しその墳墓より救出さるゝこともあらば、衷心の慶喜、仰天如何あらん、そを言語に表すことは難かるべし。また爰に一の罪人あり、其頸に絞繩を掛けられ、將に處刑せられんとするに臨み、突然彼に特赦令を傳



へんとする時は、此事を彼に傳ふるの刹那に、驚駭の餘り、彼の氣絶驚倒せんことを恐れ、これと共に醫官を派遣するの慣例ありとかや、是れ決して怪しむべきことにはあらざるなり。

我は双手を擧げ、全身を躍らせ、千狀萬態を爲しつゝ、海濱を歩き廻はり、或は我同行者の皆溺死せることを思ひ、或は我れ一人救はれたることを考へ、喜悲交胸に往來せる其有樣は、いかで今之を筆紙に盡すことを得べき、あはれ我同船者は如何に成り果しか、爾來彼等、若くは彼等の形跡を見聞したることなし、當時僅に遺留したるものは、海岸に打上げられたる、三個の帽子と、一個の頭巾と、二個の不揃なる靴ありしのみ、噫。

さても我は眼を放ちて、かの坐洲したる船を眺めけるに、怒濤尙山の如く、飛沫雪を飛ばし、殆んど見るべからず、遙の冲合にその暗影を認むるのみ、思へば、神よ、我れは如何にして海岸に達することを得たるか。

初めは我境遇の喜ぶべき點を視て、自ら心を慰めけるが、我は今如何なる場處に居るか、これより何事を爲すべきかと、漸く自己の身邊を回顧みけるに、我の歡喜は忽ち空だのみと爲り、幸に救助せられたれども、却てこは恐怖るべき救助なりけり。濡れたれど、着更ふべき衣服なし、食ふべきもの、飲むべきもの、又慰むべきもの、何一つあるなし、飢餓の爲めに死するか、又は野獸の爲めに喰るゝか、この外には我の前には何の希望もなし、殊に最も苦痛を感じたるは、我が露命を維ぐために、何なりと動物を殺さんとするにも、若くは我に害を加へんとする動物を防がんとするにも、一の武器だにもなきことなり、嗟呼何にすべきか。我の身邊には、一挺の小刀と、一本の煙管と、小量の煙草の外、何物もなし、我の備品は唯これのみ、これを思うて我は苦悶と畏懼に堪へず、暫時は狂人の如く馳廻はりたり。兎角する中に、夜陰は我の上に蔽ひかかりたれば、若し此地に猛獸居りて、夜中餌を漁らんとて、出來たらば、我は如何なる運命に會はんかと、思へば轟々として憂虞に堪へざりけり。

此時心に浮びしは、我立つ傍に生茂れる、柏の如き刺ある木に登り、こゝに一夜を明す外、焦眉の危難を免るべき方法なしと思ひ、且は兎ても助からぬ生命ならば、如何にして死すべきか、明日緩々考へんとぞ、心を決しける。此くて清涼なる飲水なきかと、凡そ一丁程索回りしが、幸に看つけて、欣んでこれを飲み、又飢を防がんため、小量の煙草を口に入れ、木の許に到りて、これに登り、たとへ眠るとも墜落ぬやう、身構をぞ爲しける。又防禦の用に供んため、笏の如き短き棒を切取り、これを手に握り、やかて眠に就きけるが、綿の如く疲勞れたる我は、知らず識らず熟睡し、斯る境遇に、嘗て例なきまで愉快を覺えたり。

眠醒むれば、夜は已に明けはなれ、天氣晴朗にして、暴風も已に收まり、海面は昨日と異にして、靜穩なりけるが、最も我を喫驚かしたるは、沙上に乗上げたる船が、潮流の爲めか、夜中に

浮上り、我が昨日したたかに身體を撃ちつけられたる、かの岩礁の邊りまで、打上げられしことにて、我が居る海濱より、凡そ一哩以内の處に在り、而も尚ほ直立するが如く見えければ、自ら甲板に登り、せめては必要品をなりとも、取出さんものと思案をぞなしたりける。

木内の室より下りて、再び四邊を見廻はしけるに、先づ眼に入りたるは、昨日風濤のために投あげられたるまゝ、凡そ二哩ばかり右方なる陸上にありし端艇なり、我はそこに到らんとて、海濱を歩行しけるが、その間に一の入江あり、その幅半哩ばかりもありければ、當時は船に到りて、まづ差當り食物を得んと

の望一層強かりし我は、遺憾ながらも引返したり。

正午少しく過ぎし頃、海面は甚平穏となり、潮も遥に引退ぞきたれば、我は船の三四丁以内に到りけるに、悲哀の情は再び胸裡に萠したり、嗟呼我等若し甲板に止りしならんには、皆安全なりしならん、また何れも海岸に安着したるならん、此くて我も亦今の我が身の如く、朋友も快樂も悉く奪はれて、かく無惨の狀態にはならざりしならんと思へば、恨めしきこと極まりなく、覺えず涙を催しけるが、暫らくありて、少しく思返しければ、心を決して成るべく船に赴かんと、暑氣の酷しきまゝ、衣服を脱ぎすて、水中にぞ飛入りける。然るに船に近づき見れば、船は坐洲して、水面より高く突出したるにぞ、執らんとするも、手の屆くべきものなく、如何にして甲板に登らんか、其術なきに尚ほ一層の困難を覺えけるも、我は船を二回泳ぎ周りけるに、二回目には、初め心付ざりし細き紐の、錨纜の傍に、低く垂れたるを瞥見し、辛うじて取着き、これを便りとして、船の前甲板に上りたり。見れば船は漏水の個所ありて、船艙には水大に溜り居たれど、船體は固着せる沙丘の側面に横はり、その艏は沙丘の上に出、船首は低く殆んど水に達せんとせるも、甲板は何れも無事にして、そこに在るものは皆乾き居たり、讀者も必らず察するならんが我は甲板に上るや、先づ彼所此所を見廻はりて、破損せるものと、無事なるものとを看分けたりしに、船中に備へたる食物は、幸に皆水害を被らず、直ちに食すること叶ひたるをもて、我は先づ

麵包室に行き「ビスケット」を衣嚢に滿たし、食ひつゝ仕事を爲し、一刻も空しくせざらんと勉めたり。又大船室に若干の糖酒あるを發見し、これを大杯にて飲みけるに、陶然として意氣興奮し、前に困難を扣へたる我に取りては、稗益少からざりき。さて必要なりと思ひし幾多の物品を運搬せんには、一艘の端艇こそ、先づ何よりも必用とはなりたれ。

されど、空しく坐して、得られぬものを待んは、無益の業にもあり、又此る危急の際なれば、我は憤然起ちて仕事に着手したり。さても船中には、豫備の帆桁數本、木製の帆案二三本、豫備の上檣一二本あれば、先づ此等を取出し、波浪に流されざるやう、各繩にてくゝり、力の及ぶだけ、これを舷外に投下ろし、此くて艇側に下りて、これを引寄せ、その四本の兩端を結束て筏の形と爲し、短き厚板二三枚をその上に横に置排べたりしに、其上を歩行するに支障なかりしが、此等の木材輕くして、大なる重量に堪へざりければ、我は大工用の鋸を取り、豫備の上檣一本を三ツ切りと爲し、之を筏に附加へけるに、其勞苦大方ならざりき。然れども、必要品を得んとする欲望に勵まされしかば、平常は到底堪へ得まじき程、働らきたり。

是れにて、筏はまづ堅固となり、相應の重量に堪へ得るやうなりたれば、次には之に何を積むべきか、積みたるものをば、寄波の爲めに濡さぬやう、如何に之を保護すべきか、これ即ち我の注意を要せし點なりしも、徐ろに考ふる餘暇なかりければ、取り得られたるだけの板類を、先づ筏の上に悉く載せ、かくて何物か最も必要なると熟考しつゝ、第一に既に開きて空虛となれる水夫樽三個を取出し、之を筏の上に下ろし、その樽の一個に食料品即ち麵包、米、おちんだ乾酪三個、山羊の干肉三片（航海中我等は多く之を食したり）と歐州産の穀物の殘物小量を入れたり、此穀物は我等が初め乘船の時携來りし、小鳥の餌として貯へ置きけるも、その小鳥は既に殺して、食料とせられたり。若干の大麥並に小麥も蓄へありたるに、皆鼠の爲めに食はれ、又は損はれけるを、後に發見して大に失望したり。飲料物は、船長に屬したる瓶函數個あり、その中には若干の興奮料を含み、椰子酒も合せて凡そ五六「ガルロン」ありたり。此等は樽に入るゝ必要もなく、また入るべき餘地もなければ、そのまゝに積載せたり。兎角する中に汐が徐かに進し始め、海岸の沙上に遺しおきける上衣、シャツ、胴衣の、波に漂行くを見て、殘念に思ひけるが、股衣は亞麻布にて、膝の邊まで開らきあれば、これと靴下とは、着たるまゝ、船に泳ぎ來りし故、此難を免れたり、此れがため、衣類の搜索に取掛りしに、幸に數多の衣服あるを發見しけれども、他に一層眼を着けたるものあり、例へば差向き海岸にて工事に要する道具類必要なりければ、衣服は目前入用の外は、これを取らで、長時道具類を搜索けるに、大工の道具函を見出したり、是は我に取りては、最も貴重なる獲物にして、一艘の船に積める黄金よりも、當時には、幾層倍の價値ありたり。さて道具函には何が入りをるかは、大要知り居ければ、その内部の吟味に時間を

徒費さんことを恐れ、これをそのまゝ筏の上に下ろしたり。

次に注意したるは、彈藥と武器となり。大船室に精良なる鳥銃二挺と拳銃二挺ありたり。我は先づ此等を、火藥嚢若干、小形なる彈丸嚢一個並に古き銹たる劍二振と共に取出したり。船中に火藥三樽あることを知り居たれど、銃手が、之を何處に納めたるか知らざりしに、大に搜索して、遂にこれを見出しけるが、二個は無事にて、一個は水に侵され居たり。是に於て此二樽を、武器と共に筏に積みたり。さても我は、可なり善く積載せたりと思ひけれども、帆なく、楫なく、又舵なくして、如何に之を海岸に運ばんかと、考へたり。嗚呼危かな、些たりとも風吹きたらんには、すべて覆沒したるならん。されど、我が頼みとせるもの三つありたり、即ち第一は海面の圓滑にして平穩なりし事、第二は潮の進來りて海岸の方に進みし事、第三は少しくあるかと思はれし風の、陸地の方に吹きける事是なり。此くて又、端艇に附屬せる、二三の折れたる楫と、函内に收めたる道具の外に、鋸二挺、鉞一挺、鍬鎚一挺を見出したれば、之れをも筏に積て陸地の方へ乘出したり。凡そ一哩ばかりの間は筏は、無事に進みけるが、不圖心付けば、我が前に上陸せる處より、少しく距りたる方に向ひつゝありたり、隨つて海水が幾分かその方へ引入らるゝを認めたれば、其邊に必らず小川あらん、然らばこれを以て、我が荷物を陸揚すべき港と爲すべしと思ひたり。果して我想像に違はず、前面に陸地の少しく開らけたる處あり、潮水は勢

強く之に向て流れければ、我は楫を操りて、筏を成るべくその中央に進めたり。

然れども、此處に於て、我は再び殆んど破船の難に罹らんとはしたり、若し此災に遭ひなば、我は誠に絶望したるならん、その故如何となれば我は海岸の狀態を少しも知らざりければ、筏の一端を誤つて淺瀨に乘上げ、他の一端は浮き居ければ、積荷は皆浮き居る一端の方に滑りて、水に落入らんとしたり。我は我が背を以て樞の滑るを支へんと、極力勉めたれども、我が力にては、筏を推進むることもならず、又我の位置より動くこともならず、幾んど半時間程も其儘にて在りけるに、潮水は幸漸く進來りて、我の位置少しく水平となりたり、此くて霎時にして、水一層上りて、筏の一端も再び浮上りければ、我は手に持てる楫を以て、筏を中央に推出し、尙上へと漕ぎければ、遂に兩岸ある小川の口に達し、潮流の勢猛く川上に泝りつゝあるを見たり。筏を着くるに適當の場處やあらんと、兩岸を左顧右眄しけるが、船舶の何時か此沖に來らんとき に、望見するの便利もがなと思ひければ、餘り上流に登るを好まず、成るべく海岸に近き處に居らんとはしたりけり。

遂に小川の右岸に、小さき入江あるを見出し、一方ならぬ苦痛と困難とを犯して、そこまで筏を漕ぎ行き、終に楫を以て地上を支へつゝ、つと筏を押入るるを得べき程岸に近づきたり。左れど、此處にても、亦殆ふく積荷を悉皆海水に浸さんとしたり、そは岸の傾斜急なりしかば、若し

筏を岸に乗上げなば、その一端は高く上り、他の一端は低く下ること、恰も前の如くにして、再び積荷を危ふするの恐ありたればなり。故に満潮の時には、海水に蔽はるべしと思はれし、平坦の岸に接近し、楫を以て筏の側面を岸に押付けつゝ、満潮の時を待つの外、他に詮術なしと思ひしかば、我は竟にかくなしたり。此くて海水も十分上り、筏は水の凡そ一呎許りの處に到りければ、乃ち筏を彼の平坦なる地上に押あげ、揖の折片二本を地に打込み、即ち筏の兩側の一端を各支へ、此くして海水の退くを待ちけるに、筏と積荷とは皆安全に岸上に遺されたり。

次に我が爲すべきことは、土地の模樣を視察し、住居に適する場處を求め、且つ如何なる事變起るとも、傷害を受けざるやう、我が物品の貯藏場所を定むることなりしが、仰も我が居る所は何處なるか、大陸なるか或は島なるか、人の住居するものあるか、或はこれなきか、野獸の危險あるか、或はなきか、我は未だこれ等のことをば知らざりき。天の一方を見れば、一哩以上も距てざる處に、一つの丘陵あり、屹然として他の丘陵を凌ぎ、それより一脉を派して、北に走るが如く見えたり。我は鳥銃一挺と拳銃一挺と火藥一角を取出して、武裝を調へ、探檢の爲めに、かの丘陵の頂上に登らんと立出てけるが、大に勞苦を嘗て、辛く山頂に登りけるに、嗟呼、我運命は知られたり、悲しいかな、我は四周を海水に圍まるゝ一孤島に居れるにて、四方を顧みるに、遙に隔つる三五の岩礁と、これよりも稍近く、凡そ四里を距つる小島二個の外には、眼に觸る陸地一つもなかりけり。

我居る島は、荒涼として地味惡しく、又信ずべき許多の理由より察するに、未だ眼には見ざれども、野獸を除きては、人の住居するもの一人もなかりき。されども、鳥類は夥しく居れども、その種類を知らず、又これを殺すも、何れが食料に適するかを知らざりき。さても山よりの歸途に、大鳥一羽が大いなる森の側の一木に止れるを見て、之を射止めけるが、思ふに此一發は、世界の創造以來、此島にて始めて響きたる銃聲なりしならん。我れが發射するや否や、林中の此所彼所より、無數なる各種の鳥類バット一度に飛び起ち各固有の聲を放ちて、喧々と鳴き叫び、いづれをそれとも判ち難く、且つは我が知りたる種類のもの一羽もあらざりけるが、我の射止めたる鳥は、鷹の一種と認むべく、其の色も嘴もそれに似て、爪の數も普通のものに異ならざりしも、その肉は食料には適せざりき。

先づ此探檢に滿足して、我は筏の在る處に歸來り、その積荷を海岸に揚げ始め、其日の殘餘はこれが爲めに費しけるが、さて夜に入りては、如何にすべきか、地上に寢んか、野獸の爲めに食はれやせんと思へば、眠るべき處もなく、一時は途方に暮れけるが、斯る恐の少しもなきとは、後に至りて知られたり。されど、船より持來りたる、櫃と板類とを以て、我周圍をかこみて、假りにその夜の宿所として、小舍の如きものを造りけるが、食物は何處より得らるべきか、鳥を射

ちける時、兎の如き動物二三疋、森より走り出しを見たる外には、何ものをも見ざりき。

さても、我は竊に思ふやう、船中には尚ほ種々の品物あり、殊に網具、帆布、其他陸地に持來らるべきものは、我に取りて必要ならぬはなし、成るべくは、今一度船に赴かん、且つは此後また暴風吹きなば、必らず船は粉碎に破らるべければ、何にもあれ、持來らるべきものをば、皆持來るまでは、餘事は姑らく打捨おかんと思定め、此くて一の會議は召集せられたり、否我胸中にその相談は開かれけるが、さて復び筏を漕ぎ行くことは、到底行はるべくもあらず、汐の退きたるときに、前回の如く、泳ぎて到らんものと心を決し、頓て小舍を出づるに臨み、かなぐりて脱捨しは、唯悲盤縞の「シャツ」と、麻布の股衣と、足に穿ちし薄靴のみ、身輕なるこそ心安かりけれ。

我は前回の如く船の甲板に登り、第二の筏を用意しけるが、最初の經驗もあれば、今度は此く不體裁には造らず、又此く強ひて積荷をもなさず、唯自己に取りて最も必要なる物品、數點を持出したり、先づその品々を掲ぐれば、大工の貯藏物の中に、釘と大釘を盛りたる袋二三個、螺旋扛重器一基、鉞十二三挺、就中回轉砥石と稱する最も有用のものを見出せしかば、此等の物は總て、砲手に屬せる雜品、殊に鐵鎚二三挺、銃丸二樽、銃七挺、並に鳥銃一挺と之に附屬せる少量の火藥、其他小彈丸の大甕に滿されたるもの、鉛板の大なる一卷と共に、我はこれを取收めたり、但し最後の鉛板は甚重くして、船舷を越えて揚ぐること叶はざりき。此等の品物の外に見出し得たる衣類悉皆、豫備の前檣帆布、釣寢床、その外或る寢具を取出し、之を第二の筏に積載せ、皆安全に海岸に運搬しければ、我が喜悅大方ならざりき。

我不在の中、海岸に遺置きたる食料を、何ものにか食はれやせんかと、多少掛念しけるが、歸りて見れば、何者も來れる氣色なく、只野猫に似たる一疋の動物、櫃上に坐り居り、我の來るを見て、少距離彼所に走りて立ち止り、自若として頓着せず、我顏を見守りけること、恰も我と知己を結ばんと希望するが如く見えければ、我は銃を取りて猫に示しけるに、彼はその意を解せざるが如く、毫もこれに頓着せず、又遁げ去らんともせざれば、我は一片の「ビスケット」を投與へけるに、彼は香を嗅ぎて後それを食ひ、更に請求むるが如く、我を見たれども、我は最早與へざりければ、彼は終に彼所へ行きたり、勿論我が貯蓄は、饒ならねば、一片の「ビスケット」たりとも、惜しく思はざりしにあらねども、かの猫の爲めに割愛したるのみ。

それより、第二の荷物を陸揚せんとせしに、火藥樽大きく、又餘り重かりければ、餘義なく樽を開き、火藥包を個々に搬び、兎角して陸揚を了はり、さて帆布に小孔を穿ち、之を以て小天幕、一張を建設し、雨水又は日光の爲めに損傷せらるべきものをば、皆此天幕の内に搬入れ、天幕の周邊には、空樽と空樽を悉皆積堆ねて、人間又は獸類の突然の襲擊に備へたり。

此く爲し了はりて後に、我は內よりは二三枚の板と、外よりは一個の空樽を立てゝ天幕の入口を閉塞ぎ、寢床を地上にひろげ、頭の邊に拳銃二挺を置き、身邊に沿ふて銃を置き、かくて我は初めて寢に就きけるが、前夜には一睡もせず、今日は終日物品を船より運搬び、又これを海岸に揚ぐる爲め、甚しく勞働しければ、痛く疲勞したる爲めか、夜中いと平穩に睡眠したり。

斯くて、我所有と爲りたる諸物品は、頗る多大にして、思ふに此程のものを一人の爲めに備へたることは、嘗て其例なからんも、船が斯る位置に在る間は、何なりとも、船より取り得べきものは、取るこそ當然なれと思ひければ、我は未だ滿足せず、毎日退潮の時に、船に到り、何物をか持來りたり。されど、第三回目には、成るべく多數の綱具並に種種の紐索の類、其他修繕用に備へたる帆布一束、濕れる火藥の樽を持歸りたり。要するに、帆は始終悉皆持來りげるが、こは帆としては最早用ゐんとする道なければ、之を細に切斷し、布として用ゐんと思ひたり。

然れども、此く五六回も船に赴き、我心を慰くべき程のものは、最早船より得るの望なしと思ひける後、實に總ての最後に至り、麵麭の大樽一個、酒精の小樽三個、精製せる砂糖一函、良好の麥粉一樽を見出したり、海水に浸はれしものゝ外には、更に食料品を獲べき望、全くなかりしに、此獲物ありけるは、實に意外の事にて、前にも增りて一層我を悅ばせければ、我は速に麵麭の大樽を空け、帆布を幾片にも切斷り、これを以て、麵麭を一包づゝ包み、此くて此等は皆數回に分ち、無事に海岸へぞ運搬ける。

翌日も、又船に行きけるが、今は早、我力を以て搶ふべきもの、並に我手を以て取扱ふべきものは、既に船より奪掠し盡しければ、始めて錨纜に手を着け、大なるはこれを短く切斷して、動し得べき程と爲し、錨纜二筋と、小錨纜一筋、其他取り得べき鐵具類悉皆を取り、且つ斜帆桁尾帆（ライズンヤード）桁、其他我の力に適したる各種のものを切斷して、一個の大筏を作り、之に重き物を悉く積載せて歸り來りたり。然るに我福運も、最早我を見捨んとしたるにや、筏の作成方拙劣が上に、荷物を積み過ぎければ、從來常に物品を陸揚げしける、かの入江に入りし後、常には似げなく巧に操縱すると叶はざりしかば、筏忽ち轉覆り、我は荷物もろとも水中に墜落たり。最早海岸に近かりしかば、我自身は指たる傷害を受けざりしかども、荷物の多分、殊に大に用を爲すべしと思はれたる鐵具類を失ひたれども、切斷せる錨纜の大半と、鐵具類の幾分をば、干潮の後引揚げたり、但しこれが爲めには、非常の勞力を費し、自ら水中に浸ることをも辭せざりければ、我は甚く疲勞したり。此後も尙ほ毎日船に行き、成るべく物品を持歸りたり。

海岸に居りしこと已に十三日間、船に行きしこと十二回に及び、此間に於て、我は兩手を以て運び得られたる、諸般の物品は、皆これを持來りたれど、若し平穩の天氣尙續きたらんには、船體全部を切々に分解し、漸次に之を持來りしならんに、十二日目に、船に行んと準備中、風漸く

吹き始めたり。されど、海水低くなるを待て、我は又々船に行きしが、既に是までに、十分船室を捜索たれば、此上何物もあるべしとは思はざりしに、又抽斗附の棚を見出し、其抽斗の一に、剃刀二三挺、大鋏一挺、其他良き庖丁と肉叉あり、其の抽斗に、貨幣凡そ三十六磅即ち歐洲貨幣ブラジル貨幣、金銀若干ありたり。

此貨幣を見て、我は獨り笑を催ほし、聲高に、

『嗚呼この不中用物、汝は何の用に立つのか、汝は我に取りては何にも價値がない、――いや、此地を去らなければ、毫も價値がない、此庖丁の一本と此貨幣の一山と同價値だ、我には汝を用ひ樣がない、未來永劫そこに居れ、救助ても價値のない動物のやうに、海の底に行つてしまへ』

と言ひたり。然るに再び思ひ直して、我は此貨幣を取り上げ、之を皆帆布の一片に包み、更に一個の筏を造くることを考へ始め、その用意を爲しける中に、空漸くかき曇り、風も起り初め、未だ二十五分も經ざるに、海岸の方より、風吹來りければ、海岸より風が吹くに、筏を作りたりとて何の用をなすべき、潮の滿ち來らぬ前に、行くこそ肝要なれ、若し否らずば、終に海岸に到ることを得ざるやも知れずと思ひたり。此くて我は自ら水中に飛入りて、泳ぎ渡りけるが、一には己が身に携帶せる物品の重が爲め、一には風勢急に增し、未だ滿潮とならぬ先に、暴風となりて波濤却々荒かりし爲め、距離は短かりけれども、困難大方ならざりけり。

さても我は、恙なく己が小天幕に歸來り、我財產は、甚安全に己の身邊に置きて、横臥しけるが、その夜は風甚烈しく吹き、朝に至りて外面を見しに、嗚呼船は最早看えずなりにけり。我は一時は少しく驚きしが、是れまで要用なる物品を、船より取出すが爲め、毫も時期を、失ひしこともなく、又些も懈怠らざりしことを回顧し、且つは假令ひ此上時間ありたりとて、持歸るべきもの、最早船中になしと思考へば、少しも遺憾なしと、自ら慰さめたり。此くの如く、船も既に形をも留めずなりければ、その破片の時々海岸に漂着する外には、我は船、若くは船より得べき物に就ては、最早何事をも考へずなりたり。又其後船の種々なる破片漂着したれども、其等の物は、我に取りては、格別の用もなかりけり。

蠻人若し現はれ出て、或は野獸若し此島に居らば、之に對して防禦せねば叶ふまじと、今は專ら此事をのみ考へ廻らしけるが、如何に之を防禦せんか、如何なる住居を造んか、地中に穴を穿ちて居んか、又は地上に天幕を張らんかと、其方法に就きて種々樣々に思案したる末、我は竟に兩樣の方法を兼用せんと決心したり。今その築造法に就きて、一段の談話を爲すも、無用の事にはあらざるべし。

第四段　土地を相して住居を經營し役々として自衛の計を立つ

我居る場處は、海に近き濕地にて、健康にも宜しからざるべく、殊にはその近邊に清水なく、住むに不便なりければ、何處にか健康に適し、且つ便利の地を見出さんものと思ひたり。

我意に適ふべしと思へる位地に關て、自ら種々の要件を考へけるに、その第一は今記載したる健康と清水との事、第二は日光を蔽ひ遮る事、第三は人類にもあれ、獸類にもあれ、すべて貪欲なる動物をば、防禦するに足る事、第四には神の冥助により、若し船舶の來りたらんとき、我れの未だ斷念じ得ざる、救助の機會を見逃さゞらんために、遠く海上を望見せらるゝ事、先づこれ等なりけり。

此要件に適へる場處を搜索たるに、一高丘の側に、小さき平地あり、此平地の背後は、恰も一の屋側の如く峻峻して高く聳へ、上よりは何物も下來ること叶はざるべく、その岩石の側面に少しく磨滅たる窪處あり、宛然洞門に似たれども、實は全く洞穴の如き穿ちたるものにはあらざりき。此窪處の直下に綠草の生茂れる平地あり、我はこゝに天幕を建んと決心したり。此平地は幅凡そ五十間、長さ凡そその二倍にして、さながら門前の草地の如く、その盡る處は、海岸の低地に至るまで、種々樣々の形態を成して、漸次に下れり、又此平地は、高丘より北北西の方向に位するが故に、太陽が此地方の日沒に近き、西南に來るまでは、毎日炎熱を受くることなし。

天幕を建つる前に、かの高丘の側面なる、窪處の前面に一個の半圓線、――即ち岩より其半徑の長さ、凡そ五間にして、半圓線の一端より一端まで、直徑凡そ十間の半圓線を畫き、此半圓線の內に、堅固なる杭を二列に並らべ、太き方を地より五呎五吋上に出だし、其先きを尖らせ、礎柱の如く確と之を地中に打込み、その二列の杭の間の距離は凡そ六吋となせり。

次には、遲きに船中にて切斷せし、錨纜の切片を持來り、二列の杭の間に、上へ上へと頂上まで、之を半圓線に積み堆ね、其內部に他の杭を凡そ二呎五吋の高さに建つること、柱に控杭を添へたる如くにし、之を杭にもたせ掛けたれば、此墻は甚強固して、人間も野獸も、入ることも、又は越ゆることも叶はざりき。此事業は夥多の時間と勞力とを要しけるが、殊に林の中にて杭を切り、それをその場處に持來り、又それを地中に打込む爲めに、大に我を勞したり。

此場處の入口は扉を設けず、短き梯子に由りて、上を乘越える樣に造り、その梯子は、我の內に在る時は、之を內に入れ置きたり、されば我は、案の如く外界よりは、全く墻にて防禦せられたれば、夜も安全に眠りたり、但し當時は尙危險なりと感じけるも、事實敵なかりしかば、此る用心の全く無用なりしことは、後日に至りて知られたり。

此墻、即ち砦の内に、上に陳べたる食料、武具、其他の貯藏品、即ち我財産悉皆を非常の勞力にて搬入れたり。又毎年或る季節には、降雨甚多ければ、これに備へんものと、大なる天幕を設け、之を二重に造りたり、即ち小天幕を内にし、大天幕をその上に蔽ひ、且つ我が嘗て帆布と共に保存しおきたる、大なる脂紙を以て、其最上部に被らせたり。さてまた、我は此時まで、嘗て海岸に持ち來りし、寢臺の上に寢けるが、暫らくこれを廢め、釣床に寢ることに改めたり、此釣床は、船の運轉手が用ゐたるものにて、その製作實に精巧なりき。

此天幕の内に、種々の食料品其他濕氣の爲めに傷はるべき、諸般の物品を運入れ、此くして我所有物は、皆圍ひこみたれば、これまで開放ちおきたる入口は、これを塞ぎ、前に云へるが如く、短き梯子を便りに出入したり。

此く爲し了りければ、それより天幕の背後なる巖丘の側面を穿ち始め、その堀取れる土石は、天幕の下より之を外に搬び降ろし、これを墻の内に、凡そ一呎五吋の幅に堆み積げ、恰も平堤の如くに築きつゝ、左右して、一個の洞穴を作りけるが、こは恰も我家の地窖の如き用を爲しけり。

此等のものゝ、皆完備せるまでには、幾多の勞苦と日子とを費しければ、今姑らく後に戻りて、其他の事柄を說くべし。さても天幕を建て且つ洞穴を作らんとの計畫を立てたりし後、一日密雲暗憺として、大雨盆を覆へし、電光閃めき、電鳴耳を劈ん計りなりしことありけるが、我は電光にも驚きけれど、電光の如くに、忽ち我心に感じたるは、火藥の事にして、覺えずも「あゝ火藥は」と叫びたり。我が一身を防禦するのみならず、我に食物を供給するは、全く火藥の力に依れりと、豫て思ひ居りたる、その火藥が、一聲の霹靂と共に、悉く爆發せんかと思ひし時は、慄然して、魂消るばかりに感じたり。嗚呼火藥、若し火を發したらんには、我も瞬く暇に共々滅亡せんことは、殊更云ふまでもなけれど、我は自己の危難に就ては、此程には氣遣はざりけり。

此一事に痛く感動しけるものから、雷雨の收まりし後に、當時既に從事し居りける、我が防禦工事は、皆暫らくこれを差措き、まづ火藥を分割し、之を少づゝ包皮に入れ、例令如何なる事の起らんとも、一時に火を發することなきやうにし、又火藥の一部より他に火を傳ふるの憂なきやう、互に之を分ち置んとて、一意袋と函との製造に從事したり。此仕事は凡そ二週間にて終はりしが、今思へば、總計百四十封度計りの火藥をば、百包以上にも分割したり。此くて又既に濕り居たる火藥樽は危險の恐れなきまゝ、之を新に造りたる洞穴、即ち我思ひつきより、臺所とも稱したる洞穴に納め、その他は濕氣を避くる爲めに、巖石の此處彼處にある、孔穴の内に入れ、その所在には、一々注意して記號を附し置きたり。

此事を爲せしその傍、一つには何なりとも食ふべきものを求め、且つは自己の慰みにもなさん爲め、二つには成るべく此島の產物を知らんが爲めに、毎日少くも一度は、銃を携へて外出した

り。初めて外出せし時、程なく此島に山羊の居ることを發見し、大に滿足しけるが、それと共に亦我を失望せしめたるは、此等の山羊が、その性甚臆病にして狡猾なるのみならず、其足甚迅速にして、之に近づくこと最も困難なりき、然れど我は之が爲めに氣を撓かれず、早晩一頭を射止むることもあらんかと、心竊に疑はざりしに、果して程なく一頭を仕止めたり。我は先づ山羊の常々往來する場處を少しく探おきて、後左の如き方法にて彼等を待伏したり。

即ち山羊の巖上に居るとき、我れ谷に居れば、輙ち我を見て周章狼狽して遁去りけるに、彼等が谷にて草を食ふとき、我巖上に居るも、彼等は毫しも我に心付かざりき、依りて推斷しけるやう、山羊の眼は、その位置により、その視線下方に向ふが故、己れよりも上方にある物は、容易に彼等の眼に入らざるならんとて、その後は、我は常に先づ巖を攀ぢて、彼等よりも高處に登り、此くて十分に狙を着けたること屢々なりけり。

此動物の中に打放てる、第一發をもて、一匹の牝山羊を射とめけるが、此牝山羊には乳呑の仔山羊あり、親山羊の斃るゝや、我の行きてこれを取上げしとさまでも、仔山羊はなほ傍に居て動かざりしのみか、我が親山羊を肩に掛けて持來りしに、仔山羊は我に尾て、小舍まで來りければ、我は衷心惻隱の情に堪へず、親山羊の骸を下に置き仔山羊を兩手に抱き取り、之を育て馴さんと、墻壁を越して內に入れしに、食物を食はざりければ、後遂に餘義なく之をも殺して、自ら食ひたり此二疋の肉は、節約して食ひければ、暫らくは食料の足しと爲り、貯藏せる食物、殊に麵包を節約したり。

さる程に我住居も既に定まりたれば、火を作り、薪を焚すべき竈の用意大に必要なりけるが、其が爲めに我は何事を爲しゝか、又洞穴を如何にして擴げしか、如何なる便利の物を設けしか、これ等は、後段に詳說すべければ、姑らく之を措き、此處に少しく我が一身の事と、人も嘸かしと想像すべき、生活に關する我種々の思想とを、左に陳述すべし。

さても、我は熟己の境遇を顧み、若し斯る烈しき暴風の爲めに、我等の志ざしたる航路の外に迫はるゝこともなく、又人の通常往來する商路の數百里以外に驅らるゝことなかりしならば、此く此孤島に捨てらるゝこともなかりしならんに、此る無人の境に淋しく此生涯を終らんことを、これ恐らく天命の在る所ならめと、倩思廻らせば、涙は潸然として我が頰に注ぎけるが、又時々思ひけるやう、抑も何故なれば、神は斯くまでに其造れる物を零落せしめ、斯くまでに不幸に陷れ、斯くまでに見放し、斯くまでに壓抑し給ふか、此くては、假令ひ生存居るとも、我は殆んど感謝の念を發するに由なしと、獨り竊に怨嗟することもありたり。

此の如く、我は時々自己の不幸を歎き、甚しきは神を恨みしこともありたれど、その都度に、何かは知らねども、勃然として我が胸中に躍るものありて、嚴と此等の思考を遮り、我を非難す

るが如く覺えたり、殊に一日手に銃を提げ、海濱を歩きつゝ、己が現在の狀態を顧りみ、いたく哀を催ほしける折から、我が心裡の道理は、これを排斥け、我を難詰りて云へるやう、

『成る程汝は今寂寥き悲境に居るには相違ないが、ちと考へて見よ、汝の同船者は今何處に居るか、汝は十一人て端艇に乘込んだのてはなかつたか、十人は今何處に居るか、何故彼等は救はれなかつたか、汝も共に死んだか、何故汝は獨り免れたのか、彼れと此れと何方がよろしいと思ふか』

と、此く道理に責められたる我は、眼を擧げて海上を見やり、轉感慨に堪へざりき。實にや、總じて不幸の中にも幸あり、不幸に伴へる一層の不幸ありけり、と獨り自ら首肯きたり。

復た思ひけるやう、我は幸にして必要物に事を缺かざるのみか、其準備も十分にあり、嗚呼該船が最初難破せし處より浮出て、海岸に近く漂着したればこそ、此等の物品をば、船より取出すべき、餘暇もありたるなれ、若し此る萬一の僥倖なかりしならば、今の我が境遇は如何ならん、若し最初海岸に上りたる狀態のまゝ、生活上必要の物品もなく、或は之を供給すべき、何等の手段もなかりしならば、今の我境遇は如何ならんか、と纏々思廻らし、終に獨り大聲を揚げて叫びけるやう、

『若も一挺の銃もなく、彈藥もなく、また物品を造るべき器具もなく、或は衣服、寢具、天幕其他何等の陰蔽物もなかつたなら、我身はどうなつたてあらうか』

然るに、今此等の物品は數多あり且つ、假令ひ彈藥盡きたりとも、または一挺の銃なくとも、生活するに足るべき食料の準備あり、生涯不自由なく、饒に生存する程の見込は已に立ちたり、嗚呼これ抑も何故なるか、これ或は火藥の盡きたらん後のみか、若し健康の衰へ、體力の傾きたらん後とても、不時の災害と未來の時運とに對し、我れが初めより、如何に備へべきかと、熟考べたりしに由るとは云ふものゝ、これ亦畢竟するに神の冥助に依ること、特に言ふまでもなしと、獨り竊に感謝したり。

さても、我は今より、嘗て世界にその例なかりし、寂寞き生活の光景に就き、悲慘なる談話をなさんとするに方、先づ其發端より順序を追うて陳述すべし。上に言へる如く、我が始めて此怖ろしき島に足を置きたる日は、我が計算にては、實に九月三十日にて、時は正に秋分に位し、太陽は殆んと我が頭上にありたり、我が觀測に據れば、此地は赤道の北九度二十二分に在ればなり。

凡そ十日、或は十二日程も、此所に在りて後、我は思ひけるやう、書籍もなく、筆墨もなければ、時日の計算を誤り、終には日曜日と、勞働日との區別をも忘るゝに至らんと、乃ち一本の大柱に、小刀を以て大字を彫刻し、之を大なる十字形に造りて、我が初めて上陸せし所の海岸に建てたり、彫刻せる文は「我は一千六百五十九年九月三十日此海岸に到着せり」といふなり。而し

て此方柱の三面には、小刀を以て、毎日一の刻目を彫り、毎七日の刻目は、他の刻目よりも三倍長くして、月の第一日の刻目は、更に其の二倍と爲し、此くして我暦、即ち週、月、年の計算を記したり。

次に語るべき事柄は、前にも談したる如く、數回船に行きて、持來りたる數多き品物の中には、その價格は貴重からねど、自己に取りては、同じく有用のものありたり、前には省きて掲けざりしが、其中特に重要なりしは、筆紙墨と船長、運轉手、砲手並に大工の荷包や、三、四基の羅針盤、算數器、日時計、望遠鏡、海圖、航海書類にして、其他に現に入用なきも、他日要することもやあらんと、一括に束ね置きたる物、即ち嘗て英國より荷物に入れて送來りしを、今回の航海に、我荷物に入れ置きたる、三冊の美麗なる聖書と、數冊の葡萄牙語の書籍とにして、此書籍の中には、二三冊の天主教の祈禱書と、他の書數冊もありしが、此等をば注意して保存し置きたり。

又船中に一疋の狗と、二疋の猫ありしとを忘るべからず、之に關する面白き由來談ばは、後段に於て多少述ぶることあらんが、兎に角猫は二匹ともに連來りたり、犬は我が最初の荷物を提へて、海岸に上りたる翌日、自ら船より躍り出て、我を追ひて海岸まで泳ぎ來り、その後數年の間、忠僕としてよく我に事へ、或は我が爲めに物品を啣へ來り、又は我が朋友として、我を慰めしこと少からず、されど我が彼に求めし所は、談話なりしに、彼の之を能くせざりしは、我が唯遺憾となせる所なり。又上に述べたる如く、我は筆墨紙を見出しけるが、之をば成るべく節約して用ひ、墨の續きし間は諸事をいと精細に記錄しけることは、自ら後段に於て、知らるべけれども、墨の盡きたる後は、如何に工夫するも、これを造ること能はざりしかば、終に何事をも記錄することは叶はざりしは、寔に殘念に堪へざるなり。

此れにて、思起したり、我が取集めたる品物は其數夥かりしも、尚ほ不自由を感じたることは少からず、その中墨もその一つなりしが、又土を堀り、或は之を運ぶべき、鍬、鶴嘴、並にシャベル（杓子狀の鋤）其他針、留針並に糸の如き類なり、されど麻布はなくとも指して難儀を覺えざるやう、程なく慣れたり。此く諸道具の不足せる爲め何事を爲さんとするにも、捗々しくは運ばず、我が小屋即ち周繞たる住居の如きも、悉く落成せしまてには、殆ど全一ヶ年を費したり。かの杭の如きは我の辛うじて持運びたる程、重かりしが、これを林中にて切倒し、木造りし、更に遙々我住居に運ぶ爲に、長き月日を費したり、時折はそれ等の柱一本を截りて持來るに二日を費し、之を地中に打込む爲めに、又一日かゝりたることもありたり、之を打込む爲めに、始めは重き木片を用ゐけるが、終に鐵鎚あることを想起し、これを見出しゝかども、尚この杭杙の打込みは甚苦勞多き仕事なりき。然れども、當時は爲さゞるべからざる仕事ありて、之を爲すべき時間も十分ありければ、假令ひその仕事を爲すに勞苦多ければとて、何とて云爲いふの必要ある

べき、思ふに少くも我が豫定したる程の仕事を爲し了りなば、其後は單に食物を求めん爲め、毎日多少島巡ぐりを行ふ外には、何の爲すべき事もなかりければなり。

是に於て我は漸く、自己の現狀と、その此に至れる事情とを、愼重に考察し、遂に筆を執つて、一身の景況を記載したり、これ固より、我が後を繼くべき相續人あるべしとも思はれざれば、我が死後に至りて、此島に來らん者に、選さんとての業にもあらず、畢竟我心の、朝夕齷齪として、常に煩悶するを救はんが爲めなりしなり、又この頃、我は物の道理を辨へて、失望落膽の情を歷へんと欲せしかば、一つには戒るべく我と我心を慰めたり、又二つには我境遇と一層悲慘なる境遇とを區別するの便りともなれかしと思ひ、幸福と不幸とを對照し、恰も收支の貸借表の如く、我が被りたる難艱に對し、我が受けたる慰安をば、極めて公平に記載したり、即ち左の如し

不幸

我は恐るべき無人島に捨られ、復歸の望少しもなし。

我は不幸のものとならんため、撰び出されて世間より此くは隔離せられたり。

幸福

然れども、我は尙生存らへ、我船の朋輩の如く溺死せざりき。

然れども、我は亦死を免れしめんとて、他の乘組人等の中より撰び出されたり、然らば不思議に我を救ひたる神は、亦此狀態より我を救出すの力あり。

然れども、我は食物なくして、此荒涼たる場所にて、飢渴のため死なんとしても居らず。

然れども、我は衣服を持ねど、又それを被るに堪へざる炎熱の地に居るなり。

然れども、亞弗利加の海岸にて見たる如き我を害すべき野獸なき一島に棄てられたり、若し、亞弗利加にて破船したらば如何。

然れども、神が不思議にも、海岸に十分近く、かの破船を送り給ひたればこそ、我需要を充し、又は我が生涯の間も、自給するを得べき程、夥多の必要品を、取出すことを得たるなれ。

我は人類と隔離せられ、寂寞の境にあり、人間社會より追放せられたる者なり。

我は身を掩ふべき衣服もなし。

我は人若くは獸の侵害を禦ぐべき防備も手術もなし。

我は共に語るべき人もなく又我を救ふべき人もなし。

大體より觀れば、此世の中に此く不幸なる境遇またとあるまじきこと、更に疑なけれども、そ

の中にも無くて幸なりし者と、有りて幸なりし者との差別こそあれ、是に對して亦感謝すべきものなきにあらざりき、されば此世の中にて最も悲慘なる境涯を實驗して得たる、此禍福の對照表は、斯る境涯の中にも、常に自ら慰めて、禍福計算の貸方に掲くべきものありさといふ、一種の教命ともなされんことこそ、是れ我が望む所なりけれ。

當時我は、少しく己が境遇を考量せんとの、感想を起しければ、これまで如く、船舶や來らんかと遙に冲を見渡すことなどは、斷然これを思止り、自己の生活方を改良し、成るべく慰安の道を求んものと、專ら一身をこゝに委ねたり。

我住居は、岩丘の側面の下に張られたる天幕にて、その周圍は杭杙と錨纜とを以て造れる墻の之を圍めるとは、既に述べたるが如くなれど、已にしてその外側に、更に芝土を以て、厚さ凡そ二呎程なる、一種の土堤を築きたれば、今は寧ろ之を稱して、一の砦といふも可からん、此くて又暫らくして（一年半なりと思ふ）それより桷を出し、これを巖にもたせ掛け、木の枝其他之に類するものにて、其上を葺き、以て或る季節に最も烈しき霖雨の患にぞ備へける。

我が物品は總て、此家の内と、其背後に堀穿ちたる洞穴の内に搬び入れたることは、既にこれを語りたり。然れども、初めは物品の排置方、少しも秩序なく、亂雜に積み堆ねたれば、我が居處までも奪はれ、身を動かすべき餘地もなき有樣なりければ、我は更に洞穴を擴げんものと、一段深く土を堀穿ちけるに、その土質は軟さ砂岩にして、工事いと容易なりけり。又獸類の侵害も大抵あるまじと、已に思ひ居ければ、岩を更に右方に穿ちて、横道を設け、それより又右に折れて、外面まで全く貫通したれば、こゝに我砦の、外面に出づべき一の門戸は開かれたり。此門戸は天幕と洞穴とに到るべき裏道なれば、之によりて新に出入口を得たるのみならず、又物品を納るゝ場處ともなりたり。

是に於て、日常最も必要なりと思ひたる家具の中、殊に椅子卓子の如きものの製造に從事したり、若し此等のものなければ、我が此世にて現在有する些少の快樂すら、これを享くること叶はざりければなり、試に今一例を掲んか、書くにも、食ふにも、又は其他種々の事を爲すにも、卓子なければ、心地好く何事をも爲すこと能はざればなり。

故に我は、これ等の工事に取掛りたれども、茲に一言注意すべきことあり、曰く、凡そ道理は算數の根本なれば、道理を以て百事を規正し、以て事物を最も正當に裁斷するならば、何人たりとも、頓に技藝の師たることを得ざるにあらず。我の如きは生來未だ嘗て一つの道具をも手にしたることなかりしかども、勞力と專心と工夫と此三つのものを以て事に當るときは、何物なりとも、これを製作と敢て難しとはせざるなり、殊に相應なる道具の備へある場合に於てをや。然るに我は格別の道具を用ゐずして、夥多の物品を製作りたり、又或る物の如きは、鋸と手鉞との外に

は、一も道具を用ゐずして、これを造りけるが、その製作方の一種異樣にして、非常に勞力を費したるとは、恐らくは前にその例なかるべし。例へば、我もし一枚の薄板を要せしときは、一本の樹木を切倒し、切口を以てそれを我が前に立て、次に斧を以てその兩面を削りて之を平にし、遂に之を厚板に仕上げ、而して後に鋸を以て其を滑に削り上るの外、他に方法はなかりき。此方法によれば、一本の樹木を以て、僅に一枚の薄板を作るに過ぎざること勿論にて、而も板一枚を造くるに要したる時間と勞力との、非常に夥多なりしと例ふるにものなかりき、我の如く時間又は勞力を少しも惜まずして、これを種々樣々に使用したるものと雖も、殆んど自己の及ぶべからざる程の忍耐力を以て、之に當るに非ざれば、決して耐ふること叶はざりしなり。

さて前に陳べたる如く、我は先づ第一に、卓子と椅子、各一脚を製作りけるが、こは嘗て船より、筏に載せて持來りし、數枚の短き板を以て造りたり。然れども、其後、前項に說けるが如き方法にて、數枚の板を造りたれば、これを以て大なる棚を設けたり、此棚はその幅一呎五吋にして、いづれも洞穴の一方に沿ひ、層々段を爲さしめ、其上に諸道具、釘、その外鐵器類をならべて、大要諸物の置場を定め、容易に見出すことを得るやうなしたり。又岩の壁に釘數個を打込み、鐵砲其他掛けらるべきものは、皆之を掛列ねたり、されば一見すれば、此洞穴は恰も諸道具の陳列場なるが如くなりき。此くて我の諸物品が秩序よく排置られたると、殊に我必要品の、此くも夥多しさことゝを見て、自ら大に愉快を覺えたると共に、また諸品を容易に取出し得るの便利を得たり。

さて我が、毎日仕事の日記を錄し始めたるも、亦此頃の事なり、勿論此島に上陸したるその初は、餘りに急忙くして到底日記を記するの暇なかりき、當初は唯勞働の爲めに急忙かりしのみならず、我が心も前後取り亂し居たれば、若し是れより以前に、日記を錄したらんには、我が日記は只興味もなき事柄を以て滿されたるならん、例へば、左の如くに認めたるなるべし、「九月三十日我れは溺死を免れて、海岸に上り、救助に就きて、神に感謝もせずして、先づ呑みたる多量の鹽水を吐き、少しく元氣を恢復したれば、腕を扼し頭を打ち、或は不幸を歎きつゝ、我は傷はれたり、害せられたりと叫んで、海岸を走け廻り、遂に疲れはて、氣絕して、休息んと地上に倒れたれども、獸に食はれんことを恐れて、眠り得ざりき」といふが如くなりしならん。

さてもその後數日を經けるが、最早船に行きて、成るべく多く物品を取出したる後なるに、尙來る船もやあらんかと、これを望見するの情に得堪へて、我は小さき山の頂に登りて、海上を見渡しけるに、氣のせいにや遙かの冲合に一片の帆影を見たる心地せられ、一時はこれを望んで自ら欣び、眼の瞎らむまで、確と見詰めて居けるが、遂に全くその影を見失ひければ、揺かと坐して小供の如く泣出したり、此く無益の愁痴に煩悶し、爲めに己の不幸をばいや增したり。

然れども、此る悲哀の情も稍薄らぎ行き、我家財住居も漸く整頓し、卓子も椅子も已に出來上り、身の邊も總て奇麗になりければ、さては我は日記を錄し始めたり、今茲に、その續きたる限り、日記の寫を掲ぐべし（前に話したる事柄と重復すれども）、されど後には墨盡きて終にそを廢止したるこそ是非なけれ。

日記

紀元一千六百五十九年九月三十日。憐れなる薄命のロビンソン、クルソウと名乘る我は、此冲合にて、怖るべき暴風に際ひて、破船の難に罹り、我が名けて「失望島」といへる、此寂寞たる不祥の島に漂着したり、他の乘船者は皆溺死し、自身も殆んど死せんばかりなりき。

その日の殘は、我が眼前陷れる悲慘の境遇を顧み、自ら悲歎の中に暮らしけり、即ち我は食物も、家も、衣服も、武器も、將また飛び行くべき場處もなく、又救はるべき望も絶え、我が前には唯死の外には何物もなく、たとひ野獸に食れ、或は蠻人に屠られずとも、食物の缺乏より餓死するならんなどゝ、彼是れ狀き思ふ中、やがて夜も近づきければ、野獸を恐れ、一樹に登りて睡りけるに、夜中雨降しきりけれど、我は熟睡したり。

十月一日。朝起出てゝ、船の高潮の爲めに、浮きあがり居たると、復次て島の方に餘程近き海岸に打上げられたるとを見て、大に慰さけるが、坐に一方を思へば（船の直立し、太く破損せざるにより、風だに和ぎなば、船に行きて、我が露命を維ぐに、缺くべからざる食料など、取出し得らるゝならんと）幾分か心嬉しく覺えたれど、また一方を顧みれば、我が朋輩の死亡を悼むの情は、再び胸に迫り來り、嗟呼我等皆船に留りしならば、船を救ひ得たるならん、さなくもせめては、彼等もさばかり悉くは溺死せざりしならん、人々にして助りしならば、我等は恐らく、彼船の破材を以て、一艘の端艇を造り、何地にか赴くとも得らるるならん、など種々の想像を畫き、かにかくと獨り煩悶して、此日は大概費しけるが、終に船の幾んと乾燥きたるを見て、我は成るべく近づくまで沙上を歩み、かくて船まで泳行きたり。此日は風は全くなかりしも、雨は蕭々として降り續きけり。

十月一日より同二十四日まで。此二十餘日の間は、我が力に適へる諸品を、船より取出し、これを滿潮の度毎に筏に載せて、海岸に持來らんため、數回企てたる航行の爲めに費したり。その間時折快晴のことありしも、降雨のこと多かりき、此頃は霖雨の季節と見えたり。

十月廿四日。筏轉覆したれば、積荷も皆水中に落入りしが、水淺く且つ品物も多くは重かりしかば、その多分は退潮の後に引上げたり。

十月廿五日。終夜終日雨降り、疾風も幾分かこれに伴ひ、風勢前よりも稍強かりければ、船は

粉碎と爲り、僅に見えけるは、その破片のみにて、それも唯干潮の時のみなりき。此日は豫て船より取上げたる物品を、雨の爲に損傷せざるやう、蔽はんとて費やしたり。

十月二十六日。夜中に、野獸、又は人の攻撃を防がんと、大に苦心し居ければ、住居とすべき場所を見出さん爲、殆んど終日海岸を歩き廻ぐり、日没頃に至ると一つの巖丘の下に於て、適當なる場處を選定し、半圓形を劃して、我陣營を設けんとし、その周圍に二重の墻壁を築き、内には錨綱を張り、外には芝土を堆ぬて、之を固めんと思ひ定めたり。

二十六日より三十日までは、我の諸物品を我新住所に運搬せんとて、甚しく勞働せしが、その間非常に強雨の降りたることありたり。

三十一日の朝は、食物を求め、且つは土地の模樣を見んため、銃を提げて外出しけるが、一匹の牝山羊を射殺しゝに、仔山羊我に從て家に來りぬ、然るに食物を食はざりし故、後に之をも殺したり。

十一月一日。巖丘の下に天幕を建て、その夜始めて其所に寢ねたり、但し成るべくそれを擴げ、又吊床を掛くべき杙をも用意したり。

十一月二日。我の所有せる櫃、板、並に筏に用ゐたる木片を集め、それ等を以て、豫て我が砦と定め置きたる、場處より少しく内輪に我を繞りて墻を築きたり。

十一月三日。銃を提て外出し、家鴨に似たる二羽の鳥を殺しけるに、いと好き食料とは爲れり、午後は卓子の製作に從事したり。

十一月四日。今朝は日課を定め、仕事の時間、銃を提て外出する時間、睡眠の時間、保養の時間を區別せんと欲し、即ち(一)毎朝二三時間は、若し雨降らざれば、銃を提て外出すること、(二)それより凡そ十一時まで細工に從事すること(三)次に食事をなすこと(四)十二時より二時までは、氣候極めて炎熱なれば、睡眠の爲め横臥すること(五)夕景再び細工事をなすこと、此くの如くに日課を定めたり。此日と翌日の細工時間とは、全く一脚の卓子を造るに費したり、こは我尚工事に甚拙劣なりしが故なるも、歳月と必要との爲めに、其後程なく、完全なる職工とはなれり、獨り我のみならず、歳月と必要とに因り、何人も此くなるべきは、我の疑はざる所なり。

十一月五日。此日は、銃を提げ犬を伴うて外出し、一頭の野猫を殺しけるが、其皮は可なり柔なりしも、肉は何の用にも立ざりき。如何なる動物を殺すも、我はその皮をば剝ぎて、之を保存したり。歸路は海岸に沿うて來りしに、我が知らざる海鳥の數種を見たり、茲に驚愕き且つ殆んど恐怖たるは、二三頭の海豹を見たるときなり、我はその何物なるかを善く知らで、凝視め居けるに、彼等は海中に入りて逃れたり。

十一月六日。朝の歩行の後再び卓子の製作に取掛り、我が意には叶はざりしも、先づそを仕上

げゝるが、その後間もなく修繕の必要を感じたり。

十一月七日。最早好天氣續き始めたり。七日、八日、九日、十日、十二日の一部（十一日は我が計算にては、日曜日なりき）は、全く椅子の製作に打掛り、幾多の苦心を以て、稍怜好の形に仕上げしが、決して我が意には滿たざりき、製作中も數回取解して改造したり。

註記―、我は久しからずして、日曜日を守ることを怠りたり、其故は該柱に日曜日の印を附することを廢めたるため、何を何とも別き難くなりたればなり。

十一月十三日。此日は雨降り、非常に涼しく感じ、又地熱も去りたれど、恐ろしき雷電伴ひ起りければ、火藥の事を案じ、痛く恐怖たり。さればそれの止むや否や、我が火藥を成るべく多數の包に分ちて、危險を避んと決心したり。

十一月十四日、十五日、十六日。此三日間は、火藥凡そ一封度若くは多くも二封度を入るべき小さき方形の函數多を作るために費したり、此くてそれに火藥を納め、成るべく確實にて且つ互に隔離せる場所に之を置きたり。此三日間の一日大なる鳥一羽を殺したり、その肉食料に適せしが、その名は知らざりき。

十一月十七日。此日は餘地を設けて、便利を計らんがため、天幕の後ろの巨石を堀り始めたり。

註記―、此工事の爲めに最も缺乏を感じたるは、二種の道具なり、即ち鶴嘴、シアベル（鋤の類）搬車或は籠にして、我はこれが爲め、工事を一時控へ、先づ如何にして此缺を補はんかと工夫し、遂に或る道具を造り始めたり。

鶴嘴の代には、鐵鎚（烏嘴形の鈎の附きたるもの）を用ゐけるが、重けれども最も適當なりき、次には「シアベル」にして、これは是非必要にして、これなければ能く何事をも爲すべからざりしが、代用すべきものなかりき。

十一月十八日。翌日林の中を捜しゝに、その木質は極めて堅固なるため、ブラジル國に於て、土人が鐵木と稱する木質の一樹、或は之に似たる一樹を見出したり、殆んど我が鉞を損はんばかり、大に勞苦して、此木を一本切りしが、非常に重かりければ、辛うじて家に持來りたり。此木の極めて堅固なると、これを用ゆる外、他に方法なきがゆゑ、長き時間を費やし、少しづゝ追々「シャベル」即ち鋤の形に造りて、一つの道具を成りたり、其柄は恰も英國のものゝ如く造りしも、只板の部分が、其端に鐵を附着せざるため、長く用をなさゞるべきも、我が時時使用ふには十分なりき、思ふに、此の如きの形にして、かばかり時を費て造れる「シアベル」は、決して他にはなかるべし。

我は籠或は搬車なければ、尙ほ不足を感じたり。さて籠は柳枝細工に用ゐるべきほど屈折自在なる小枝條なさため、或は未だ之を發見せざるため、到底之を製作るの見込なかりき、搬車は、車

輪の外は皆作り得べしと思はれたれど、車輪の作り方に就ては、何分にも考案立たず、又如何に手を下すべきかをも知らざりき、其外車軸を入るべき鐵製の軸耳を造るべき方法なかりければ、之をも斷念したり、故に洞穴より堀出したる土を運ぶために、煉瓦職が漆喰を搬ぶ時用ゆる函、（炭斗狀の）の如き物を造りたり。此は「シアベル」を造る程困難ならざりしが、此は「シアベル」と又搬車を作らんとて爲したる徒勞との爲めに、四日以上を費したり、尤も一日といふは、銃を提て立出る朝の歩行時間をば、除きたるものにて、此歩行を廢せしことは、稀なるのみならず、何か食料に適する物を持歸らざりしことも、亦甚稀なりき。

十一月二十三日。此等の道具を作る爲に、他の仕事は中止の姿となり居けるが、これも出來上りたれば、乃ち工事に取掛り、我が力と時間との許す限り、毎日働らき、全く十八日を費して、洞穴を擴ろげ、且つ之を深く掘りければ、諸物品を廣々と納るゝことを得るに至りたり。

註記―此工事中は我は此室、即ち洞穴をして、倉庫、臺所、食堂、穴藏として、使用するに足る程、十分に廣くなさんとしけるが、寢室には常に天幕を用ゐたり、但し降雨季には、往々降雨甚しく、身體を乾燥し置くこと叶はぬ時は、洞穴の内に寢ねたることもあり。

さて此く降雨烈しかりければ、後には長き棒を枘の形に、岩にもたせかけて、住居の上に蔽ひ渡し、其上を旗布と樹木の大葉とを以て蔽ひたり。

十二月十日。さても、洞穴の工事も既に終りたりと思ひたる時、豈に圖らんや、天井と一側面より、突然多量の土墜ち來りたり（餘りそれを擴大し過ぎたりと見ゆ）、要するに墜ちたる土多量なりければ、我が恐れたるも、亦その理由なきにはあらず、我若しその下に居りしならんには、決して墓地の穴堀人の手を煩はさゞりしが故なり。此災難の爲めに、更に數多の仕事は出來れり、乃ち落下せる土を搬び出すこと、又是れよりも一層肝要なるは、此後又々墜落せざらんやう、支柱にて天井を支ふることなりけり。

十二月十一日。故に此日はその仕事に取掛り、二本の支柱の上に、各二枚の板を交叉して載せ、之を頂上まで、眞直ぐに樹て、尚ほ更に多數の支柱の上に板を載せ、此くして凡そ一週間にて、天井を安全ならしむることを得けるが、此相並んで立られたる支柱によりて、室内を數部に分割するの便利を得たり。

十二月十七日。此日より二十日に至るまで、我は數段の棚を設け、又支柱に釘を打ちて掛けらるべきものは、これを懸けたれば、是に至りて、家内の秩序も稍整頓し始めたり。

十二月二十日。今我は諸品を洞穴の中に搬び入れ、家内を飾り始め、又數枚の板を調理臺の如く置き並べ、其上に食品を配置したり、然るに更に一個の卓子を造りしかば、板は最早殘り少なくなれり。

十二月二十四日。終夜終日降雨多く外出せざりき。

十二月二十五日。終日雨降りたり。

十二月二十六日。毫も雨降らず、地面も前よりは甚冷え、一層愉快なりき。

十二月二十七日。一頭の牝山羊を殺し、更に一頭の脚を射て之を捕へ、紐を着けて家に連れ來り、折れたる脚に木を添へて繃帶したり。

注記―、山羊の死せざる樣注意しければ、脚も次第に全治し、常の如く強健となりしが、久しく飼養たるため、終に善く馴れて、戸邊の青草を食ひ、逃げ去りもせざりき。これ我が或る馴れたる動物を飼養て、彈藥の皆盡きたる時、食物を得らるゝやうなさんと、思立ちたる始めなり。

十二月二十八日、二十九日、三十日、三十一日。大暑風全く無し、晩景に至り、食物を求めんため、外出したる外は、戸内に居り、諸品を整頓して、此日を送りたり。

一月一日。尙ほ炎熱甚しかりしが、朝夕二回銃を携へて外出し、日中は安臥したり。此夕方島の中央に方れる谷まで、遙々行きけるが、數多の山羊の居るを見たれど、極めて臆病にて容易に近づくべからず、去れど試みに犬を連れ來りて、彼等を狩らんものと思ひたり。

一月二日。故に翌日犬を連て外出し、彼を山羊に掛らしめけるに、我は誤てり、山羊は皆頭を回らして、犬に對ひければ、犬は危險なりと知りけん、山羊に近寄らざりき。

一月三日。我は尙ほ何物にか、襲はれんかとの掛念ありければ、墻即ち壁を厚く堅固にせんと決心したり。

注記―、此壁の事は前に記したれば、日記には記されたれども、此所には故らに省略して揭げず、只少くも一月三日より四月十四日に至るまで、此工事の爲めに勞役し、終に完備せしめたりと言はゞ足れり、但し此壁は岩石の一點より、他の一點までの半圓形にして、その長さ凡そ十二間を出てず、又それよりの距離凡そ四間あり、而して洞穴の入口は、その背後の中央にあり。

第五段　地震に遇うて百日の効を空うし　病にかゝりて救濟の眞義を悟る

數日數週間に亘りて、降りしきる霖雨に妨げられ、工事極めて困難なりしかども、墻の完からぬ間は、安堵の思をなしがたければ、幾んど言葉に盡せぬ辛苦困難を忍びて、この工事を果しけり、殊に墻に用ひたる材の、いたく太すぎければ、之を森より運ぶにも、又之を地に打込むにも、極めて困難なりき。

漸くにして、此墻も落成し、更にその外側に芝土の土堤を築きて、内の墻を取圍みければ、假令ひ海岸に上陸する人ありとも、こゝに人の住家あるべしとは、見えざるべしと、獨り自らうち頷きたり。かくて此くせしことの徒爾にはあらで、好くも豫めかくは爲しおきたりと、獨り打悅ぶべき非常の秋の來りしことは、後に至りて知らるべし。

雨の時間には、毎日杜の此處彼處を徘徊して、狩くらしゝが、新に得たるものも鮮なからず、殊に野鳩の一種を見出したり、此野鳩は、山鳩の樹上に巣を營むに似ずして、家鳩の如く岩窟の中に巣を造れり、我はその雛鳩二三羽を捕へ來りて、家に飼ひおかんと、色々に苦心しける效ありて、稍成長はしたれども、之に與ふべき食物なかりければ、いづれも皆飛去りたり。されども我は時々その巣を探り、雛鳩を捕へ來りて、その肉を賞味したり。

さて家事を整理するに當り、無くて叶はざりし要具の缺けたるもの尠からず、その中には、我が力にては、到底自ら造り得ぬやう思はれしもの、又は實に造るとを得ざりしもの尠からず、例へば、桶を造りて箍をかくるが如きは、全く不可能の事なり。一二の小桶を所持せしことは、前にも云へる如くなれば、我はこれに倣ひて、一個の桶を造らんと思ひ、苦心すること、數週間の久しきに及びしも、桶板と桶板とをきちんと並べて、水の漏らぬやうにすることは、結局かなはざりければ、遂に之を斷念したり。

次に困難を感じたるは、蠟燭のなかりしことなり、午後七時頃には、太陽沒して闇黑となりければ、止むことを得ず、寢に就くを常とせり。嘗て亞弗利加にて彷徨しける中、蜜蜂の蜜蠟を採つて、蠟燭を作りたることありしを思出てたれども、目下は蜜蠟を得る方便もなかりければ、如何ともすること能はざりき。されば種々考をめぐらし、之に代ふべき方法としては、山羊を屠りたる時、善へおきたる脂を、日光にて干固めたる粘土製の小皿に入れ、之に塡絮の燈心を加へ、火を點じて「ランプ」に代用したり、其光力は蠟燭には及ばざりけれど、燈火の用だけは爲したり。

かく種々の仕事に從ひける中、所要の道具を求めんとて、こゝかしこを搜しける時、圖らずも一個の小袋を見出したり、これは前にも言ひし如く、家禽の食料に充つべき穀物を容れたる袋にて、(こは今回の航海の爲めにはあらで、前回リズボンより此船の來りし時に、備へありしものならん)、袋の内に僅に殘れる穀粒は、鼠の爲めに食はれて、只穀皮と塵芥とを餘せしかば、我は此袋を他の用に充んと思ひて(電光の火藥に觸るゝを恐れて、之を處々に分ち置んとせし時なりしか、若くはその他に之を用ゐんとせしとさなりしか)、岩の下なる我城砦の側にて、袋の中より穀皮を振ひ落したることありき。

この事は、前に云へる大雨の降りし二三日前の事にて、當時我は何事にも心づかず、剩へ穀皮

を振ひ落したることさへも打忘れ居けるが、その後凡そ一箇月内外を經て、地中より綠さ草の萠え出るを認めたれば、こは定めし是まで嘗て見ざる所の植物ならんと思ひきや、更に數日を經て、十二三本許りの穗の出てたるを見れば、異種の植物にはあらで、全く我歐羅巴の大麥、いな我英國の大麥に、露異なる所なかりき。この時我の驚愕は、果して如何ばかりなりしぞ。

我は是まで、宗教を基として、物事を處理したることなきのみならず、我が腦裡には、宗教の觀念といふもの、極めて微弱なりけり、されば己れの會へる艱難、災厄なども、悉く偶然の事とは思はず、或は神の思召ならんかと、思ひながらも、是れも唯世間一般の人々が口癖に唱ふる程の意味に過ぎず、これ等の事に就て、深き神慮の存すること、即ち神は世界の萬事を掌り給ふなどゝいふ程の信念は、露ほどもなかりき、然るに今面の當り、穀物の生へ出づべからざる季候の地に、我が英國の大麥のゆくりなくも萌え出てしを見ては、いかでか驚かざるべき、是は定めし神が我不幸の境涯を憐ませ給ひ、不思議にも蒔かざる種子を萌え出てしめて、我が口を糊するの助と爲し給へるならんと、推量り始めたり。

かく思ひ廻らせば、神恩の辱きに強き心も少しく動かされて、落つる涙を堰き止めかね、神がかくまでに、我身を護り給へることの、如何に幸福なることよと思ひながら、更に岩の傍に沿ひ、此處彼處と探分るに、大麥のみならず、亞弗利加にて嘗て見し、紛ふかたなき稻の莖のちらほらと萠え出たるに、更に一段の不思議を添へたりける。

我は、神が直接に我を護り給ふがために、かゝる奇跡を示現し給ひしことと思ひ量りしのみならず、この事果して神の意ならば、米、大麥の萠え出しもの、尙ほこれに止まらざるべしと思ひて、曾て歩行せし處を隈なく歩み、山の陰岩の隅々など、殘りなく探り見たれども、絶えて田に止るものもなかりければ、こゝに始めて我が曾て雞の飼料を入れたる小袋をこゝにて打振ひたりしことを思ひ出て、不思議の念は頓に息み、これ尋常普通の事のみ、特に神の奇しき力にはあらざりけりと思ひ、かく思ふと同時に、神恩に對する感謝の念も、亦頓に減じたり。されども、袋の中の穀粒が、概ね鼠のために食はれながら、尙ほ二三十粒の、不思議にも無事に殘存せしことと並にその小袋を穀物の燒かれ、若くは損はるべき個所にて打振はずして、特に直に萠え出づべき高き岩陰の地にて、打振ひたることとこそ、神の力にして、決して人事にはあらじと思ひ料りて、厚く其不思議なる神靈の德を仰ぐべき等なるに、さはなくて、これを尋常の事に思ひ做し、淺はかにも神の力を疑ひしことこそ、淺猿しけれ。

我は萠え出たる穀物の穗をば、六月下旬の頃に刈り取りて、大切に之を保存し、再び之を蒔きて、往々は之にて麵麭をも製して、食料と爲すに足る程の量を得んことを期したれど、四年の後に至り、總に少量を分ちて、食用に充てたるのみ、これとても未だ十分に腹を肥すに足らざりけり、

その次第は追つて述ぶべきも、畢竟始めてその種子を播きし時適當の季節を誤り、之を乾燥ける季節の前に播きたる故に、毫も發芽せざりしなり、かくて初期の播種は全く無効に了りたり。

大麥の外稻の穗二三十本も、また丁寧に保存して、將來麵麭を製し、またその外の食物をも拵へんと思ひたり、かくてその後米粒を燒かずして、食物を製する方法をも會得したり。

さて是れより又日記を錄るさん。

我は墻を造るに、三四箇月の長き日子を費し、その間言ふべからざる程の艱苦を嘗め、四月十四日に至り、全く其工を了りけるが、出入の口をば開かず、梯子を架け、墻の上を乘越えて出入することとし、此邊に來るものをして、此處に人の住家ありと、氣づかざらしむるやうにしたり。

四月十六日。我は梯子を造り了りたれば、之を架けて墻を乘越え、梯子を內に引入れたり。墻の內は、我が居處としては、十分の餘地あり、少しも狹からず、又何ものといへども、先づ墻を越えざれば、內に入ること能はざるべし。

墻の工事全く竣りし、その翌日の事なりけり、是れまでの我が勤勞を一時に空うし、且つは我が生命さへも、幾んど危ふからしめたる程の大災厄に遇ひたり。そは他にあらず、一日墻の內にありて、天幕の背後なる洞穴の入口にて忙はしく仕事を爲せし折柄、不圖土塊の碎けて洞穴の上、並に小山の緣邊より、我頭上に落來り、又我が營て洞穴の中に取付けたる二本の柱も、凄じき有

樣にて裂け折れたり。我が驚愕は實に甚しかりしも、その原因を知らざりければ、こは前にも例ありし如く、洞穴の上より土塊の落こみしに過ぎざるべきも、兎に角此處に居らば、土塊に埋めらるゝ恐あれば、梯子のある處まで避けゝるも、尙小山の崩れ來て、壓つぶされんとを懸念し、直に墻を乘越ゑて外まで立ち出ぬ。此くて外に出てゝ始めて、容易ならぬ大地震なることを知りたり、そは我が踏み居る地面の、凡そ八分時毎に震動せしこと、三回に及び、その震動の烈しく、して、如何に堅牢の家屋なりとも、これにはよもや堪へ得られまじと思はれたればなり。又我が居りし所より、凡そ半哩を距つる、海濱なる岩丘の一角、烈しき震動の爲めに、轟然として崩れ落ち、その附近の海水も、烈しく震動して、その光景いと恐ろしかりき、思ふに海底の震動は、陸上よりも一層烈しかりしならん。

我は生來、未だ曾て斯る大地震に遭ひたることなく、又斯る大地震に遭ひし人の話を聽きたることもなければ、その恐ろしき有樣に氣を擊れ、さながら死人の如く、又白痴の如く、殊に地上の震動に痛く胃腑を害ひ、恰も波に搖られたる人の如くなりしが、俄に岩壁の碎落つる大音響を聞きて、夢の覺めたる心地し、更らに恐怖の念に滿され、斯くては小山の崩れ崩ちて、我が天幕其他一切の家具を、埋沒せては息むまじと、杞憂の念いや增して、再び魂消るばかりに感じたり。

第三回の震動止みし後は、最早震動すべき模樣も見えざりしかば、我は少しく勇氣を恢復した

れども、尙生埋にせらるゝ患なきにあらざりければ、墻を乘越えて內に入らんとは思はず、地上に坐して深き憂に沈み、爲すべき術も知らざりき。この時我は未だ眞に神を信ずるの心はなく、危難に遇へば神の惠を賴み、危難去れば、輙ちこれを忘るゝが如き、世間普通の信仰に過ぎざりけり。

かく地上に坐して物を思ひつゝあるうちに、天漸く曇り來りて、雨ふらんばかりの模樣となり、風さへ吹き起りて漸く强く、一時間も立たぬうちに、いとも恐ろしき颶風となり、海は逆卷く波をあげて、靑海原は見る間に一面の白泡と化し、碎くる浪は岸を嚙みて、隈なく荒れすさみ、根こぎに遇ひし大木の、此處彼處に倒るゝもの數を知らず。さても恐ろしき暴風かなと思ふうち、凡そ三時間の後に至りて、風漸くなぎ、なほ二時間餘にして、全く鎭まりたれど、今度は雨烈しく降り來れり。

この時我は、地上に坐して、只恐怖するの外、何の餘念もなかりしが、不圖心に思ひけるやう、この颶風と云ひ、大雨と云ひ、畢竟地震の結果に外ならざるべければ、この颶風と大雨のために、地震は全くその跡を收め、最早心配するに及ばず、心安く洞穴に入ることを得べしと。この一念に、萎れ果てたる元氣も、自ら恢復し來りし折柄、降りしきる雨も內に入れよと勸むるに任せて、再び墻の內に入りて、天幕の下に坐りけれど、雨は益〻强く、天幕も殆んど雨に打すゑられんとするばかりなれば、止むことを得ず、こは〻ながら、更に洞穴の內に入りけるに、墻の內に雨水の塞き止められて、打棄て置かば、洞穴の中に汎濫ずる虞あらんと思ひ、墻の下に穴を穿ちて、こゝより水を泄したり。

洞穴の內に、數時間居りけるに、地震の患も更らになかりしかば、我も稍安堵の思をなし、元氣を添ふるため、小なる物置場に到り、盡きたる後は再び得がたきを慮り、折々いと大切に節用し來りし、糖酒の少量を出して之を啜りたり。

この日は夜通し降りつゞき、翌日の半に亘りても、尙止まざりければ、外に出ることも叶はざりしかど、安堵の思いや勝りし折柄なれば、胸中自ら妙案の浮び來りて、住居の構へ方も、現在のやうにては、早晩生ながら土中に葬らるゝ外あるべからずと、この島に地震の絕えざる限りは、洞穴の住居を棄て、廣き土地に小舍を構へ、これに墻を繞らして、人畜の害を防ぎ、その內に安居することそよけれと、獨り自から心に思定めたり。

さて先づ、小山の崖の下に設けたる、天幕を他に移さゞれば、後日再び地震に遇はんとき、壓つぶさるゝこと疑ひあるべからずと思ひたれど、いづれの處に移すべきか、又如何にして移すべきかと、次の兩日、即ち四月十九日と二十日とは、唯この事のみに心を勞したり。

生きながら土中に埋めらるゝ患を思はゞ、安眠もなりがたけれど、墻をも設けて、廣き處に居

るの心配も、また生埋の患に劣らずと思ひながら、あたりを見廻はし、我住居並に諸道具のよくも整頓せる有樣、さては外より見られざれば、人畜の害を受くることも、絶えてなかるべき狀態を見ては、居を移さんと思ふ念も頓に減じたり。又家を移すことは、一朝一夕の業にあらず、されば移るべき盧舍の出來て、諸事とゝのふまでは、姑らく現在の處に居ることよけれと思ひ直し、漸く心をおし鎭めて、先づ急に柱と、錨纜とにて、前の如く墻を築き、その竣工したる上にて、天幕を其内に移すべしと、思ひ定めぬ。これは四月二十一日の事なりき。

四月二十二日。翌朝は、豫て定めたる事業に取り掛らんと思ひしが、指當り差支ふるものは、工事に必要なる道具類の備はらざることなり。大斧三挺と手斧數挺（我は印度人と貿易の爲め、手鉞數多を持來れり）とは所持し居たれども、節多き堅木を伐りしこと、屢々なりし爲めに、概ね齒こぼれ、切れ味鈍りて、物の用に立つべくもあらず、砥石はあれども、之を廻轉するによしなければ、礪ぐことも叶はざりけり。これには殆んど當惑し、さながら政治家が、國家の大問題を決し、法官が人の生死を斷ずるに當り、滿腔の思慮を搾りて、苦心慘憺たるに異ならざりしが、遂に一種の車輪を造り、之に索を添へて、足にて廻轉し、兩手ゞば自由に用ゐることを得るやうに拵へたり。

註記―、我は此種の車輪の、英國に普通に行はるゝことを、後に知りたれども、本國に在りしときは、未だ一回も見たることなく、その製作法などには、更に意を留めざりしかば、これを作ること極めて難かりしなり、況してやこの砥石は、極めて大きく、且つ重かりしかば、車輪を完成するに、滿一週間を費したり。

四月二十八日、二十九日。兩日ともに刃物を礪ぐ。砥石を回轉する器械は、甚だ具合よし。

四月三十日。麵麭の量大に減じ來りたることに氣づきければ、その量を檢べ、一日の食料を、ビスケット一塊と定めしが、痛く心細く感じたり。

五月一日。朝海岸の方を打見やりたるに、折しも干潮にて、何物とも知らねども、普通の物よりは稍大いなる物の、海岸に横はれるを認めたり、一見すれば小樽（樽の類）に似たれども、近づきて見れば、小さ樽にて、その外前日の颶風の爲めに、海岸に打上げられたる、破船の二三の破片を見出したり、更に破船の方を見やれば、船の位置、嘗てよりも水面に稍高く出てたる如く思はれたり、大樽の中に何物かあると檢め見れば、中に火藥を容れあれど、水に浸りて凝結り、堅きこと石の如くに爲り居たり、されど取敢へず之を海岸の方に押しやり、更に船を見んと、砂上をつたうて、成るべく近く進行きたり。

さても、破船に行きて見しに、船體は異樣に移動し居たり。前きに砂中に埋もれし前樓は、少くとも六呎ほど押揚げられて、片々に碎かれたり、又嘗て我が搜索を終りて去りける後、間もなく波

の爲めに船體と分離せる船尾は、今は投げ上げられて、船の傍に落ち、其の手前の處には、砂土堆きまでに積り、前きには泳がざれば、破船の手前三四丁の處へは進むこと叶はざりしに、今は退潮の時には、歩みて到り得るやうなれり。斯る意外の移動に、一時は非常に驚きたれども、是はかの地震のなせし業ならめと推量りたり、且つ地震の爲めに、船の破壞せられしこと一層甚しく、日々濤に搖られ、風に逆られて、海岸に漂着くもの、引きも切らざる程なりき。

右の如き次第なれば、住居を移さんとの念は、全く消えうせ、殊にその日は如何にして船中に入るべきかと、その入口を搜索したれども、船中は隈なく土沙に滿たされければ、船中に入ることは到底、望なしと思ひたり。されども、我は豫て何事にまれ絶望の益なきことを覺り居ければ、益〻憤勵して、船中に在る物を成るべく小片と爲し、成るべく之を取出して、他日何等かの用に充んものと思定めたり。

五月三日。先づ鋸を取出て、後半甲板の上部、又は其全部を支へたりと思へる、一本の横梁を打切り、之を切りたる後に、最も高く出たる側より、成るべく砂を除きけるが、潮水入り來りしかば、已むを得ず一時中止したり。

五月四日。この日は釣魚の遊びを試みたれども、食用とすべき魚は一尾も釣り得ざりしかば、疲れて廢んと思ふ途端に、海豚の仔一尾を釣りあげたり。我はかねて長き索を以て釣絲を製り、鈎はなかりしかども、食ふに足るだけの魚を釣りたること珍しからず、かくて釣りたる魚は、日に干して食ひたり。

五月五日。破船にて働らき、他の横梁を打切り、甲板より大なる槍板三枚を剝し、之を一緒に縛り、潮流の寄せ來る時を待ちて、海岸に送りたり。

五月六日。破船にて働らき、鐵桿數個と鐵の細工物數多を手に入れけるが、つよく勞働しけるため、痛く疲れて歸り來り、最早斷念せんと思ひたり。

五月七日。特に働くためにもあらねど、再び破船に到りしに、横梁の已に切斷せられたる爲めか、破船はその重量のために、船體の各部自ら弛みて、船艙の内部も打開けたれども、内部は殆んど海水と土砂を以て滿されたり。

五月八日、甲板の上には、既に土砂も海水もあらざれば、甲板を扭取んと、鐵挺を携へて破船に行き、二枚の板を扭取り、之を潮水に運ばせて、海岸に送りたり。鐵挺は翌日の用に充んため船中に遺し置きたり。

五月九日。破船に到り、鐵挺を以て船體の内に入り、手を幾多の小檜に觸れ、鐵挺にて解弛めたれど、之を開くこと叶はざりき。一卷の鉛板にも手を觸れ、動かし得たれども、重くして運ぶこと能はざりき。

五月十日、十一日、十二日、十三日、十四日は、毎日破船に到り、幾多の木材並に板の類、其他多量の鐵を得たり。

五月十五日。手斧二挺を提げ、かの卷ける鉛を切り取らんと思ひ、一の手斧の刃を鉛に當てがひ、他の手斧にて、之を打こまんとしたれども、鉛は一呎半ほど水に浸され居りしため、打こむこと叶はざりけり。

五月十六日。夜中風強く吹き、破船は波のために一層破壞せられしやう見たれども、食用の鳩を獲んと、森の中にて久しく狩りぐらせし中に、潮滿ち來りて、其日は船に行くことを妨げられたり。

五月十七日。二哩程遠く隔れる海岸に、破船の破片と覺しき物の、吹き寄せられてありければ、何物ならんかと、行きて見しに、船の首部（ヘッド）の破片なりしが、餘り重くして持運ぶこと叶はざりき。

五月二十四日。この日まで、毎日破船にて働らきけるが、我は力を盡して、鐵挺にて種々の物を解弛めければ、幾多の小樽と水夫用の櫃二個は、最初の滿潮の時、水面に浮び出したり、然れど生憎にも風海岸の方より吹來りしかば、木材は碎片と一個の大樽の外は、何物も岸に寄らざりけり、此大樽の内には、ブラジルの豚肉を納れたれども、海水と土砂の爲めに、已に腐敗し居たり。尚ほ六月十五日までは、食物を得る爲め用ゐたる時を除く外は、毎日此の如く働らき續けるが、食物を得る爲用ゆる時間は、滿潮の時と定め、干潮の時には、すかさず船に行きて働くことなせり、かくて此時までに木材、板並に鐵具の手に入りしもの夥しく、我にして若し造船術を知りしならば、一艘の良船を製造するに餘りありしならん、又鉛板殆んど百十二封度（我十二貫五百四十八匁）を得て、之を數個に分割して、數回に運び出したり。

六月十六日。海邊に到りしに、巨大なる一疋の海龜を見たり、上陸以來海龜の眼に入りしは、これが始めなれど、そは此地に稀なる爲にはあらで、我身の不幸なりし爲なるが如し、我若し此島の他の海岸に居りしならんには、毎日數百疋の海龜を獲ること難からざりしならんと、後に至りて知りけるが、然れども亦これが爲に、我に取りて或は費す所も多かりしならん。

六月十七日。終日海龜の料理にかゝり、その卵六十個を得たり、此島に上陸してより、山羊の肉と鳥肉との外には絶えて口にしたることなき我身には、海龜の風味は、また一入にて、舌鼓を鳴らして賞翫したり。

六月十八日。終日雨降り外出せず。この時は雨殊に冷かに感じ、寒氣さへ覺ゆる程にて、當緯度の氣候には珍らしきことなりき。

六月十九日。氣分甚惡しく、剩へ身體をののき、天氣寒冷なりき。

六月二十日。終夜眠らず、頭痛烈しく、且つ發熱したり。

六月二十一日。病甚し、さなきだに不幸の境涯なるに、病さへ加はり、助けなき身の、行末を案じ煩ひ、殆んど生きたる心地もせず、往年バル港を出帆せし時、暴風に遇ひし以來、始めて茲に神に向ひて祈禱したり、されど心の取亂れし折柄なれば、何事を禱りしか、また何故に禱りしか、己れさへも辨へざりし程なりき。

六月二十二日。病少しく懈りたれど、尚病氣の成行を彼此と思ひ煩ひ、末恐ろしさ必地したり。

六月二十三日、病勢再び進み、惡寒烈しく、身慄き、やがて劇しき頭痛を覺えたり。

六月二十四日。病大に怠りたり。

六月二十五日。劇症の瘧に罹り、冷熱時を違へずして發作し、各〻七時間程續き、次て身體疲れて發汗したり。

六月二十六日。病稍怠りしが、食ふべきものなかりければ、銃を提げて立出てたれども、疲勞甚しくして氣力なし、されども一頭の牝山羊を殺し、辛うじて家に持歸り、その肉を焙りて食ひたり。尚それを蒸燒にせんと欲し、且つ肉汁をも拵へんと思ひたれども、鍋なかりければ、如何ともすること叶はざりき。

六月二十七日。瘧の再發劇しく、食はず飲まず、終日横臥したり。渴甚しく殆んど死せんばかりに感じたれども、起きて水を飲む氣力もなかりき。再び神に祈禱しけれども、前後を取亂せし折柄なれば、何事を言ひしか辨へず、平生とても、我は無知にて、神に祈るべき詞を辨へざりし程なれば、唯横臥して「神よこの身を憐らせ給へ、神よ我を憐ませ給へ、神よ慈悲を垂れさせ給へ」と云ふに過ぎざりき。思ふに、二三時間は外に何事をもなさゞりしが、やがて發作も鎮まり、眠に就き、夜ふくるまで醒めざりしが、醒めし後は、氣分甚だ爽なりしかども、疲勞を感じ、且ついたく渴を覺えたり、されど我住居の内には、一滴の水もなければ、止むを得ず、其まゝ横臥して、夜の明くるを待つ間に、又いつとなく眠に就きたり。この第二の睡眠中我はいとも恐るべき夢を見たり。

地震息みて、暴風の吹きける時、我は墻の外側なる、地上に坐せしと思ひしに、火焰の光輝くうちに、黑雲の中より身を現はし、地上に降り來る人あり、滿身より光を放ちて、仰ぎ見ることさへもならず、その容貌の恐ろしげなること、辭に述べがたく、足の地上に觸るゝと共に、大地の震動せしこと、前日の地震に異ならず、天地は火花を以て滿されしかと疑はれ、怖ろしなんど云ふばかりなかりき。かくて此人の地上に降るゝと思ふ間もなく、手に長鎗を提げ、我方に進み寄り、我を刺殺さんとするものゝ如く、やがて少しく距てたる一段高き處に立止まり、大音を揚げて「すべてこれらの事は汝を悔改めに誘かざりしや」と云ひ、その音聲の恐ろしかりしこと、魂

消えなんばかりにて、その有様は、口舌のよく盡し得べき所にあらず、さてかく言ひながら、彼は手に持てる長き鎗をあげて、我を殺さんとしたりと思ひたり。

此物語を讀んものは、かく恐ろしき異象に會へる我には、その心靈の恐怖せる狀態を、語り得らるべしとは、誰とて思はざるべし。そが夢なりし間にも、尙ほ我は斯る恐ろしさを夢みる心地せり。醒めて後に、一夢なりしとを覺りても、我心に殘りし感觸ば、これを陳ぶること難かりき。

嗚呼我は、是まで神を知らざりけり。父より受けたる訓誡は、爾後八ヶ年の間絕えず船乘りの惡習に染り、且つ我と同じなる陋穢き惡友と交はりし爲め、全く打忘れて露ほども思ひ出さず、仰ぎて神の德を思ひ、俯して己が行を省みるなどいふ心は、毫も起らず、善を願はず、罪の深きを知らず、煩腦の雲に蔽はれて、愚かなる振舞のみを爲し來れる我は、普通の水夫の中にて、最も頑固にして、無分別なる惡漢は、かくあらんと想像せらるゝ者と、宛然相同じく、危難に臨みても神を恐れず、救を受けても神に謝するの心、少しもなかりけり。

何故に我は、此くまで父の訓誨に戻り、神の恩寵を蔑にせしか、人或はこれを疑ふものあるべけれど、玆に數言を添へて、少しくこれを說明せん。

抑も今日に至るまでは、我は如何なる不幸、災厄に遭ひし時と雖も、之を以て神の所爲なりとは露ほども思はず、又之を以て、父の訓誨に背きし不孝の罪、若くは現在の罪に對する、正當の刑罰なりとは少しも思はざりき、ましてや之を以て平生の罪業を罰し給ふ神慮なりしとは、些も思はざりき。又かの亞弗利加なる、荒蕪の海岸に彷徨しけるときの如きも、絕て己れが行末を案じ煩ひしことなく、隨て神に對して我が行くべき方向を指示し給へ、或は己れを取圍める、猛獸若くは蠻人の危害を免れしめ給へと、祈る心もなく、神若くは神の攝理に就ても、毫しも考ふる處なく、唯稟賦の天性にまかせ、常識の示すままに(實はそれさへ覺束なく)禽獸の如く振舞ひしのみなりき。又往きに葡萄牙の船長に救はれ、善く待遇せられ、剩へ正當に且つ慇懃に取扱はれしのみならず、仁慈の取計らひをも受けしに、我は之に對して毫も感謝の念を懷かざりき。又その後難船に遇ひて落魄し、此島の邊りにて溺死せんとせる、危難に會ひし時も、尙少しも悔恨の狀なく、又之を神の罰と認ることもなく、唯我は不幸なる狗に異ならず、常に艱難に遭はんために、此世に生れ來れるなりと屢々言ひ放ちたりき。

他の乘組員は皆溺死せしに、我唯一人助かりて、此處に上陸したる時は、我は實に狂喜仰天したり、若し當時神の恩寵を感ぜしならば、我は眞に感謝の念を生じたるならんに、さはなくして單に普通の歡喜に過ぎず、即ち喜悅の始まる所は、喜悅の終る所にして、神が我を護り給ひしのみならず、同胞の皆溺死せし中より、唯り我のみを拔きて保護し給ひたる、神の特恩をば毫も顧みず、又何故に神はかくまで我のみに厚く惠みを垂れ給ひしかと、尋ぬる心少しも起らざりき。

今その趣きを譬ふれば、かの船乗を稼業とする者共が、幸に難船の厄を遁るゝ時は、漫然として酒を仰て氣をはらし、輒ち前きの災厄を忘るゝと、その有樣宛ながら相似たるものありけり。又その後或は心を平かにして、己れの境涯を顧み、如何なれば、我のみ獨とり、かく人跡の打絶えて、生涯身の救はるべき望もなく、また贖はるべき便もなき、此一孤島へは流されしぞ、と一時は深き思に沈みしことありしかども、然れども一旦我生命の恙なく、飢渴の患なきを知りては、既往の災難を追懐するの心は、頓に消えうせ、安如として只管日々生活の事にのみ心身を委ね、我現在の憂き艱難は、天の裁判なり、神の所業なり、といふが如き念慮は、我心に起りしこと、甚稀なりき。

前きにも述べし、かの穀物の偶我墻の傍に萠え出たりしを見ける時、こは徒事にあらず、神が我が爲めに奇跡を示し給ひしにやあらんと、暫時は眞面目に考へけれども、さにはあらざりきといふ事を知るに及びては、乃ち敬神の念は、頓に消えうせたりき。又世に地震ほど恐ろしきものはなく、又是れ程強く、神の不思議なる力を、人に直覺せしむるものはなきに、然るに地震の恐怖去るや、我胸中の感覺も忽焉として消えうせ、少しもその跡を留めざりき。されば我現在の困難なる境遇を以て、これ神の力なり、神の裁判なりと、思はざりしと、恰も人生の最も多幸多福なる境遇を以て、之を神慮に出てたりと、思はざりしと同樣なりしなり。

然るに、一朝病に罹りて、無常の觀念胸に迫り來り、精神は重き煩悶に打沈み、身體は烈しき熱病に疲果ける時、久しく眠り居たりし良心は、こゝに勃然として發り來り、輒ち我過ぎ越方を顧み、身の所行宜しからずして、神の怒を招き、かくまでに憂き目、つらき目に遇はしめ給ふことの恐ろしさよと、身の不心得をぞかこちける。

病床に臥したる後、二日三日の雨日は、身を恨み罪を悔ゆるの心、いと切にして、烈しき熱病と良心の苛責とに得堪へず、思はず口を開きて、神に禱を捧げけれども、今の願と後の望とを述べたるにはあらで、只驚慌と苦病とに迫られて、思はず聲を發したるのみ。自ら罪障の深きを曉りても、かく憐なる境遇の中に、空しく死することの、いとも哀しき事よと、心緒麻の如くに亂れたる折柄なれば、自ら如何なることを祈るべきかを知らず、これを祈禱と言はんより、寧ろ苦痛の餘りに神に向ひ、「あゝ天にいます神よ、如何なれば我はかくまでに、憐れはかなきものぞ、助なきこの身の今病にかゝり、靈の緒の絶えなんこと疑あるべからず、我は如何に成り行くべきか」といひ、熱き涙はふり落ちて、霎時言葉もなかりける、折しも思ひ起ししは、此物語の始めに記せる、我父の預言にして、我若し斯る愚なる振舞をなすならば、神は我を惠み給ふまじ、いつか迷の雲晴れて、父の訓誡を用ゐざりしを、悔ゆることあらん、然れどその時は最早我を助くるものなかるべしと、懇に告げ給ひし言葉を思出て、我知らず大聲を放ちて、嗚呼父の訓言の空

からずして、今ぞ身に知る時こそ來にけれ、神の判決面のあたり身に酬いて、我を助け又は我言を聽くべき人もなし。安逸幸福の生涯を送り得らるべき地位をば、情深くも與へ給ひし、神の惠を外にして、自ら之を顧みず、又兩親より其幸福なる狀を聽んともせず、徒らに我慢なる所行の爲に、兩親に歎きをかけ、我も今はその報にて歎き苦しむのみ。今更悔いたりとて反らねど、當時若し兩親の訓誨援助を否まざりしならば、此身も出世して、萬事意の如くなりしならんを、不信不孝の罪、今は身一つに報い來て、誰とて助くるものもなく、心を慰むる人もなく、又忠告を聞くの友もなく、我身一つをだに支へ兼ねたる此不仕合」と言ひて、又神に對し「願くは神よ我を助け給へ、我は深き憂に沈めり」と叫びたり。これぞ我數年以來、始めて神に捧げたる祈禱なりける。さても此事は姑らく措きこれより復た日記を記るさん。

六月二十八日。安眠しければ、氣分稍爽快となり、且つ病の發作も全く止みたれば、起き出てたり、昨夜見し夢の恐ろしさ、尚毫も去りやらねども、明日又もや癪の發作あらんかと慮り、その時自ら神氣を補ひ、身を扶持するために、必要なるものを用意し置んと思ひ、先づ大吹なる德利に水を滿て、之に精酒の少量を混て、その惡寒を誘起すべき質を去り、寢臺に近き机上に置きたり。次に山羊の肉の一片を取出し、石炭の火にてこれを燒きたれど、食せしはいと少量なりき。又歩行を試みたれども、疲勞甚しく、且哀れなる己れの狀を歎き、明日にも再び癪の發作あらんことを恐れて、心少しも浮き立ざりけり。夜に入りて、海龜の卵三個を灰の中にくべて之を燒き、夕食として殼のまゝ食ひたり、これぞ、我が記憶によれば、生來始めて神の祝福を願ひて食ひたる食物なりける。

食後試に散歩したれども、身體の疲勞甚しく、幾んと銃を擔ふに堪へざる程なりければ（我は銃を携へずして外出せしことなし）、少しく歩みて地上に坐し、前面の海原を見渡せしに、滿いと靜にして平かなりき。此處に坐せし時、そゞろに我胸に浮びたる思想あり「明瞭目擊するこの地球と大海は、如何なるものか、何處より造られたるにか、我は抑も何ものなるか、我以外の一切の動物、その野生なると、人に飼はるゝとを問はず、又人類なるとに論なく、此等は如何なるものにて、又何處より來りしものか、是れ地球、大海、空氣、蒼穹を創造したる、不思議の力にて造られたるに相違あるまじ、而して其力とは何ものなるか」との疑問起りしが、それより又自然に「總て一切の萬物を造りたるは、即ち神なり」といふことに結論したれども「さて神が天地萬物を造り給へりとすれば、其造り給へる一切の物、並に之に關係ある一切の事を、神が指揮、監督し給ふは當然なり、何となれば、萬物を造る力ある上は、また之を指揮監督する力あるべきは必定なり、果して然りとすれば、神の大能の範圍内に生ずるものは、いづれも神の知食し給ふ所か、又は神の指圖に依らざるものなき理なり」と思考し「是に於て若し何事も神の知

食し給はで、起ることなしとすれば、今我がこゝに居ることも、又斯る無慙なる狀態なることも、神はこれを知食すべきとなり、若し何事も神の指圖なくして起ることなしとすれば、我が身の此憂き艱難は、みな神の指圖に依るとなり」と自然に論結したりき。此く論結するまでは、之に反する思想は、一つも我腦裡に起らざりければ、我身の此憂き艱難は、皆神の命じ給ひたる所なり〃獨り我に關するのみならず、凡そ此世に起る百般の事物を支配する力は、唯神のみ之を有し給ふものなれば、かゝる淺間しき狀態に、我が陷りたるは、神の指圖に依れりとの道理は、一層強く我を感動せしめたり。

然るに之に次ぎて直に「何故に神は我身に斯る憂き目を見せ給ふか、我は何事を爲したる爲めに、かく待遇はるゝか」といふ疑問を心の中に起しゝが、やがて、此は神を瀆したる考ならんと思ふ良心に遮られたる其刹那に、此奴汝は何事をなしたりやと問ひ尋ぬるにや、試みに汝が既往の生涯を顧みて、自ら何事も爲さゞりしかと思ひみよ、汝が今日まで生命を完うしたるは、何故かと自ら顧みよ、かのヤルマウスの碇泊處にて溺れ死ざりしは何故か、汝の船がサリイ港の軍艦に捕獲せられける時、戰死の難を免れ、亞弗利加の海岸にて、猛獸の患を遁れ、或は今こゝにて、汝の外の船乘は、皆溺死したるに、汝獨り生存したるは何故か、かくても尙我は何を爲したりやなどと、問ふにや」といふが如き聲を聽きたるやう感ぜられ、斯く既往を追想し、良心の責に苦められて、一言もなく、自ら問へど答ふるの辭もなくて、やをら憂に沈める身を起し、己が住家の方に引き退き、宛ながら寢床に赴くかの如く、墻を乘越えたれど、彼れ此れ思ひ亂れて眠らんとする心は、少しもなかりければ、暫らく椅子に寄りたるに、遂暗くなりければ、燈火を點けたり。さて又我病の再發を恐れて、痛く心を惱ましし、兎や角と思ひ煩ひける中、不圖ブラジル人が、一切の病氣に、煙草の外少しも藥を用ゐざること心に浮び出しが、幸に函の中に乾したる一卷の煙草と、未だ全く乾ざる綠色煙草とを、所持せることを記憶しければ、これ天の指示せらるゝものと、少しも疑はず、行きて見たりしに、果して函の中には、靈と肉と兩つの病を治すべき物をば見出したり、即ち豫期せる如く煙草のありしのみならず、豫て收め置きたる二三の冊子もそこにありければ、その中の聖書一卷を取出したり、是れまでは、聖書を閲みする暇もなく、又之を窺はんとする心もなかりしが、今はこれを取出し、煙草と共に卓子の所まで持來りぬ。

煙草にて我病を治するには、如何に之を用ふべきか、又は煙草の果して病を治するに効ありや否や、我は尠しも知らざりしが、兎に角効驗あるべしと心を定めて、種々の實驗をぞ行ひける。先づ初めに葉の小片を嚙みて試みしに、その色綠く、その味强きが上に、未だ用ひ慣れぬことて、痛く腦を痲醉せしめたり。次に煙草の若干を一二時間糖酒の中に浸し、横臥せし時、一口に之を飲んとも思ひ、又最後に石炭火の上にかざして、煙草を燒き、一つにはその藥効の爲め、一

つにはその溫熱の爲めに、成るべく忍びて、鼻を煙の中に差入れ、殆んど窒息せんとするまで續けたり。

此の如く、煙草を以て治療を爲せる間際には、聖書を把つて讀み始めたれど、煙草の爲めに頭腦痛く錯亂したりけん、殆んど讀むに得堪へず、只折々書物を開きしが、迺先づ我眼に入りしは、「なやみの日にわれをよべ、我なんぢを救はん而してなんぢ我をあがむべし」といふ文句なりき。この言葉は、我現在の狀態には極めて適切なりければ、當時之を讀みし時は、後に此句に由りて我の感動せし如く、強くはあらざりしかども、稍我が心を感動せり、其の故は、神の救濟と云ふことは、當時の我に對しては、甚緣遠く、幾んど不可能の事ともいふべき程にて、イスラエル人の子孫が、神より食物を賜はるべき約束を受けしとき、神はこの野原に食卓を置きならぶることを得給ふや、など云ひしと同じく、我もまた神が此孤島より我を救ひ出すことを得給ふやと云ひける程なりければ、神の救濟といふ語は、我に取りては無意味の如く響きたり。而して我が此孤島より救出されんとする希望の現はれしは、實に多年の後なりしかば、斯る輕侮の思想に動されしこと度々なりけれど、然れども此聖語によりて、我が心を感動せしめたること、亦淺かちず、此語に就きて沈思冥想したること、また數なりき、さても夜は更け行き、煙草は已に頭腦を麻醉せしめて、眠氣を催しければ、燈火を點せしまゝ、洞穴の中に差置きて、夜中不時の用に備へ、やがて寢臺の上に登りぬ。されど横はりし前に、我は是までに曾て例なかりしことを行ひたり、即ち神に向ひて跪づき、願はくは、なやみの日にわれをよべ、我なんぢを救ん、との約束を遂行給へと禱りたり。

かく不體裁なる祈禱を捧げたる後、煙草を浸したる糖酒を飲みしに、煙草の氣至りて強かりければ、總に嗟を下し、そのまゝ直に横はりしに、やがて煙草の氣、痛く頭腦を犯したるやう覺えたれど、間もなく熟睡し、翌日の午後まで覺めざりしが、日指の模樣によれば、三時頃なりしならん、いや〳〵翌日の一日一夜を眠り過して、その翌日の殆んど午後三時頃まで眠りたりとは、今が今まで半ば信じて疑はず、その故は若し否らずとすれば、後日に至りて發見したる如く、我計算せる週の中より、何故一日の不足を生じたるか、その理由明ならざればなり。若し我曆柱に線を重複に彫みたるが爲めに、不足を生じたりとすれば、則ち一日以上の不足を生じたるならん、但し我計算に於て不足を生じたるは、その何れにありしかは、我は決して之を知らざりき。そは兎も角も我睡より醒めし時は、いたく爽快を覺え、精神活潑にして何となく喜ばしく、やがて起き出たるに、身體も前日よりは健にて、食欲も覺え、腹の工合も好かりけり。翌日も瘧の發作もなく、引續きて快方に向ひたり。この日は二十九日なりき。

翌三十日は、勿論我床揚げの日なりければ、銃を提げて外出しけれども、餘り遠きに行くこと

を好まざりき。やがて、雁に似たる海鳥一二羽を獲て、家には持ち歸りたれど、喜んで賞翫する程にもあらざりければ、海龜の卵を食ひしに、その味甚美なりき。此晩は前日効驗著かりしと思ひし藥、即ち糖酒の中に煙草に漬けたる藥を、再び用ゐたれど、前日飲みし程、多量には服用せず、また煙草の葉を嚙みもせず、又煙の中に頭を差出しもせざりしが、翌日即ち七月一日は、我が豫期せしほどに快よからず、少しく惡寒を覺えたり、但しさしたる事もなかりき。

七月二日。我は三樣の方法を以て藥用し、初の如くその藥氣に瞑眩しけるが、飲みたる分量は二倍となせり。

七月三日。爾後數週間は、十分に氣力を恢復せざりしかど、竟に瘧も發作せざりき。かくの如く日々氣力を恢復しつゝありし中「我は汝を救ふべし」と言へる、聖書の一句に就き、切りに思を凝らし、常に救を望み居たれども、斯る孤島に居て、神の救を得んと難しと斷念め、自ら落膽し居けるとき、不圖病氣といふ顯著なる苦腦を救はれし事に心付き、既に神の救を受けながら、こゝに心付かずして、そを忽にせしことを思ひ、やがて自ら己に問ひ、我は不思議にも病氣の苦痛を救はれしことなきか、最も悲むべく最も恐るべき狀態より救はれしことなきか、而して其事に關し如何に感謝の意を表したるか、我は我務むべき本分をしたりや。嗚呼神は我を救ひ給ひしに、我は神の光榮をたゝへざりき、即ち神の救を救として、有り難く感謝の意を表すべきに、さは爲さずして、いかでか之にも勝る救ひを望むことを得べき、と己れを省みて獨り自ら心に慚ぢけるが、この自問自答はいたく我が心を動かしけん、直に跪づき、我病氣の恢復に對して、聲高らかに神に感謝を捧げたり。

七月四日。朝起きて聖書を把り、新約全書より眞面目に讀み始め、是より毎朝毎夜その何章たるには拘はらず、我が意向のまに〳〵讀むことを日課とはなしたりき。かく眞面目に此事に從ひしに、久しからずして我既往の惡業を、一層深く衷心より悔悟し、夢の中に聽きたりし「すべてこれらの事は汝を悔改めに誘かざりしや」といふ文句が、切りに我思想に往來しける、其折から神意の然らしむる所にやありけん、偶〳〵當日讀みける聖書の中に、彼(基督)は人に悔改めと罪の赦を予んか爲めに、擧げられて、君となり、又救主となれり」といふ一句を讀み、思はず聖書を投ち、狂せる如く喜び、眞心をこめ、兩手を擧げ「基督よダビデの子なる基督よ、神に擧げられて、君となり、救主となり給ひし基督よ、願はくは悔改めしめ給へ」と聲高らかに絶叫したり。これ我が生涯に於て、言葉の眞義に適へる祈禱とも云ふべき、初度の祈禱にして、此時我は、己れの境遇に感じ、且つ神の御言葉に勵まされて發れる、眞の希望を以て祈りたり、此くて此時より我は始めて、神が我が願を聽き給ふべしとの希望を抱きたりといふも可ならん。

上に掲げたる「われをよべわれなんぢを救はん」といふ語に對し、我が前きに下し居たる解釋

の誤れるを悟り、此時より全く異なる意義の解釋を下したり、當時我は、救と云へば、己れの居りし幽囚の境遇より、救出さるゝといふ外には、何等の考なかりしなり、其故如何となれば、我は此島に於ては成る程自由なれども、此島は我に取りては、確に牢獄に異ならず、世界中最も不良なる牢獄なりき。然るに今は、之を他の意義にて解釋することとなれり、即ち倩過去の生涯の空恐ろしく、我罪障の重さを顧み、神に向てひたすら、己が心の平安を傷へる罪障の重荷を救はるゝやう求むるの外、何事をも求めざりき。我淋しき生活の如きは、物の數ならず、されば斯る境遇より救出されんことを祈らざりしは言ふまでもなく、其事々考へだにせざりき、これ己の罪障の重きに比ぶれば、固より言ふに足らざればなり。さはれ、我がこゝに此一節を加へたるは、何人にまれ、これを讀まんものに對し、凡そ人の眞に悟道の境に進むものは、罪障を救はるゝこそ、苦痛を救はるゝにいや勝れる福祉なれといふことを、一言せんが爲めなりかし。さて此事はこれを措き、これより又々日記を記るさん。

第六段　心機一轉して永住の覺悟を定め　三年の春を迎へて季節の變化を知る

我が生活の狀態の、佗しく哀なるは、前に異ならねど、心の安樂は前日に比らぶべくもあらず、そは毎日怠らず聖書を讀み、神に祈禱しけるに依り、心自ら高尚の事に向ひて、從來未だ曾て覺えざりし程の愉快を覺えたればなり。かくて健康體力兩つながら漸く恢復し來りしに依り、これまて事を缺きたりし道具類を自ら備へ付けて、成るべく規則正しき生活を營まんものをと自ら憤發したり。

七月四日より十四日までは、概ね毎日銃を提げ、此處彼處を歩きて日を暮らしけるが、病後の疲勞甚しく、幾んど想像の外なりければ、病後に人の保養を爲すが如く、一時に多きを貪らず、少しづゝ歩み習ひたり。思ふに此療治法は、全く新式にして、恐らく是れまてにこの法にて、癒を治したる例あるべしとも覺えず、されば容易に之を人には勸めがたし、我の如きも、この法にて病氣の發作をば止め得たれども、又之れが爲めに身體を弱め、四肢に痙攣を起しゝこと度々なり、又これに由りて我が實驗したるは、降雨季に外出することの、健康に最も害あることなり、殊に暴風、若くは旋風に伴へる降雨は最も身體に害あり、又乾燥季に降る雨は、概ね暴風を伴ふがゆゑ、之を九月、十月の頃に降る雨に比ぶれば、最も有害なり。

この不愉快なる島に居ること、既に十個月以上にも及び、今はこゝより救ひ出さるゝの望は、全く絶えたるが如く見え、且つ人のこの島に來りたる形迹も絶えてなしと確信しければ、今は十分心安く覺え、我居をこゝに落ちつくることゝ定め、さてこれよりは、一層十分に此島の模樣を

見分し、未だ曾て見聞せざりし、産物をも見出さばやとの大望を起したり。

さても特別の見分を爲さんとて、その途に上りしは、七月十五日にして、先づ前に云へる、我が筏を乘り上げたる、かの小川を溯りけるに、凡そ二哩の上流に至れば、潮流最早こゝに達せず、且つ水は清冽にして良好なりき、然れども、遇〻乾燥季なりしかば、或る處には水幾んどあるとなく、よしや多少の水ありとも、流るゝ程には至らざりき。この小川の兩岸には、美麗なる平原、即ち牧場とも見るべき處許多あり、一望平滑にして、草を以て掩はれたり、又高原に接續せる一段高き處にして、川水の決して氾濫せざるべしと想はるゝ處には、煙草の青々として、莖の太く繁茂せるを見たり、煙草の外にも尙くさ〻の植物ありたり、何と名くる植物か、曾て見聞せし覺えもなかりけれど、それそれ功能あることならんも、之を知るによしなかりき。此島と同じ季候の地に住する印度人が麵麭を製すると聞ける「カッサヴァ」といふ植物もあらんかと探りたれど、一つも看出さざりしが、「アローヴ」(蘆荟)といふ大なる植物は多くありたり、されど其當時は、何の用を爲すか少しも知らざりき。又甘蔗の多く生ひ茂れるをも見たれど、いづれも野生のまゝにて、耕耘の力を加へざるものなれば、其發育十分ならざりき。さて此時はこの邊にて島の見分を中止し、歸路に就きけるが、その途中今後新に發見すべき、植物及果實の功能、利益などは、如何にせば知ることを得べきかと思案しけれど、取止めたる事も思ひ出てざりき。畢竟するに我がブラジルに居りしときは、野生の植物につきて觀察せし所、極めて少なかりしかば、今此危急の場合に際して、指したる用をも爲さゞりしなり。

翌日、即ち十六日再昨日と同じく川を溯り、昨日よりも遙かに進みしに、小溪と草原はこゝに盡きて、樹木漸く多くなれり。此邊に種々の果實あり、殊に甜瓜の地上に纍々たると、葡萄の樹上に盈々たるを見たり、葡萄の蔓は樹より樹に蔓り、實は總〻として、今方に熟したり。こは實に意外の事にして、我が喜び大方ならざりき。されど我が曾てバルバリー(亞弗利加北岸の地方、かのサリイ港は即ち此地方なり)の海岸にありし時、我同胞英國人の捕はれて奴隷たりし者が、葡萄を過食せしため、下痢と熱病に罹りて、死せしことを思ひ出しければ、少しく食ひて止みたり。されど、この葡萄を巧に利用すべき方法を思ひ付きたり、即ち之を日に乾かし、乾葡萄として蓄へ置き、葡萄のなき季節に、之を食用とすれば、健康に益あるのみならず、其味ひ美なるべしと思ひたり。

其晩はこゝにて過ごし、我が住居へは歸らざりき、因に記るす、我が家を明けて、一夜を他處に過したりと云ふべきは、此時を以て始めとせり。此夜は、かの始めの考案に倣ひ、一樹に登りて熟睡し、翌日更に見分の途に上りしに、溪水の延長より推測すれば、殆んど四哩程も旅行しけるが、南北に亘る小山の連脈を控へ、尙正北に向ひたり。かくて行程の盡くる所に至れば、その

地勢西の方に低く下りて、ひろ〳〵として傍には巖石より湧き出づる清泉あり、流れて正東に向へり、此邊一帶の地は、嘉木美卉生ひ茂り、翠綠滴らんばかりにて、恰も春に遭へる植物園の如くなりき。我は之を打眺め、之れみな我物なれば、我は紛ふ方なく、此國の王にして、又領主なり。既に此國を領する權利あれば、この權利を讓るべき繼嗣あらんには、我は全く之を世襲の領土とすると、猶我が英國の侯伯が、其の領土を世襲にすると、少しも異なるとなかるべしと思へば、心窃に愉快に堪へず、假令へ餘事に關する苦痛の感情なきにあらねど、この喜ばしき低地の方へ降り見れば、椰子樹、蜜柑、檸檬及び香櫞など我劣らじと繁茂しけり、されどいづれも野生のまゝなれば、實を結べるは稀なりし、少くとも我が見たる當時は實を結べるは少なかりき。されど我の取り集たる綠色の白檸檬(レモンの一種)はその味美にして、且健康に益あり、後にその液に水を混ぜたるに、極めて新鮮にて、補益の効ありき。

是に於て、これ等の果實を取集めて、家に携へ歸るなど、種々の用務、數多出來りければ、まづ遠からず來るべき降雨季の爲めに、葡萄、白檸檬、並に檸檬を貯へ置んと思ひ、處々にて葡萄を取集めたるに、或は多量を得たる處あり、或は稍少量を得たる處あり、又白檸檬と檸檬とを取集め、其内各々少しばかりを携へて、歸路に就き、再び來るときには、袋、若くは何なりとも、その殘餘を、成るべく多く家に運ぶに足るものを、携へ來らんとは思ひたり。かくて此旅行に三日を費して、家に歸りけるが、家に達する前に、葡萄は已に損傷を生じたり、こはその實の累々と重なれると、液汁の重みとにて壓潰され、又は互に揉まれて傷はれたるもありて、何の用にも立たざりしが、白檸檬は故障もなかりき、されど携へ歸ることを得たるは、寔に少量なりき。

翌日は即ち十九日なり、我は二つの小甕を造り、かの收獲を家に搬ばんとて、再昨日の處に行きしに、こはそも如何に、昨日取集めて山なす程なりし、美しき葡萄は、散々に取亂され、されく〳〵に蹈み躙られ、又は此處彼處に引きまはされしもあるのみか、痛く食ひ減らされたり。之を見て、こはこの邊に住める、野獸の所爲なりとは推したれど、如何なる野獸にや、更に知るよしもなかりき。さて地上に積み置かば、野獸に蹈み荒され、甕に入れて運ばゞ、重みにて自ら壓潰さるべければ、我は別に一計を案じ、澤山に葡萄を取り集め、之を樹の外側の枝にかけて、日光にて乾かし、白檸檬と檸檬とをば、我の堪へらるゝだけ背負ひて歸りたり。

此旅行より家に歸りて後、かの溪谷の果實に豐かなること、地勢の愉快なること、又泉水と森林の側にありて、暴風の害なきことなど思ひ出てゝ、喜悅に堪へず、且つ現在住居として擇べる處は、此島の中最も惡しき處なれば、結局はこゝを轉じ、成るべくは彼の如き愉快なる土地にて現在の住居ほどに安全なる處を選みて、移り住はんものと思ひ始めたり。

住居を移さんとの考は、久しく我が腦裏に往來し、殊に其の土地の愉快なるに心浮かれて、し

ばしは非常に移住せんと欲せしかども、その事を思案すること稍切なるに及びて、更に思ひ廻らすやう、我が目下住居する所は、海邊なれば、萬一我身に仕合せよき事の出て來らんも計りがたし、且つ我が前きに不幸にも風波に送られて、こゝに漂着せしと同じ不幸に遭ひて、またこゝに漂流し來るべき、不運の人なしとも云ひがたし、よしやこの事空頼となるも、此島の中央なる、山陰や森の茂みに引籠り住むは、好んて自ら一生涯の禁錮を自得するに同じくして、身の仕合せとなるべき機會を得ること、覺束なきのみか、全く不可能の事とならんも計り知るべからず、然らば住居を移すことは、兎に角然るべからずと、思ひ返して斷念したり。

移轉の事は思ひ止まりたれど、彼地を慕ふの念は、止むべくもあらねば、我は七月中の餘日を思ふ心の止みかたければ、やがて其處に別莊を築き、堅固なる二重の墻を遶く環らして之を圍み、その高さは我の手の屆く程となし、墻と墻との間には叢樹を植ゑ込み、いと心安くこゝに住みくらし、時には二夜三夜ほども、居續くることもあり、海岸にある家の外に、こゝにも別宅を搆へたる心地せられける、その出入は、やはり梯子をかけて、墻を乘越えることとなせり、かくて此工事の落成せしは、八月初旬なりき。

別莊を取圍む墻の工事も、總に終りて、先づ善しと、是れより自ら慰めんと思ふ間もなく、雨降り出しければ、據なく舊家に閉籠り、暫らく休らひ居たり、其故は別莊にも帆布の切にて既に天幕を張りたれど、暴風を凌ぐべき小山の陰なく、又大雨の降る時に、身を隱すべき洞穴を背後に控へざればなり。

既に云ひし如く別莊の工事を終はり、これよりその便利を樂まんとせしは、八月の始めなりしが、同月の三日に、乗ねて樹の枝に懸け置きける葡萄が、よく乾きて、實に良好なる乾葡萄となりしことに心づきたれば、之を樹枝より取卸し初めしに、こは最も都合よろしかりき、其の故は次て降り出せし雨に遭ひしならば、爲めに害はれんことは勿論にて、房大きくその數も二百個以上もありしかば、冬季の食糧を大半失ひしならん。かくも葡萄を取卸して、其の大半を洞穴に運び入れし後、間もなく雨降り出し、その日即ち八月十四日より十月の中旬頃までは、毎日多少雨降り、時に大雨の降りしありて、幾日も洞穴より得出ざりしことありき。

この頃我は我家族の繁殖せしに一驚を喫したり、乗て畜ひ置きたる猫の中一匹の猫、いつの間にか見えずなりければ、逃け亡せしか、若しや死にはせぬかと思ひ、心に懸り居りしが、何等の消息もなかりしに、驚くべし、八月の終り頃に、三匹の仔猫を伴ひて、不圖歸り來りたり、我は前きに我の謂はゆる野猫一匹を銃殺せしが、そは歐羅巴の猫とは、全く別種なりと思ひしに、三匹の仔猫は、親猫の如く飼猫の類なりしと、且つ我猫は二匹とも牝猫なりしにと思ひ、一層不思

議に感じたり、さてこの三匹の猫より、其後我は頻に得堪へざることと爲り、終に野獸の如く、或は之を殺し、或は成るべく家の外に追ひ出したり。

八月十四日より、同二十六日までは、雨降り續きければ、外に出ることも叶はず、又自らも成るべく濕氣を受けぬやうに、意を用ゐたり。されど此く閉ぢ籠る中に、食糧乏しくなりければ、已を得ず、二度外出し、一日は山羊一頭を殺し、最終の日、即ち二十六日には、いと大なる一疋の海龜を得たり、是は殊の外の饗應なりしが、此頃我は食事の規則を定め、朝は乾葡萄一房、晝は山羊又は海龜の肉片の焙りたるもの（肉を煮又は之を蒸燒にする器具なかりしは、我の不仕合せなり）夕は海龜の卵二三個を食ふことゝしたり。

雨の爲に內にとぢこめられて明し暮らす中に、毎日二三時間づゝ働きて、洞穴を取擴げ、次第に一方に穿ち行きて、遂に小山の外面に出て、墻の外に出づる出口を造り、以後はこの口より、出入しけり、前には全く墻に取圍まれたりし我は、門口のかく明け放ちあるために、何となく不安の心地せられたれど、この島に住する獸類の最大なるものは、山羊に過ぐるものなければ、別に怖るゝ程のものあるべしとも覺えざりき。

九月三十日。我上陸の不幸なる一週年は來れり。乘て海岸に打立てける柱曆に、刻み目を附けるが、我れは此の海岸に居りたると既に三百六十五日とはなりぬ。この日をば、特に宗教の式を執り行ふべき日と定め、之を斷食日とし、大地にひれ伏し、神に向ひて己が罪を懺悔し、神の裁判の公明なるを感謝し、基督に由りて、慈悲を垂れられんことを祈り、食を斷ちて、十二時間は勿論、日沒の頃までは、一物をも口にせず、儀式了りて後に、一片の「ビスケット」と一房の葡萄とを喫て、寢に就きたり。

これまでは、日曜日をば、別にいみじき日として守らざりき、初の中は、我心に宗教の觀念絕へてなかりし故に、歷柱に日曜日は、少しく長目に刻み附けて、尋常の日と區別し來りしをば、一時にして廢したれば、何曜日なるかを實に知らざりしが、今は前にも云へる如く、日を刻み來りて、一年となりしかば、之を一週間づゝに分ちて、七日目に日曜日と爲したり、されどかく數へて最後に至りしに、我計算に一二日の不足あることを見出したり。

さてまた、これより少し後に至り、墨汁乏しくなりければ、一層大切に之を節用し、最も著明き事のみを記るし、日常の細事をば略すこととしたり。

乾燥季と降雨季とに、一定の季節あること、是に至りて始めて明かになりしかば、その時節に應じて、事を施すべきやう、之を分つことを知るに至りたり、されど此事を善く知るに至りしは、經驗の結果に外ならざれば、今こゝに物語らんとするものは、我最も忌まはしき經驗の一つなり、けり、前段に於て大麥と米が、蒔かずして自ら萠え出たりしならんと、不審に思ひしも、その穗

を貯へ置きしことを物語りしが、その稻の穗は凡そ三十莖、大麥の穗は凡そ二十莖と覺えたり。

さて今降雨季も既に過ぎ去り、太陽も南下せる折柄なれば、今こそ蒔べき時なれと思ひたり。さればかの木製の鋤を以て、叮嚀に一區域の地を堀起し、之を二つに分ちて、稻と麥との種子を蒔きつゝありし折から、偶〻思ひ起しけるやう、今種子を蒔くものゝ、果して適當の季節なりや否や明がならざれば、一時に皆蒔ざるに若かずと、依りて各その一握りを殘し、凡そ三分の二だけを蒔きたり。かく爲し爲、後に至りゝ我をして大に心地よく感ぜしめたるとあり、その故いかにといふに、我が種子を蒔し時は、過〻乾燥季に入り、種播の後、一滴も雨降らざりしかば、種子の成長を助くべき水分なきをもて、一つも生ひ出づるものなく、再び降雨季に及んで、種子は今更らのやうに、萠え出てたれば、更に濕地を求めて、再び試みんと思ひ、別莊に近き一區なりしと、容易に想像せられければ、春分の少しく前、二月に殘し置きたる種子を播きけるに、間もなく三、四雨月の春雨地を耕し、に逢ひて、種子は時を得顏に生ひ出て、收穫も殊の外に多かりけり、されど殘し置きしは、僅に一握の量に過ぎず、しかもそをみな蒔きしにあらざれば、刈り收めたる量も、極めて少なく、米麥兩種にて半ペック（一ペックは我五升四勺弱に當る）には超えざりけり。この實驗によりて我は忽ち農事の先生と爲り、播種に適せる季節をも、詳に知りしのみならず、一年に二回種子を下ろして、二回收穫するを得べきことをも覺りたり。

米麥の成長しつゝある中に、その事は小なれど後日に我が利益となれる一事を發明したり。雨も息み、天氣も漸く定まり始めける十一月の頃、數個月の間訪れざりし別宅を見んとて、遙々出て行きしに、その狀態前きに見たるまゝにて、一も變りしとなく、我が造りし二重の墻も、完全にて損所も見えざるのみか、この邊りの木を伐りて造りし、垣の杙よりは、いづれも芽を發し、長き枝を出して茂れること、さながら揚柳の、頭を斷たれて、その初年に通常芽を發するに似たり。何の木を以て杙を造りしか、我はこれを知らざりしかども、かくも若木の生長せしに驚きながら、亦痛く打喜び、その枝をすかして、成るべく成長せしめんとしたるに、三年の後に至り、木立ち枝ぶり、えも云へぬ風景を添へ、墻にて取圍める地積は、直徑凡そ十二、三間なれども、今は樹木と稱するも可からん此杙の枝は、忽ちに茂りて、之を覆ひ隱し、乾燥季の間、宿るべき程に、十分なる木蔭をゞ成しにける。我は之を見て、今少しく杙を伐り取り、最初の住居の墻を繞りて、半徑に此の如き垣を造らんと思ひ立ち、かくて元の墻より、凡そ四間程を隔てて、二重に杙を建てけるに、やがて成長し、初めは住居の爲めに良き日蔽と爲りしが、後には防禦の用をも爲せることは後段に於て說き分くべし。

さて此島にては、一年の季節は、歐羅巴に於ける如く、夏冬の二季に分たず、概ね降雨季と乾

燥季の二つに分くるを得るならん、そは概ね左表の如し。

二月の半部、三月並に四月の半部は、降雨季にて、晝夜等分、或は晝夜等分の前後なり。
四月の半部、五月、六月、七月並に八月の半部は、乾燥季にして、太陽は赤道線以北に在り。
八月の半部、九月並に十月の半部は、降雨季にして、太陽は再び南下す。
十月の半部、十一月十二月、一月並に二月の半部は、乾燥季にして、太陽は赤道線以南に在り。

降雨季は、風の吹き模樣に依て長短ありたり、されどこは我が大體に觀察したる所なり。我は經驗上雨中に外に出づるは、健康に害あるやう思ひしかば、降雨季の來る前に、豫め食糧其の他一切の準備を調へおき、雨季の間に、外に出ねばならぬやうの事なからしめ、成るべく戸内に閉籠りて、濕氣に觸れぬ用心をぞなしける。されど此降雨季に於ても、その時に相應なる仕事少なからざりき、そは常に心を用ゐて、働かざれば、調へがたき用具の類尚多かりければなり、その中特に我が種々と試みしは、籠の製造なれど、其材料にとて、取り來りし木の小枝は、いづれも脆く折れて、物の用に立つべくも見えざりさ。さて籠を造るに、いと便宜を得たる事ありし、其の次第は、我が小兒の時父の住み給ひし町に、一人の籠製造人あり、我はいつもこの製造人の家の前に立ちて、籠の製造を見るをこよなき樂みとしけるが、小兒の習ひとして、餘計なる世話をやき、又はぢつと其の造り法など見詰め、時には手を貸したることさへありしかば、籠の製造法は十分に之を知り居たれば、材料の外には、何物をも要せざりしが、この時不圖心に浮びたるは、前きに墻の杙として用ゐたる樹木の枝こそ、多分英國の楊柳サロー、ウィルロー、又はオージールなどいづれも柳の類に似て、しなやかならんと思はれければ、まづ一つ之を試んものと思ひたり。

故に翌日我は例の別莊に行き、彼の樹枝の稍細きもの若干を伐り取りしに、よく我意に叶ひしかば、次には所要程のものを伐り取らんと、手斧を携へ行きしに、忽ち數多を得たれば、これを墻の内側に立てならべて、日に乾かし、用ゐごろになるを待ちて、之を洞穴に運び入れ、かくてこゝにて、次の降雨季の間成るべく數多の籠を造りて、或は土を運び物を移し、又は物を貯へ置くの用に充んとしたり、その製作の手際は、美麗ならざれども、善く用を辨ずるやうに造りたれば、その後は日常の必要品とはなれり、かくて若し壞はるれば、更らに之を製しけるが、殊に米麥を如何に多量に收穫するも、袋の代用として之を入れん爲め、深く大きやかなる籠を造りたり。

此困難なりし籠細工も、多くの日子を費して、遂によく爲しはてたれば、今は更に二種の不足なる物を成るべく調へんと思ひ立ちぬ。糖酒を以て殆んど充せる二個の小樽と普通の大さの玻璃瓶二三個と、水、精酒などを納るべき幾個の方形なる德利とを除く外には、流動物を盛るべき器

一つもなく、又破船の中より救ひ出せる大釜は、餘りに大きくして、肉湯を拵へ、又は肉を蒸燒にするなど、我望むが如くには、用ゐがたく、又物を煮るに用ふべき鍋類一もなかりき。次に得たしと思ひしは、煙管なれど、これを作ることは、到底我には叶はじと思ひけるが、遂にまた其製法を工夫したり。

夏季即ち乾燥季は、住居の周圍に杙を打立て、第二の墻を造ること丶、右の籠細工とにて、日を送りけるが、こゝに又一つの仕事出て來り、その爲めに思ひの外なる日子を費しけり。

我は全島を撿分せんとの大志を抱きければ、かの小川を泝り、現に別莊を建てたる處まて進み行きしに、こゝより地勢、西の方に開らけ、我が上陸せし所とは、反對の海濱に出づべきとは、既に之を前に說きたり。さて是に至りて我は更に進んて、その方面なる海岸まて横ぎらんと思ひ立ち、銃を擔ひ、手斧を提げ、犬を引きつれ、いつもより多量の火藥彈丸と「ビスケット」二塊と袋に入れたる乾葡萄の大房とを携へて、旅程に登りたり。かくて別莊のある所の谷を打過ぎ、西の方に當りて、海の見ゆる所にぞ來りける、折しも天氣快晴なりしかば、島なるか、大陸なるかは定かならねど、海の彼方に陸地あり〳〵と見え、その地勢は高く聳えて、西より西南西の方へいと遠く連れり、思ふにその距離は、こゝより凡そ二、三十里に下らざるべし。

彼の煙波を隔てゝ、遙に見ゆる陸地は、必定亞米利加の一部ならんとは、おぼろげながら推し

量りたれど、亞米利加のいづれの邊に當るか定かならず、我觀察にては、西班牙領に近き、恐らく野蠻人の住ふところに相違なからんと思ひけるが、前きに我が若しこのやうなる土地に上陸したりしならんには、現在の有樣よりは、一層の憂き目に逢ひしならん、されば我の此島に上陸せしは、近頃信じ初めける神の攝理に依るものにて、萬事を善きに取扱はせ給ふ、深き御心に出るならんと、自ら慰めて我心を安んじ、彼の地に到らんなどいふ無益なる願に、心を苦しむることは、思ひ止りぬ。

されど、暫くありて又思ひけるやう、かの土地が果して西班牙領の海岸ならば、確かに何時かは、船舶の彼方此方に往來するを見ることあらん、又若し然らずば、彼の土地は、西班牙領とブラジルとの間なる蠻族の住ふ海岸にして、其の手中に落つる程の人は何人を問はず、必らず之を殺して、その肉を茹ふと云ふ、極めて殘忍なる食人族の住ふ所ならんと。

かにかくと心に浮び出づる程の事を思ひ續けながら、そゝろに歩を進め行きたりしに、このあたりの風景は、我が住ひする方面よりも一層めてたく、心をなぐさむるもの多きを覺えたり。曠野には、いろ〳〵の花、時を得顏に吹き亂れ、青草の色あざやかに、梢涼しげに茂れる森の多きが内に、あまたの鸚鵡の飛び交ふさま、いと珍しく覺えたり、成らば一羽の鸚鵡を捕へて、之を飼ひ馴らし、物云ふ術を敎へばやと思ひしかば、種々苦心の末、棒にて一羽の若き鸚鵡を打落し、それを蘇生せしめて家に持ち歸りたり、されどよく物云ふことを習ひ覺えしは、數年の後なりしが、遂には我が敎へに從ひ、心安げに我が名を呼ぶやうになりぬ。さて瑣細の事なれど、次て起りたる一樁事あり、甚趣味を覺ゆべきことなれば、後に之を記さん。

この旅行の爲めに、我は頗る心を慰めたり。低地に於て、野兎と覺しきもの數頭と、幾疋の狐を見たれど、これまでに見たるものとは大に異なれり、されば數匹を殺したれど、之を食はんとは思はざりき。又幾多の美味を貯へ、食物に事を缺ざりければ、強て茹ふの要もなかりき、殊に山羊の肉、鳩の肉並に海龜の肉に加へて、乾葡萄さへ許多ありければ、ロンドン市のリーデンホール市場といへども、一坐の客に我れ程の珍味を供へんことは叶ふまじ、されば我が境遇は、實に哀れにはあるなれど、食物に事を缺かざりしのみか、寧ろ此れに富みて、滋味にさへ飽きげるは、大に感謝すべきことなりけり。

（註）リーデンホール市場は、英國ロンドン市の鳥獸市場にして、その開設甚古るし、往昔西班牙國の大使某、時の英國帝チアーレス第二世に語りて云へるやう、リーデンホール市場に賣買する肉類は、西班牙全國の肉よりも多からんと、爾後屢改良を加へられけるが、一千八百八十一年には金五十萬圓を投じ、二萬六千九百平方呎の面積を有する、壯麗なる市場を建設したり。本書著述當時は、此の如く盛大ならざりしは論なきも、亦著名の市場た

りしなり。

此旅行中、我は一日が程に、二哩以上を一氣に通過せしと絶えてなく、道すがら何物か、新に眼に觸るゝものもあらんかと、往きつ戻りつせること、度々なりしかば、ここにて一夜を明さんと思ひ定めし地に着きし頃は、いつも身體疲れはてたり。さて夜は或は一樹に登りて休みしことあり、否らざれば、野獸の來りたらんとき、我が眼を醒させて、近寄ると叶はざるやう、棧を一列に、樹と樹との間に建つらね、己れを取圍みて一夜を明したることもありけり。やがて海濱に着きて、あたりを見けるに、我が已に居を構へたる地は、此島の中最も不良の地なりしこと、忽ちに知られて、痛く驚きたり、そは何故ぞといふに、この海濱には海龜の居ること夥しく、滿地これを以て蔽はれんばかりなるに引かへて、我が已に居を構へたる海岸には、居ること一年半の間に、僅に三疋を見たるのみ、又こゝには、各種の鳥夥しくあり、その中には、我が未だ見ざりしものもありて、その肉は多くは美味なりしが、我は「ペングウィン」(モグリ鳥の類)と稱するものゝ外は、その名を知らざりき。

かく夥しき鳥類のことなれば、我が欲するまゝに射止むること叶ひけれども、無下に彈藥を費すも惜しければ、之にも增りて、我の賞美せし牝山羊の一匹を、成るべく射止めんものと、意を用ひたり、此方面には島の反對の方面よりも、山羊の數は多けれども、地勢平坦なれば、小山の上に登りて、狙撃するときよりも、山羊の我を見ること甚だ速なるをもて、之に近寄ること一層困難なりけり。

この方面の地は、我が住居する處に比ぶれば、心を樂しましめ慰むるもの多かりけれど、我は住居を移さんとは、少しも思はざりき、そは既に我住居と定まりて、そこに住み慣れたれば、こゝにある間さへも、家を離れて旅路にある如く思はれければなり。さても我は尙海濱に沿ひて、凡そ十二哩と思ぼしき程、東の方に進みしが、その海邊に、一本の大なる標柱を打立てゝ之を紀念と爲し、一先づ歸途に就くこととし、次回の旅行には我の住居より東の方に進みて、本島の他の方面に出て、かくて廻りて、再びこの標柱の處まで來らんとする豫定なりき、そは後段に說き分くべし。

さても、各所を檢分するに依りて、我最初の住居を見失はぬやうせん爲め、此島の全體の地形を容易く腦裡に收めおかんと思ひ、歸途は別の路に由りけるに、こは我誤りなりけり、凡そ二三哩程を來りけるに、いと大なる谿谷の中に降りしが、丘陵は四方を繞ぐりて、森林これを蔽ひければ、日指によるの外は、我行く道の方向を知るに由なく、それさへ、その日、その時に於ける太陽の位置を、豫てよく知るにあらざれば、また如何ともしがたかりけり。かてゝ加へて、我が谷間にありし三四日の間は、煙霧立ち籠めて、太陽を見ること叶はざりしかば、覺束なくも所々

を彷徨ひ、遂に止むことを得ず、海濱に出づる路を求め、かの標柱を搜がし、元來りし路を復らざるを得ざることゝはなれり、かくて安々と我家に歸りしが、暑氣甚しかりければ、銃器、彈藥手斧、其他の携帶品も、いと重く感ぜられたり。

この旅行中、我が狗は、一匹の小山羊を襲ふて、之を押へしかば、我はそれを止めんと、矢庭に走せ行きて、狗の口よりこれを救取りたり。豫てより一二頭の小山羊を得て、之を飼馴らし、往々はかゝる山羊の一種を蕃殖せしめ、彈藥のやがて盡きんその時に、食用に供ふること強ち難きにあらざるべしと、屢考へしこともありけれども、成るべくは、此小山羊を家に連歸らんと思ひたり。されば、小山羊の爲めに、頸輪を造り、常に携へ居ける紐にて、辛ふじて別莊まで牽き來り、そこに之を閉籠めて遣しおき、急ぎ歸宅したり、こは家を出でゝより早や一個月以上にも及びしかば、歸心矢の如くなりければなり。

さても宅に歸り來て、吊床の内に身を横へたるに、その愉快にして滿足なりしこと、言語に言表はすことを得ず。抑も此の度の小旅行には素より宿るべき處ろとてはなく、唯こゝかしこと彷徨ひたるなれば、其の不愉快なること、實に甚だしく、之れを我家に比らぶれば、我家は不足なき住居にして、身邊の調度要具も、一として慰樂を添ふる種ならぬはなかりければ、この島に足を留むることの、我が運命ならん間は、決して再び我家を離れて、遠く出行くまじとぞ、思ひ定めけるゝ

さる程に長旅の疲を慰めんとて、一週日の間家にやすらひて、思ふがまゝに起き臥し、口に適ふ物を食ひて、自ら我身をぞ歡待しける、かゝる中に既に馴れて、我が唯一の家族となり、剩へ我と懇意の間柄となりける鸚鵡のために、籠を造るといふ大切の事に日を送りけるが、又やがては、背て狹き柵内に閉ぢ込め置きける可憐なる小山羊の事を思ひ起し、これを連れ來るか、さなくとも食物を與ふべしと思ひて、別莊へ詣り見しに、前きに遣せし處に起臥し、外に出ることも叶はざれば哀れや殆ど飢餓に迫れりっ我は往きて見當り次第、蕎木の枝、又は灌木の枝など折り取り、柵越しに投げ與へ、其の食ひ了るを待ちて、前の如く索を頸に結び、之を連れ行かんとしけるに、飢餓の爲めに、野生の氣象どこへやら失せて、全く我に調馴しかば、索は約するにも及ばず、犬の如くに我に從ひ來れり、かくて我は怠らず之を飼ひ馴らしけるに、誠に柔順にして、愛らしく爲り、我家族の一員として、その後長く我を捨て去らざりき。

さても時は最早秋分の降雨季とはなりぬ、九月三十日は、我が此島に上陸して以來。二年目の紀念日なれば、例により嚴かなる儀式を行ひて之を祝しけれども、この孤島より救ひ出さるべき望の、待ちて効なきことは、此に來りし當初に異ならず、我は我が寂しき境涯を護らせ給ひし、不思議なる神の慈悲に對し、恭謙の心をもて、終日感謝の意を表はし、若し斯る慈悲を垂れさせ

給はざりしならば、我が境涯は、尙ほ一層悲慘なりしならんと、深く心にかしこみたり。又人々と自由に交はり、世間の快樂を恣にしたらんよりも、此淋しき境涯にありて、一層多幸の生涯を送ることを得ざるにあらずと、我をして大悟せしめ給へる、神の御惠に對して、衷心謝だりて感謝したり、竊に惟みるに、これぞ畢竟孤獨にして、人の交際もなき、此不自由、不如意をば、常に神の示現を以て補ひ給ひ、又は精靈の恩德を我が魂の上に通はせ給ひて、我を扶け、慰め且勵まし、この世にあつては、萬事を舉げて、神の攝理に任せ、來世にありては、神の永久不滅なる存在を望ましめ給へばなりと、實くもまたありがたく感じたり。

是に至りて、我は、我が現在の生活は、縱令ひ悲慘なる事情は伴へども、之を過去の生活の罪ふかく、幸少なく、且厭ふべきものに比ぶれば、何許幸福なるかと、漸く自ら觀念し、かくて悲むべき事、喜ぶべき事は、是れまでと全く其の趣を異にしたれば、我が願ひ望む所も、我が好み悅ぶ所も、また前と全く其の態を一新し、我が今日の感想は、始めて此島に來りしとき、即ち實に今より二年以前とは、全く異なるに至りぬ。是れまでは、銃獵の爲、若くは郊野見分の爲、をちこちと歩るき廻りし折、不圖我が身の、あぢきなき境遇を思ひ出でゝは、打しをれ、路も見えぬしげき森を見るにつけても、空に聳ゆる高き峰巒を望むにつけても、また己の住居する土地のあれ荒める樣を見るにつけても、いづれも哀を催ほす種ならぬはなく、はてしも知らぬ青海原は四方を取圍み、人も住まぬこの孤島は、我が爲めには、さながら放免の期もなき牢獄に異ならずと、一念こゝに及ぶ毎に、靜かなる心の海に、荒き波風俄に吹きすさみて、兩手をもがき、稚兒の如くに泣き叫びたることもありたり、又或る時は仕事に餘念なき際、この悲しき秋風急にそよ吹き渡れば、直ちに手を休め、椅子に腰打かけ、首を挽して嘆息すること一二時間に及びけり、されど是れにも增りて、尙鈍ましかりけるは、我は一日胸迫りて、或は泣きくづるゝか、又は怨み歎ちて、獨り叫び狂ふときは、頓に心の悲哀も盡きはつるにや、其まゝ何時となく、自然に消失するを常とし、神の攝理の事など、心に浮びくることは絕えてなかりき。

然るに今や、心機一轉して、毎日神の言葉を讀み、其の示し給へる福音を、日々の事にあてはめて、自ら慰め居たりけるが、ある朝の事なりき、いと悲しく哀れを催ほしゝかば、聖書を繙しきに「われ爾を去らず更に爾を棄じ」といふ一句に讀み到り、はたと手を拍ちて思ひけるやう、此一句は、これ我に示し給ひしものなり、若しさなくば、我が己れの境遇を顧みて、神にも人にも見放されたりとて、歎き悲しむこの瞬時に、いかでか斯くは我が眼に觸るゝとのあるべきと。かくて「それなれば、神にさへ見放されずば、世の人が悉く我を見棄てたればとて、又その成り行き何に惡しければとて、何事かあらん、縱令ひ世界を手に入れたりとて、神の冥助と祝福とを失はんには、その損失はなにゝ比すべきやうもなし」と獨言てゞ居たりける。

此時より我は心の中に推斷しけるやう、我若しこの世にて現在と異なる境遇に在りたらんには、恐らくかくの如くなるべしと想はるゝ狀態よりも、寧ろ現在の此淋しき孤獨の境涯にありて、一層多幸多福の生涯を送ること、決して不可能にあらずと、かくて我は斯る思想を以て、神が我を此處に誘ひ給へることを感謝し居たりしに、何にかは知らねども、痛く心に對へたるやうに覺えて、自ら聲を放ち「如何なれば汝はかくまで、僞善者となりたるか、汝は現在の境遇に曲げて身を安ぜんとすとも、畢竟悲しむべき境遇に相違なければ、こゝより救ひ出さるべく、衷心より神に禱るべき筈なるに、しかるを却てその現在の境遇をば、ありがたし辱なしなどと、僞れるは、是れ自ら欺く僞君子にあらずや」といふ聲、己の耳に入りし樣感じければ、しばし打案じて、感謝をば中止したれど、また思ふやう、たとへこの逆境にあるを、ありがたしと神に感謝するは、心を欺く業なるべけれど、神が此身に蒙らしめ給ひし、苦しき攝理の數々なりし、昔の境遇を顧み、その罪のいと深きを嘆ちて、自ら悔悟するを知るに至りしは、みな是れ神の御手引によるものなりと、眞心こめて深く感謝したり、又我はその昔決して聖書を繙きたることもなかりしに、曾て英國なる友人より我が許に送り越せし荷物の中に、我が注文をも待たで、聖書を入れ置きたること、又其の後難破船の中より思ひがけもなく、この書物を取出し來りしこと、みな是れ神の御心なれば、我はいかでか之に對して、感謝の意を表はさで息むべき。

さてもかく振舞ひ、かく思ひくらすうちに、早くも第三年目とはなりぬ、我が此年に爲したる事業の細目は、一々之を讀者に物語るを止めて、初年に於けるが如き繁冗を省くべけれど、我は概して安閑と空しく日を送りしことは甚稀なり、眼前にある日々の仕事に應じて、その時間を正しく取極めたり、即ち先づ、第一に神を拜し、聖書を讀む時間を、一日に三回と定めて、怠らず之に從事し、第二に食物をあさるが爲、銃を提げて外出する時間を、概ね毎朝三時間と定め、雨天の時は除きたり、第三には、銃殺し、若くは捕獵したる獲物を整頓し、之を乾燥し、保存し且つ之を調理することにて、此のために最も多くの時間を取られたり、大概此の如くなれど、太陽の中天にある季節は、日中には炎熱强くして、戸外に出づべからず、されば、我が働らき得たりと思はるべき時間は、夕刻の凡四時間にして、尙時々は、獸獵と仕事の時間を繰り換へ、朝は內にて働らき、午後には銃を提へて外に出でしこともありたり。

勞働の爲に充てたる時間の、此く短きが上に、我工事の困難にして、非常に多くの時間を要したる一事をば、今少しくこゝに加へて語るべし、前にも言へる如く、道具もなく、助手もなく、熟練もなきが爲め、我の企てし工事には、いづれも多くの時間を奪はれたり、例へば洞穴に用ひたる長き棚板一枚を作るに、全四十二日を費したるが如きこれなり、然るに此の如き仕事は、二人の木挽か、道具と鋸鼻とを備ふれば、僅かに半日にて同樣の木材より、能く六枚の板を作るとを

得べき、容易の事なりしなり。今其次第を述べんに、我が作らんとせしは、一枚の幅廣の板なれば、大木に非ざれば用を爲さず、さてこの大木を伐倒すに、三日を費し、枝を拂ひて材木とするに更に二日を費し、而して後にその兩面を、丁々と截りては削り、削りては截ること、幾千百回にして、漸く動かし得らるゝやうにし、次に之を轉回し、その一面をば、端より端まで、削りて之を平に且つ滑にし、次にその面を下に向け、又他の一面をそぎ削りて、遂に厚さ凡そ三吋程の板に製し、又兩面を滑にしたり。何人にても、此一事の物語を讀まんものは、我が雙手の勞働いかばかりなりしかは、容易に察知せらるべし、而も勤勞と忍耐とに由りて、我は能く此仕事のみならず、其他幾多の仕事を成し遂げたり、特に今製板の事のみを說くは、斯る小事の爲に、多分の時間を費やしたるは、何故なるかを示さんが爲めなり、即ち助手も道具もろくなくして、爲す所ろの仕事は、勤勞を要すること太だしく、又時を費すこと甚多き、その一例を示さんが爲めなり。然るにかく困難なりしかども、偏に忍耐と勤勞とを以て、撓まず幾多の事を成就したり、而して實に我が種々の事情に應じて、必要なりと認むる毎に、手を下して製作したる、各種の物品は、迫々後段に至りて、讀者の眼前に現はれ來るべし。

今は早や、豫て大麥と米との收穫あるべしと、待ちまうけ居たる十一月と十二月の月は來りぬ。この二種の穀物のために、堀り起したる地面は、餘りに廣からざりき、その故は、既に物語りし如く、嘗て我は乾燥季に種子を下せるため、一度の收穫をば全く失ひたりしかば、その種子の殘れるは、各々僅に半「ペック」の量に過ぎざりければなり。されどこれより生ずべき收穫は、相應にあるべしと、竊に望み居たりけるに、こはそも如何にぞや、意外なる種々の敵現はれ出て、幾んど之を防ぐこと叶はず、また將に全くこれを失はんとする危險にこそは出合ひけれ、その敵とは何ものなるか、先づ第一には山羊と我が兎と稱する野獸とにして、此二つの者は、晝夜の分ちなく、米麥の畠に潛み居り、若葉いづれば、輙ちその甘味を嘗め、その莖をして、出づるに暇なきまでに、これを貪り食ひけり。

さても、此害は如何にせば、善く之を防ぐことを得べきかと種々に考へけるに、遂に墻を繞らして、獸の侵入を防ぐの外なしと思ひければ、大に努力して、之をしつらへたり、嘗にそれのみならず、かの獸類は日々に我穀物を傷ひつゝありしかば、この工事はまた大至急を要したり。されど耕作せし地面は、我が收穫に相應せる、たゞ狹き面積なりしかば、凡そ三週日の日子を以て、全く垣を結ひ繞らし、かくて晝間は獸類の來るを窺ひて、之を銃殺し、夜間は狗を門柱に約りおきて、看守せしめしに、狗は終夜吠え叫びて止まざりけん、久しからずして、敵はその立場を見棄てゝ退きければ、こゝに穀物は善く成長して、漸く成熟せんとしたり。

穀物の若葉萠え出づる頃には、獸類の害に遇ひしが、その穗の熟するや、また鳥類群れ來りて、